令和元年度

日本大学博士論文

レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見に仮想接触が及ぼす効果
―日本人大学生を対象とした検討―

日本大学大学院文学研究科

心理学専攻博士後期課程

堀川　佑惟

目次

本論文の概要と構成 5

第I部　レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見 11

第 1 章　序論 13

1.1　レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見 13

1.2　日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見 20

第 2 章　異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の強さ 23

2.1　研究 1　異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見と他の集団に対する偏見との比較 23

第 3 章　レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度 37

3.1　研究 2　Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale 日本語 6 項目版の作成 37

3.1.1　調査 1　尺度の作成と信頼性・妥当性の検討，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度の男女差の検討 37

3.1.2　調査 2　回答への社会的望ましさ反応，尺度と潜在的態度との関連の検討 43

3.2　研究 3　Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale 日本語 20 項目版の作成と妥当性の検討 50

第 4 章　レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者のステレオタイプ 60

4.1　研究 4　共同性・作動性の 2 次元を用いたレズビアン及びゲイ男性ステレオタイプの検討 60

第 5 章　第I部総合考察　69
第II部　レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する偏見に及ぼす効果の検討　70
第 6 章　序論　72
6.1　仮想接触研究の概観　72
6.2　仮想接触の効果に関する解釈と議論　75
6.3　日本におけるレズビアン及びゲイ男性との仮想接触の研究の意義と課題　77
第 7 章　レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する日本の女性異性愛者の態度に及ぼす効果の検討　79
7.1　研究 5　レズビアンに対する日本の女性異性愛者の態度に仮想接触が及ぼす効果　79
7.2　研究 6　レズビアンとの仮想接触における言語的・行動的測度の順序効果の検討の試み　85
7.3　研究 7　レズビアンに対する日本の女性異性愛者の態度に仮想接触が及ぼす効果―カテゴリプライミングの効果との比較―　90
第 8 章　仮想接触が偏見に及ぼす効果の一般化可能性―精神疾患患者との仮想接触を扱った検討―　97
8.1　研究 8　精神疾患患者との仮想接触が精神疾患患者に対する態度に及ぼす効果　97
第 9 章　第II部総合考察　106
第III部　レズビアン及びゲイ男性との仮想接触効果に影響を及ぼす要因　109
第 10 章　イメージの利用可能性に関する研究の仮想接触研究への応用　110

10.1　イメージの利用可能性に関する研究の概観と仮想接触への応用可能性 111
10.2　研究 9　ゲイ男性ステレオタイプと一致するゲイ男性との仮想接触の効果 112
第 11 章　仮想接触への集団間接触研究の応用 119
11.1　集団間接触研究の概観と仮想接触への応用可能性 119
11.2　研究 10　自身・レズビアン・女性異性愛者の三者間での仮想接触がレズビアンに対する態度に及ぼす影響 121
第 12 章　第III部総合考察 135
第IV部　総合考察 137
第 13 章　研究結果の概要 139
13.1　日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見 139
13.2　レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見に対する仮想接触の影響 141
第 14 章　本論文の意義と今後の展望 143
14.1　日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見の研究への寄与 143
14.2　日本における仮想接触の研究への寄与 144
14.3　今後の展望 145
第 15 章　結論 147
引用文献 148
謝辞 158

本論文の概要と構成

第Ⅰ部　レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見

・異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の強さ

・レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度

・レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者のステレオタイプ

第Ⅱ部　レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する偏見に及ぼす効果の検討

・レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する日本の女性異性愛者の態度に及ぼす効果の検討

・仮想接触が偏見に及ぼす効果の一般化可能性―精神疾患患者との仮想接触を扱った検討―

第Ⅲ部　レズビアン及びゲイ男性との仮想接触効果に影響を及ぼす要因

・イメージの利用可能性に関する研究の仮想接触研究への応用

・仮想接触への集団間接触研究の応用

第Ⅳ部　総合考察

第I部　レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見

第I部は 5 章構成である。計 4 本の研究によって，日本の異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見について，態度とステレオタイプの観点から明らかにすることを試みた。

第 1 章「序論」ではまず，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見に関する先行研究を概観した。その後，その偏見に関する日本特有の問題を挙げた。

第 2 章「異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の強

さ」の目的は，研究 1 によって，異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の強さを，他の集団に対する偏見と比較することであった。この比較によって，日本の異性愛者の大学生がレズビアン及びゲイ男性に対する偏見を有すること，そしてその強さが黒人や精神疾患患者などの他の社会的マイノリティ集団と同等程度に見られることを確認した。

第 3 章「レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度」では，研究 2 と研究 3 の 2 本の研究を通して，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度を測定する尺度である日本語版 Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale（ATLG-J）の作成と妥当化を行った。そしてそれらの研究によって，日本におけるその態度が他国で行われてきた先行研究でみられたものと同様の概念であることを確認した。

第 4 章「レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者のステレオタイプ」では，研究 4 によって，共同性・作動性の 2 次元によってレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者のステレオタイプを表すことを試みた。その結果，女性異性愛者が持つレズビアンステレオタイプ，男性異性愛者が持つゲイ男性ステレオタイプが共に高共同性であり，伝統的女性ステレオタイプと同じ傾向がみられることが示された。

第 5 章「第I部総合考察」では，第 2 章から第 4 章までの結果を総括し，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見に対する実験的アプローチを行うために情報の整理を行った。

第II部　レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する偏見に及ぼす効果の検討

第II部は 4 章構成である。計 4 本の研究によって，レズビアンとのポジティ

ブな仮想接触（imagined contact / imagined intergroup contact）がレズビアンに対する偏見に及ぼす効果について検討することを試みた。

第 6 章「序論」では，まずこれまでに行われてきた仮想接触研究を概観した。その後，これまでのレズビアン及びゲイ男性との仮想接触の研究をまとめ，その課題の解決にあたって日本における仮想接触実験の追試の必要性について述べた。

第 7 章「レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する偏見に及ぼす効果の検討」では，レズビアンに対する女性異性愛者の偏見について，レズビアンとの仮想接触を行うことによる影響を研究 5 から研究 7 の 3 つの研究を通して検討した。3 つの研究の実験において，実験条件に割り当てられた参加者である女性異性愛者の大学生は，初対面の女性同性愛者と 2 人で休日を過ごす場面を想像した後に，その内容を用紙に書き出す実験操作を受けた。統制条件の操作として，研究 5，研究 6 では女性との仮想接触を，研究 7 では女性同性愛者について単に考える課題をそれぞれ行った。そしてその後，全ての参加者は，レズビアンに対する集団間不安，顕在的態度，行動をそれぞれ測定した。その結果，レズビアンとポジティブな交流を行うことを想像することによって，その後のレズビアンに対する顕在的態度や行動がポジティブになることが一部の研究で示唆された。ただし，それらの結果の再現性は，この 3 つの研究では認められなかった。

第 8 章「仮想接触が偏見に及ぼす効果の一般化可能性―精神疾患患者との仮想接触を扱った検討―」では，第 7 章でみられた仮想接触の効果がレズビアンとの仮想接触以外でも見られるものなのか，あるいはレズビアンとの仮想接触特有の効果であるのかを確認するため，研究 8 を行った。同性愛者以外の外集団のメンバーとして精神疾患患者を取り上げ，研究 7 と同様の方法で仮想接触

の効果を検討した結果，レズビアンとの仮想接触とは異なる傾向が見られた。

第 9 章「第II部総合考察」では，第 7 章と第 8 章の結果を総括し，レズビアンとの仮想接触の効果と結果の解釈可能性について考察した。

第III部　レズビアン及びゲイ男性との仮想接触効果に影響を及ぼす要因

第III部は 4 章構成である。計 2 本の研究によって，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度をポジティブにするためのより効果の強い仮想接触の手段を提案するため，仮想接触効果に影響を及ぼす要因について検討した。

第 10 章「イメージの利用可能性に関する研究の仮想接触研究への応用」では，まず，イメージの利用可能性に関する研究について概観した。そして，仮想接触においても接触場面の想像しやすさによって効果を強められるのではないかと提起した。その仮説を検証すべく，研究 9 によって，ゲイ男性との交流がより想像しやすい場合，より想像しにくい場合に，仮想接触によってその後のゲイ男性に対する態度にどのような影響が及ぶかを検討した。具体的には，ゲイ男性である仮想接触相手がゲイ男性ステレオタイプと一致するポジティブな性格特性を有している，あるいは，ゲイ男性ステレオタイプと不一致であるポジティブな性格特性を有している，という情報が参加者に与えられる場合に，そのような情報が与えられない通常の仮想接触よりも，仮想接触によってゲイ男性に対する男性異性愛者の態度がポジティブになるかを検討した。その結果，ゲイ男性ステレオタイプと不一致であるポジティブな性格特性を有するゲイ男性との仮想接触で，通常の仮想接触よりもその後の集団間不安が高いことが示された。

第 11 章「仮想接触への集団間接触研究の応用」では，まず，集団間接触に関する研究について概観した。そして，自身と接触相手である外集団のメンバーの双方と仲が良い内集団のメンバーを交えた三者での接触の想像が，二者間での仮想接触よりも外集団のメンバーに対する偏見をより低減しやすい可能性を提起した。その仮説を検証すべく，研究 10 によって，三者間でのレズビアン及びゲイ男性との仮想接触が社会的認知に及ぼす影響について検討した。具体的には，仮想接触を行うレズビアンが，同席する自身と仲が良い同性の異性愛者と仲が良い場合，同席する自身と仲が悪い同性の異性愛者と仲が悪い場合それぞれについて，これまで扱ってきた通常の二者間の仮想接触と比較してレズビアンに対する異性愛者の態度がどのように変わるかを検討した。その結果，想像する場面に同席する同性の異性愛者がいる場合には，いない場合よりも，仮想接触後のレズビアンに対する集団間不安が高いことが示された。

第 12 章「第III部総合考察」では，第 10 章，第 11 章の研究を総括し，レズビアン及びゲイ男性に対する仮想接触研究の限界と展望について議論した。

第IV部　総合考察

第IV部は 3 章構成である。本論文の総合考察として，研究結果の概要をまとめ，研究の意義と今後の展望について述べた。

第 13 章「研究結果の概要」では，本論文における研究の結果を，日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見と，それに対する仮想接触の効果とに分けてまとめた。第 I 部で示された日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見については，第 II 部以降の仮想接触研究において，諸外国におけるその偏見と同様の概念として扱えること，その一方で日本特有の要因によって説明され得る可能性である概念であることがそれぞれ示唆

されたことを述べた。日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する仮想接触の影響については，女性異性愛者が行うレズビアンとの仮想接触にはレズビアンに対する偏見を低減する効果があると考えられること，態度をポジティブにする効果は集団間不安の低減を介さない効果であることが示されたことをそれぞれ述べ，それらについて第 I 章における研究結果も踏まえた考察を行った。

第 14 章「本論文の意義と今後の展望」では，本論文の意義と今後の展望を述べた。レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見の研究としての意義，仮想接触の研究としての意義をそれぞれ述べた後に，今後の展望についてまとめた。前者の意義として，日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の顕在的態度を測定する手段として ATLG-J を開発・妥当化したこと，レズビアンステレオタイプとゲイ男性ステレオタイプの双方について共同性－作動性の次元から示し，具体的な性格特性語レベルでも示したことの 2 点を挙げた。後者の意義として，著者が知る限り本論文の研究が日本における初の仮想接触研究であるために研究の方法や結果が今後の研究において参考となり得ること，レズビアン，ゲイ男性，精神疾患患者との仮想接触が偏見に及ぼす影響についての知見をもたらしたこと，これまでの研究で扱われてきた仮想接触の手続きを改善するための多くの示唆が得られたことの 3 点を挙げた。

第 15 章「本論文の結論」では，本論文の結論を述べた。

第**I**部

レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見

個人のセクシュアリティは，生殖器や染色体などの生物学的要因によって規定される身体性または生物学的性，自身の性についての認識である性自認，恋愛や性的欲求の対象となる相手の性を示す性的指向，そして，自身を社会にどのような性のものとして表現するかという社会的性または性表現といった要因の組み合わせにより規定される。本論文では，出生時の身体性と性自認が一致しており，かつ自身と同じ性を指向する同性愛者を扱う。このうち，その 3 要素が全て女性である者をレズビアン，全て男性である者をゲイ男性とする。また，出生時の身体性と性自認が男性，性的指向が女性である者を男性異性愛者と，出生時の身体性と性自認が女性，性的指向が男性である者を女性異性愛者とそれぞれ定義する。

本論文は,日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見に,レズビアン及びゲイ男性との仮想接触が及ぼす影響の研究を扱ったものである。

この第I部は,日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見とはどのような概念であるのかを明らかにするものである。まず第 1 章では，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見に関する先行研究を概観し，その後，その偏見に関する日本特有の問題について述べる。

第 1 章　序論

1.1　レズビアン及びゲイ男性への偏見

偏見は,「誤った情報や不完全な情報から導かれる一般化にもとづいて，他と区別できる集団に対して形成される敵対的ないし否定的な態度（Aronson, 2012 岡訳 2014)」と定義される。レズビアンとゲイ男性それぞれに対する異性愛者の偏見に焦点を当て，それらの個人差や実験的介入による変化などを扱った社会心理学的研究は，かつて世界中で病気とみなされていた同性愛が DSM（Diagnostic and Statistical manual of Mental disorders）の診断基準から外されて以降の 1980 年代頃から，欧米を中心として今なお行われている。

レズビアンやゲイ男性ら同性愛者に対する差別や偏見はあらゆる場面に存在し，当事者らを生きづらくしている。日本におけるその一例として，法制度やそれに伴う社会制度にみられるものが挙げられる。日本国憲法の第 24 条第 1 項「婚姻は，両性の合意のみに基づいて成立し，夫婦が同等の権利を有することを基本として，相互の協力により，維持されなければならない。」からは，婚姻関係が「両性の合意」のみに基づく「夫婦」のものであること，同性婚が想定されていないことがうかがえる。このことによって同性カップルは，互いを配偶者とも親族ともみなされ得ないために，不動産契約や遺産相続など，さまざまな社会制度の利用に実質的に制限をかけられている。近年では，一部の自治体で同性間でのパートナーシップが制度化されていることなどから，日本の人々が有する同性愛に関する価値観は少なからず多様化していることがうかがえる。しかし一方で，前述の条文を含む日本国憲法が，制定から 70 年以上が経過した現代でも日本の人々によって維持され続けていることもまた事実である。そしてそのために，前述の社会的な人権問題については，根本的な解消には未だ至っていないと考えられる。

このような同性愛者に対し差別的な旧体質的社会制度の背景には，ヘテロセクシズムという，異性愛こそが自然であり異性愛的でないものを認めないという異性愛主義的な観念体系があると考えられている（Herek, 1990）。そして，Hidaka, Operario, Takenaka, Omori, Ichikawa, & Shirasaka（2008）及び日高・Operario・岳中・大森・市川・白阪（2008）は，現代の日本における非異性愛者の自殺未遂率について，男性では 24.5%，女性では 20.7%という値を報告した。これらの値は，異性愛主義社会における同性愛者らの経済的・社会的役割的な生きづらさなどが精神的健康に及ぼす影響を反映しているのではないかと考えられよう。

これまでのレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度研究では，その関連概念や男女差について，すなわちどのような異性愛者がレズビアン及びゲイ男性に対しネガティブな態度を有するかについての検討がなされてきた。

レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度との関連概念　レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度と関連する主な概念として，セクシズム，伝統的・権威主義的な価値観，エイズに対する態度，伝統的家族観が挙げられる。

セクシズムとは，女性の役割を伝統的な性役割に固定化する性差別意識である。Glick & Fiske（1996）によると，セクシズムは単なる女性嫌悪ではなく，伝統的な性役割に従わない女性に対する敵意的な態度からなる嫌悪的セクシズム（Hostile Sexism; 以下，HS とする）と，伝統的な性役割に従う女性に対する好意的な態度からなる好意的セクシズム（Benevolent Sexism; 以下，BS とする）の 2 つの下位概念が存在する，両面価値的なものである。また，Glick & Fiske（1996）は，セクシズムの背景には異性愛的な欲求や信念があると指摘し，それが好意的セクシズムに含まれる概念として位置付けられることを示している。

そして，このようなセクシズムや伝統的家族観など，伝統的な性役割についての信念は，同性愛者がそれらの信念に反するものであると考えられているために，同性愛者に対する態度との関連があると考えられる（Sakalli, 2002）。さらに，そのような伝統的な性役割観に対し同性愛者が批判的であることや，一部の政治や宗教の指導者が同性愛者に対し非難的であることから，権威主義的な価値観を有する人ほど同性愛者に対する態度がネガティブであると考えられる（Whitley & Ægisdóttir, 2000）。

一方，エイズに対する態度は，特にゲイ男性に対する態度との関連がみられている（Herek & Glunt, 1991）。その背景として，「HIV 陰性であるゲイ男性同士のセックスでもその感染は起こり得る」といった，エイズをゲイ男性と強く結び付ける誤った考えが広まっていることが示されている（Herek & Capitanio, 1999）。

先行研究では，同性愛者に対する態度と各関連概念との相関も示されている。HS，BS との間にはそれぞれ rs = .21－.30，rs = .13－.21（Nagoshi, Adams, Terrell, Hill, Brzuzy, & Nagoshi, 2008; Sakalli, 2002）権威主義の指標のひとつとして用いられた教条主義との間には rs = .21－.34（Herek, 1988）の，伝統的家族観との間には rs = .48－.63（Herek, 1988）の相関がみられている。ゲイ男性に対する態度とエイズに対する高圧的な態度との間には，r = .42（Herek & Glunt, 1991）の相関がみられている。

レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度の男女差　多くの先行研究において，ゲイ男性に対する男性異性愛者の態度はレズビアンに対する男性異性愛者の態度よりもネガティブであること，男性異性愛者は女性異性愛者よりもゲイ男性に対する態度がネガティブであることが示されている。すなわち，同性愛者に対する異性愛者の態度の中でも，ゲイ男性に対する男性異性愛者の

態度は特にネガティブである。

このような違いの背景については,いくつかの説明が考えられる。たとえば,レズビアンはゲイ男性とは違い男性に性的なコンテンツとしてみなされやすい（Louderback & Whitley, 1997; Nyberg & Alston, 1977）ために比較的ポジティブに捉えられやすい。また，男性異性愛者はゲイ男性から，女性異性愛者はレズビアンから望まない性的接触を受け得るという認知を持つ。特に男性は女性に対し社会的な性的優位があるために，男性異性愛者は女性異性愛者に比べ性的脅威に晒される機会が少なく，それに対する対処方略も苦手であると考えられる。そのために，自らに望まない性的接触を行うかもしれないという認知をゲイ男性に対し強く有し得るのだと考えられる（Kite & Whitley, 1996）。

レズビアン及びゲイ男性に対し異性愛者が持つステレオタイプ　カテゴリーに基づいた反応のうち，偏見は感情的な要素である（Fiske, 1998）。一般に，この偏見は，認知的な要素であるステレオタイプがネガティブな感情と結び付いたものであるとされる。

これまでの研究では，同性愛者らに対し異性愛者が有するステレオタイプについて，ゲイ男性を中心に検討がなされてきた。まず，ゲイ男性ステレオタイプについて，生物の存在における基本的なモダリティ（Bakan, 1966）とされる共同性・作動性の 2 次元で表す試みがある。Bakan（1966）によると，共同性（communion）とは，個人が属するより大きな有機体への参加を意味するものであり，共存の感覚，接触，開放，非契約的協力，抑圧の欠如と除去を示す。また，作動性（Agency）とは，個としての有機体の存在を意味するものであり，自己防衛，自己主張，自己拡張，分離の形成，疎外感，孤独，抑制の促進，考え・感情・衝動の抑圧を示す。Fiske, Cuddy, Glick, & Xu（2002）は，社会的なカテゴリに対する多くのステレオタイプが高共同性かつ低作動性，または低共

同性かつ高作動性で説明することができる一方で，ゲイ男性はその例外のひとつであり，共同性・作動性ともに中程度であることを示した。

また，レズビアンステレオタイプ，ゲイ男性ステレオタイプについて，それぞれ男性性と女性性の 2 次元で表す試みもある。Blashill & Powlishta（2009）は，ゲイ男性は男性異性愛者よりも女性性を高く，男性性を低く評される一方で，レズビアンは女性異性愛者よりも男性性を高く，女性性を低く評されることを示した。ヘテロセクシズムが根強い現代社会においては，性役割からの逸脱を批判される同性愛者に対するステレオタイプを男性性・女性性の 2 次元で表すことが可能であると考えられる。

一般に伝統的男性ステレオタイプは低共同性・高作動性，伝統的女性ステレオタイプは高共同性・低作動性とそれぞれ表される。このことを踏まえると，ゲイ男性に関する Fiske, Cuddy, Glick, & Xu（2002）の結果と Blashill & Powlishta（2009）の結果は一貫したものであると考えられる。また，レズビアンステレオタイプを共同性・作動性の 2 次元上に表す場合には，女性異性愛者よりも低共同性・高作動性の位置に表せるであろう。

レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度の測定　レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度を測定する尺度として世界で広く用いられてきたのは，ATLG Scale（Attitudes Toward Lesbian and Gay Men Scale）である（Worthen, 2013）。Herek（1988）が作成した原版の ATLG Scale は，レズビアンとゲイ男性それぞれに対する異性愛者の態度は「非難－寛容」の 1 因子構造からなる（Herek, 1984），という考えのもと作成された，ATL（Attitudes Toward Lesbians） Subscale と ATG（Attitudes Toward Gay Men） Subscale，各 10 項目の 2 つの下位尺度からなる 20 項目のリッカート尺度である。高い信頼性（Herek, 1988, 1994）が示されている他，弱い社会的望ましさ反応との関連（Herek, 1988），収束的妥当性

（Herek, 1988; Herek & Capitanio, 1999）から高い妥当性も確認されている。オランダ語版（Meerendonk, Eisinga, & Felling, 2003），トルコ語版（Gelbal & Duyan, 2006），チリ版（Cardenas & Barriebtis, 2008）など，多くの言語や地域に合わせての翻訳や妥当性検証がなされ，当該分野の研究の追試や国際比較が広く行われていることからも，この尺度の妥当性がさまざまな文化圏で広く認められていることがうかがえる。すなわちこの尺度は，当該分野の研究が世界で広く発展した要因のひとつであるといえる。

現在，ATLG Scale にはいくつかの短縮版尺度が存在する。それらのうち，著者が確認した範囲で最も新しく項目数が少ない尺度は，Herek & McLemore (2010)の Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale, Revised 3-item version（以下，ATLG-R-S3 とする）である。ATLG-R-S3 は，ゲイ男性に対する態度を測定する ATG Subscale3 項目と，レズビアンに対する態度を測定する ATL Subscale3 項目の，計 6 項目からなる。より少ない項目数で簡便にレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度を測定できることは有用であると考えられるものの，この ATLG-R-S3 については妥当性検証の報告が著者の確認した限りではなされていない。その妥当性が認められるためには，更なる検討が必要である。

上述の ATLG Scale のような記述的な回答は，社会的望ましさ反応によってポジティブな方向へと歪められる場合がある。社会的に望ましくない態度をそのまま表出することは，自らの社会的評価を下げることにつながるためである（Greenwald & Banaji, 1995）。この社会的望ましさ反応は，「被験者が社会的規範からみて望ましいとされる方向で設問に答える反応形式（北村・鈴木, 1986）」と定義される。

これまでの態度研究においては，この社会的望ましさ反応の問題を解決するためにさまざまな手段が用いられてきた。本論文で扱うのはそのうち 3 種類で

ある。1 種類目は，社会的望ましさ反応そのものを尺度によって測定し，その尺度の得点と調べたい態度を測定する尺度の得点との相関が弱いことを示す手段である。ATLG Scale についても，社会的望ましさ反応を測定する顕在指標との有意な関連がないことが示されている（Herek, 1988）。

2 種類目は，態度の対象となる集団のメンバーに対する行動を測定する手段である。態度と行動がどのように，どの程度結び付いているかについてはさまざまな議論があるものの，特定の外集団やそのメンバーに対する無意識的な行動は，社会的望ましさ反応による統制がなされていないその相手に対する偏見を反映しているものと考えられる。特に，同性愛者のような特定の集団に対する差別問題を背景とした研究の場合，差別的な言動の測定は重要性を増すであろう。

そして 3 種類目は，潜在的態度の測定である。潜在的態度は，意識的な統制がなされないが故に社会的望ましさ反応の影響を受けにくい。この潜在的態度に対し，質問紙法などによって測定される，意識的な統制がなされ得る態度を顕在的態度と言う。潜在的態度の指標として最もポピュラーなものは，潜在連合テスト（Implicit Association Test, 以下 IAT とする; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998）のように反応時間を用いて，態度の対象となる外集団とポジティブな概念，ネガティブな概念との連合の強さを測定するものである。別の測定方法として，感情誤帰属手続き（Affect Misattribution Procedure, 以下 AMP とする；Payne, Cheng, Govorun, & Stewart, 2005）という，プライム刺激に対する感情反応がその直後に呈示されるターゲット刺激に誤帰属される現象を利用し，プライム刺激に対する「快―不快」「好き―嫌い」などの評価を間接的に測定できる潜在指標も存在する。

1.2　日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見

アメリカやヨーロッパなどの諸外国では，ここまでで述べてきたさまざまな手段によって，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者のネガティブな態度やその関連要因，そしてそれを低減する手段についての検討がなされてきた。一方，日本においては，ほとんどその検討がなされていない。

日本で研究が少ない理由のひとつとして，同性愛者または同性愛に対する態度を測定するための，妥当性が確認された日本語の尺度がほとんど公表されていないことが挙げられよう。これまでに日本で用いられてきた同性愛者または同性愛に対する態度の顕在的測度には，独自に項目を収集し因子分析を行ったもの（宮澤・福富, 2008; 和田, 1996, 2008）がいくつか存在する。しかし，それらの尺度に関する妥当性の報告は著者が知る限りではみられない。また，これらは諸外国で行われた先行研究で扱われてきたいずれの尺度とも異なる因子構造の尺度である。

もうひとつの理由として，日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見の問題が，諸外国よりも表立ったものでないことが考えられる。日本におけるこの偏見については，諸外国におけるそれとは異なる背景に基づいているという指摘が多い。風間（2016）は，日本に存在する「同性愛を私的な趣味・嗜好として許容する独自の寛容な文化が存在するという言説」が，日本において男性同性愛嫌悪を隠蔽し，男性同性愛を秘匿すべきものとする役割を担ってきたことを論じている。小宮（2015）も，日本における同性愛者に対する差別は英国と比較すると隠微であり陰湿である，と指摘する。山下（2016）も同様に，日本において異性愛でない性的指向の人々は，諸外国とは異なり法律上迫害も保護・承認もなされておらず，いないことにされている，不可視化されていると述べている。これらの指摘は，日本においては諸外国以上に同性

愛について触れること自体がタブー視されていることを示す。原田（2005）も，日本の地域社会において同性愛に関する話題がタブーとされていることを述べている。このように，日本における同性愛者が不可視化されていることについての指摘は多くみられる。ただし，実際に日本と諸外国との比較を行った研究は著者が知る限りではない。

第Ⅰ部の焦点　以上を踏まえると，諸外国における先行研究を基に日本の同性愛者に対する異性愛者の偏見の研究を行うにあたっては，まずその偏見がどの程度存在しているか，そしてその偏見が諸外国における偏見とどの程度同様のものであるかを確認する必要があろう。この第Ⅰ部ではまず，レズビアン及びゲイ男性に対する偏見の程度を，他の集団に対する偏見と比較することによって確認した。そして，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度と，その背景となるステレオタイプについて，先行研究と同様の結果がみられるかを確認した。

レズビアン及びゲイ男性に対する偏見の程度については，男性，女性，そして偏見研究で社会的マイノリティとしてよく扱われる黒人と精神疾患患者との比較を行った。この比較によって，性的指向が同性であるか異性であるかによってどの程度偏見の差があるか，他の社会的マイノリティと同程度の偏見の強さを持たれているかを確認した。

態度については，ATLG Scale（Herek, 1988; Herek & McLemore, 2010）を日本語訳・妥当化し，それを用いて男女差などの検証を行った。この日本語訳によって，同性愛者に対する態度を測定する妥当性の高い尺度が日本にもたらされると考えられる。加えて，諸外国で広く用いられてきた ATLG Scale を用いることは，レズビアンとゲイ男性それぞれに対する態度の個人差や実験的介入による変化を測定した先行研究の日本における追試をはじめ，当該領域におけるさ

まざまな研究の展開に繋げやすい。このことは，今後の研究における，当事者らの生きづらさをどのように解消していくかについての議論の進展にも結び付くであろう。

異性愛者が持つレズビアン及びゲイ男性ステレオタイプについては，共同性と作動性の 2 次元を用いた検討を行った。その際，伝統的男性ステレオタイプは低共同性・高作動性，伝統的女性ステレオタイプは高共同性・低作動性とそれぞれ表せることを踏まえた。また，この 2 次元でうまく表すことができない可能性も考慮し,それぞれのステレオタイプを表す性格特性語を検討に用いた。すなわち，共同性・作動性の 2 次元でレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者のステレオタイプを表すことができなかった場合には，どの性格特性語がそのステレオタイプに当てはまりが良いかを検討できるようにした。

第 2 章　異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の強さ

第 2 章では，異性愛者の大学生がレズビアン及びゲイ男性に対する偏見をどの程度持っているかを確認する。

この章にて報告する研究 1 では，偏見の程度について，男性，女性，そして偏見研究で社会的マイノリティとしてよく扱われる黒人と精神疾患患者との比較を行った。そしてこの比較によって，性的指向が同性であるか異性であるかによってどの程度偏見の差があるか，他の社会的マイノリティと同程度の偏見の強さを持たれているかを確認した。

2.1　研究 1　異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見と他の集団に対する偏見との比較

目的

研究 1 の目的は，異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の強さを，他の集団に対する偏見と比較することである。この比較によって，日本の異性愛者の大学生がレズビアン及びゲイ男性に対する偏見を有するかどうか，そしてその強さがどの程度のものであるかを確認する。特に，男性異性愛者の大学生が持つゲイ男性に対する偏見と，女性異性愛者の大学生が持つレズビアンに対する偏見について，他の集団に属する人物に対する偏見との比較を行う。

この検討を行うにあたって，社会的望ましさ反応が回答に反映され得ることに考慮し，3 つの対策を行う。1 つ目に，社会的望ましさ反応を尺度によって測定し，その得点と偏見の指標との関連を確認した上でその得点を共変量として分析に用いる。2 つ目に，各集団に対する偏見を順位で示させることによって，

自分は全ての集団の人々に対して平等である，という社会的に望ましい回答が行われにくいようにする。3 つ目に，自身の考えだけではなく，多くの日本人男性，多くの日本人女性がどう思うかを予想して答えるよう尋ねることによって，社会や周囲からどの程度の偏見を持たれているかの認知を測定し，間接的に参加者自身の偏見を測定する。

方法

本研究は，日本大学文理学部の研究倫理委員会より承認を得て行われた。

大学の講義内にて無記名の質問紙調査を実施した。実施に際して，調査への参加の任意性や個人情報保護についてなどの研究倫理に関する説明を行った。大学生 127 名が参加し，自認する性が出生時の身体性と一致する異性愛者 103 名(男性 48 名, 女性 55 名)を分析対象とした。平均年齢は男性 18.90 歳(*SD*=1.26), 女性 18.80 歳（*SD*=1.01）であった。

質問紙の構成　質問紙は設問 A-L までで構成された。

設問 A は，特定の集団に属する同年代の人物との社会的距離を測定するものであった。「あなたは，一人で参加する初めての飲み会で，**A の位置に先に座っている以下の特徴を持つ人物に「近くに座って話そう」と誘われました。あなたはどこに座りますか。**座る位置の数字を○で囲んでください。」という教示のもと,「あなたと同年代の男性」「あなたと同年代の女性」「あなたと同年代の黒人」「あなたと同年代の精神疾患患者」「あなたと同年代のゲイ男性」「あなたと同年代のレズビアン」の 6 名それぞれが長机の左端に座っている図(Figure 2.1)を呈示し，その隣 7 席のいずれに座るかを図示させるものであった。外集団の呈示順についてはカウンターバランスを取った。

設問 B から J は,「男性」「女性」「黒人」「精神疾患患者」「ゲイ男性」「レズビアン」の 6 つの集団に属する人物に対する相対的な顕在的態度を測定するも

のであった。設問 B では，上述の 6 つの集団名を呈示し,「あなたが好きな順」に，順位の重複なく 1 位（最も好き）から 6 位（最も好きではない）までの順位を付けるよう求めた。集団名の呈示順についてはカウンターバランスを取った。同様に，設問 C では「多くの日本人男性が好きな順に」，設問 D では「多くの日本人女性が好きな順に」それぞれ順位を予想して付けるよう求めた。設問 E，F，G でも同様に,「あなたが」,「多くの日本人男性が」,「多くの日本人女性が」不快だと感じる順に，それぞれ順位の重複なく 1 位（最も不快）から 6 位（最も不快でない）までの順位を付けるよう求めた。設問 H，I，J でも同様に,「あなたが」,「多くの日本人男性が」,「多くの日本人女性が」恐いと感じる順に，それぞれ順位の重複なく 1 位（最も恐い）から 6 位（最も恐くない）までの順位を付けるよう求めた。

設問 K は，バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版（以下，BIDR-J とする；谷, 2008）であった。BIDR-J は，社会的望ましさ反応について「本当に自分の自己像であると信じて無意識的に社会的に望ましく回答する反応」である自己欺瞞因子と「故意に回答を良い方向にゆがめて，真の自己像を偽る反応」である印象操作因子の 2 因子構造でそれぞれ測定する尺度である。「私は自分で決めたことを後悔しない。」「他人には言えないようなことをしたことがある。」などの 24 項目に対し，1（全くあてはまらない）から 7（非常にあてはまる）

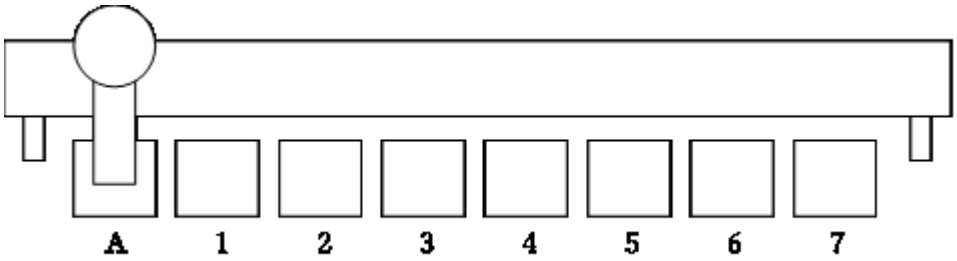

Figure 2.1 設問 A で呈示された社会的距離測定のための図（研究 1）。

までの 7 段階評定で回答を求めた。

設問 L はフェイスシートであった。年齢，国籍，身体性，性自認，性的指向，これまでのレズビアン及びゲイ男性それぞれとの接触経験についての質問，自由記述欄によって構成された。このフェイスシートへの回答で，身体性・性自認・性的指向が男性・男性・女性指向，あるいは女性・女性・男性指向の参加者のみが分析対象となった。

結果

社会的距離　座位の遠さと社会的望ましさ反応について，記述統計量を Table 2.1 に示す。BIDR-J の自己欺瞞因子の信頼性は.α=.73，印象操作因子の信頼性は.67 であった。

座位の遠さと社会的望ましさ反応との順位相関について，Table 2.2 に示す。男性参加者では，自己欺瞞得点とゲイ男性との座位の遠さに有意な負の順位相関（r=-.32, p=.03）が，レズビアンとの座位の遠さに負の順位相関の有意傾向（r=-.28, p=.052）がそれぞれ見られ，印象操作得点と精神疾患患者との座位の遠さに負の順位相関の有意傾向（r=-.26, p=.08）が見られた。男性異性愛者は自己欺瞞的であるほどゲイ男性との座位を近くすることが示された。女性参加者では，自己欺瞞得点と黒人との座位の遠さに有意な負の順位相関（r=-.37, p=.006）が，精神疾患患者との座位の遠さに負の順位相関の有意傾向（r=-.26, p=.06）がそれぞれ見られ，印象操作得点と男性との座位の遠さに正の順位相関（r=.38, p=.005）が，レズビアンとの座位の遠さに正の順位相関の有意傾向（r=.27, p=.054）がそれぞれ見られた。女性異性愛者は自己欺瞞的であるほど黒人との座位を近くし，印象操作的であるほど男性との座位を遠くすることが示された。

参加者の性（男対女）×集団（男性対女性対黒人対精神疾患患者対ゲイ男性対レズビアン）の 2×6 の混合計画分散分析を行った（Figure 2.2）。座位の遠さに

Table 2.1
特定の集団に属する人物との座位の遠さと社会的望ましさ反応（自己欺瞞・印象操作）の記述統計量（研究1）

		座位の遠さ												社会的望ましさ反応			
		男性		女性		黒人		精神疾患患者		ゲイ男性		レズビアン		自己欺瞞		印象操作	
参加者	*n*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
男性	48	1.15	0.36	1.19	0.39	1.35	0.93	1.77	1.22	1.72[a]	1.17	1.35	0.73	3.55	0.79	3.67	0.79
女性	55	1.34[b]	0.52	1.06[b]	0.23	1.43[b]	0.60	1.62[b]	0.69	1.36[b]	0.59	1.42[b]	0.60	3.30	0.86	3.66	0.78

注）[a] n=47, [b] n=53

Table 2.2
特定の集団に属する人物との座位の遠さと社会的望ましさ反応（自己欺瞞・印象操作）との順位相関（研究1）

		男性	女性	黒人	精神疾患患者	ゲイ男性	レズビアン
男性参加者	自己欺瞞	-.09	-.23	-.21	-.20	-.32 *a	-.28 †
（n=48）	印象操作	-.05	.01	-.12	-.26 †	-.03 a	-.17
女性参加者	自己欺瞞	-.12	-.13	-.37 **	-.26 †	-.15	-.15
（n=53）	印象操作	.38 **	.22	.12	-.16	.13	.27 †

† p < .10, * p < .05, ** p < .01.
注）[a] n=47.

ついて部分的に社会的望ましさ反応がみられたため，自己欺瞞得点と印象操作得点を共変量とした。その結果，交互作用が有意であった（F(5,455)=2.72, p=.04, η_p^2=.03）。男女の参加者それぞれについて集団間の差を調べるため単純主効果を調べた結果，男性参加者（F(5,455)=8.461, p<.001, η_p^2=.18），女性参加者（F(5,455)=5.033, p<.002, η_p^2=.10）ともに有意であった。男性参加者について Shaffer 法による多重比較を行った結果，男性－精神疾患患者間，男性－ゲイ男性間，女性－精神疾患患者間，女性－ゲイ男性間で有意な差がみられ（|t|s(91)>3.42, adjusted p<.01），男性及び女性に対する座位よりも精神疾患患者及びゲイ男性に対する座位の方が有意に遠いことが示された。女性参加者について Shaffer 法による多重比較を行った結果，女性－男性間，女性－黒人間，女性－精神疾患患者間，女性－レズビアン間で有意な差がみられ（|t|s(91)>3.19,

adjusted p<.02)，女性に対する座位よりも男性，黒人，精神疾患患者及びレズビアンに対する座位の方が有意に遠いことが示された。

好意の順位　好意の順位の設問群について，無回答であった参加者が設問によって最大 6 名みられ，うち数名が自由記述欄に順位を付けることができない旨の記述をしていたため，この設問群について無回答であったデータは全て 1 位の回答として分析に含めた。同様に，部分回答であった 1 名のデータについては，欠損回答の箇所を残りの順位のうち最高位の回答として分析に含めた。例えば，1 位と 2 位のみ回答し他の 4 集団が無回答であった場合には，残りの 4 集団を 3 位として分析に含めた。ただし，この設問以降，フェイスシートを含め全ての問いに無回答であった場合には，その回答を分析から除外した。

男女参加者別に示した好意の順位について，Figure 2.3 に示す。

男性参加者の男性，女性，黒人，精神疾患患者，ゲイ男性及びレズビアンに対する好意の順位に差があるかを検討するため，フリードマン検定を実施した

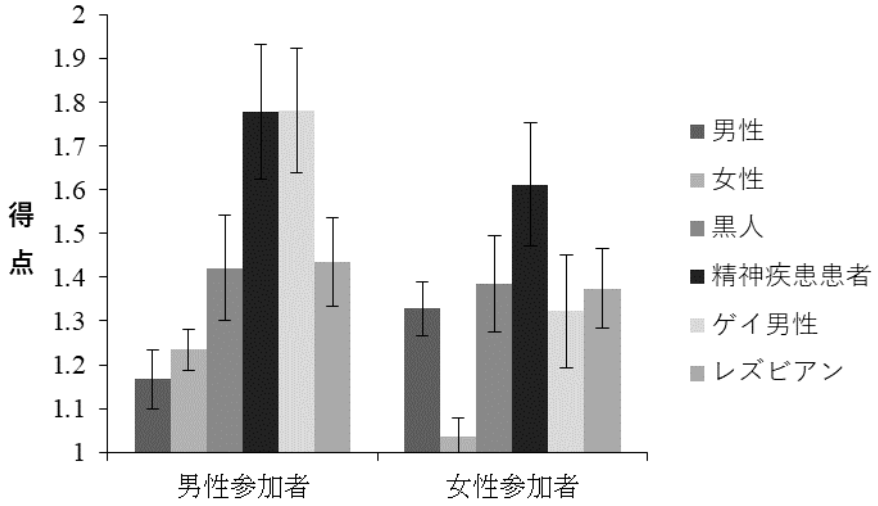

Figure 2.2 座位の遠さについての参加者の性（男対女）×集団（男性対女性対黒人対精神疾患患者対ゲイ男性対レズビアン）の 2×6 の棒グラフ（研究 1)。

ところ，有意であった（$\chi^2(5)=153.58$, $p<.001$, $\eta^2=.54$）。Holm 法による多重比較の結果，精神疾患患者及びゲイ男性よりも黒人及びレズビアンの方が，そしてそれらの 4 集団よりも男性及び女性の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>3.25, adjusted ps<.005, $|r|$s>.33）。女性参加者についても同様の分析を行ったところ有意であり（$\chi^2(5)=201.15$, $p<.001$, $\eta^2=.61$），Holm 法による多重比較の結果，精神疾患患者よりも黒人，ゲイ男性及びレズビアンの方が，そしてそれらの 4 集団よりも男性の方が，さらにそれらの 5 集団よりも女性の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>2.29, adjusted ps<.03, $|r|$s>.21）。

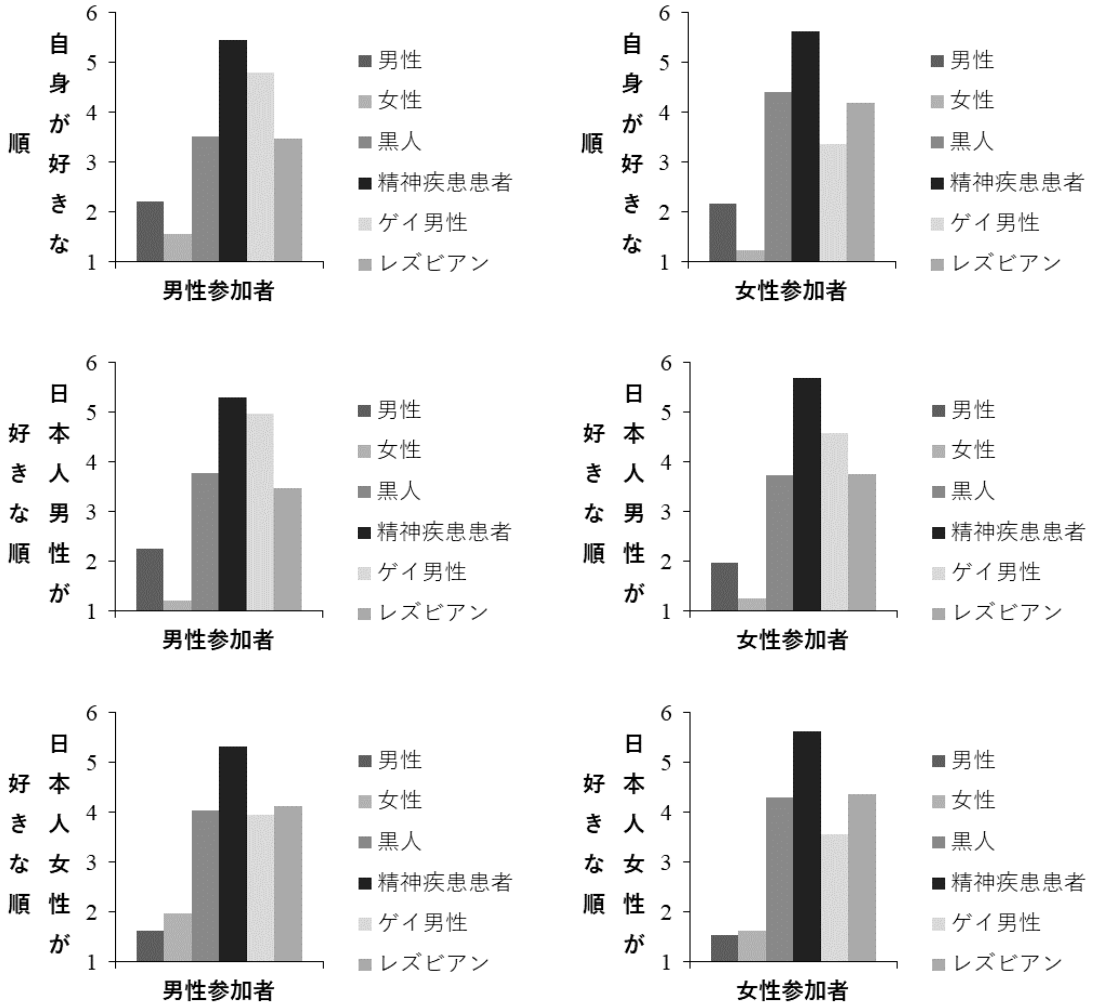

Figure 2.3 男女参加者別の好意の順位（研究 1）。

男性参加者が考える多くの日本人男性の男性，女性，黒人，精神疾患患者，ゲイ男性及びレズビアンに対する好意の順位に差があるかを検討するため，フリードマン検定を実施したところ，有意であった（$\chi^2(5)=171.23$, $p<.001$, $\eta^2=.59$）。Holm 法による多重比較の結果，精神疾患患者及びゲイ男性よりも黒人及びレズビアンの方が，そしてそれらの 4 集団よりも男性が，さらにそれらの 5 集団よりも女性の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>2.72, adjusted ps<.02, $|r|$s>.27）。女性参加者が考えるそれについても同様の分析を行ったところ有意であり（$\chi^2(5)=211.17$, $p<.001$, $\eta^2=.64$），Holm 法による多重比較の結果，精神疾患患者よりも黒人，ゲイ男性及びレズビアンの方が，そしてそれらの 4 集団よりも男性及び女性の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>3.10, adjusted ps<.01, $|r|$s>.29）。

男性参加者が考える多くの日本人女性の男性，女性，黒人，精神疾患患者，ゲイ男性及びレズビアンに対する好意の順位に差があるかを検討するため，フリードマン検定を実施したところ，有意であった（$\chi^2(5)=134.97$, $p<.001$, $\eta^2=.49$）。Holm 法による多重比較の結果，精神疾患患者よりもゲイ男性，黒人，レズビアンの方が，そしてそれらの 4 集団よりも男性及び女性の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>3.06, adjusted ps<.02, $|r|$s>.31）。女性参加者が考えるそれについても同様の分析を行ったところ有意であり（$\chi^2(5)=209.38$, $p<.001$, $\eta^2=.63$），Holm 法による多重比較の結果，精神疾患患者よりもゲイ男性，黒人及びレズビアンの方が，そしてそれらの 4 集団よりも男性及び女性の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>3.51, adjusted ps<.003, $|r|$s>.33）。

不快さの順位　自由記述欄に順位を付けることができない旨の記述をした上でこの設問に無回答であった参加者が複数名みられたため，この設問について無回答であったデータは全て 6 位の回答として分析に含めた。ただし，この設問以降，フェイスシートを含め全ての問いに無回答であった場合には，その

回答を分析から除外した。

男女参加者別に示した不快さの順位について，Figure 2.4 に示す。

男性参加者の男性，女性，黒人，精神疾患患者，ゲイ男性及びレズビアンに対する不快さの順位に差があるかを検討するため，フリードマン検定を実施したところ，有意であった（$\chi^2(5)=147.17$, $p<.001$, $\eta^2=.53$）。多重比較の結果，男性及び女性よりも黒人及びレズビアンの方が，そしてそれらの 4 集団よりも精神疾患患者及びゲイ男性の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>3.06, adjusted ps<.003, $|r|$s>.31）。女性参加者についても同様の分析を行ったところ有意であり

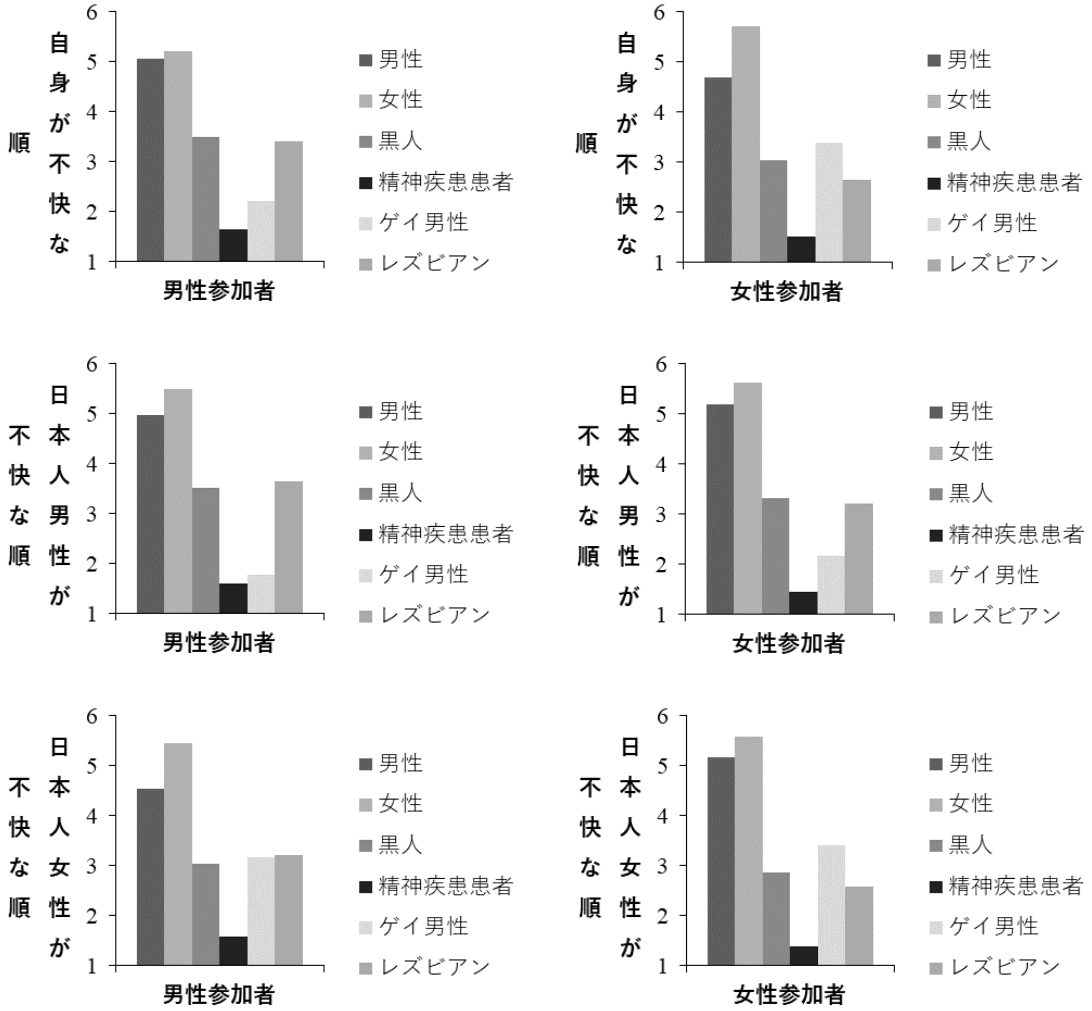

Figure 2.4 男女参加者別の不快さの順位（研究 1）。

（$\chi^2(5)=172.09$, $p<.001$, $\eta^2=.54$），Holm 法による多重比較の結果，男性及び女性よりも黒人，レズビアン及びゲイ男性の方が，そしてそれらの 5 集団よりも精神疾患患者の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>3.11, adjusted ps<.01, $|r|$s>.30）。

男性参加者が考える多くの日本人男性の男性，女性，黒人，精神疾患患者，ゲイ男性及びレズビアンに対する不快さの順位に差があるかを検討するため，フリードマン検定を実施したところ，有意であった（$\chi^2(5)=178.27$, $p<.001$, $\eta^2=.62$）。Holm 法による多重比較の結果，男性及び女性よりも黒人及びレズビアンの方が，そしてそれらの 4 集団よりも精神疾患患者及びゲイ男性の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>3.43, adjusted ps<.003, $|r|$s>.35）。女性参加者が考えるそれについても同様の分析を行ったところ有意であり（$\chi^2(5)=212.21$, $p<.001$, $\eta^2=.65$），Holm 法による多重比較の結果，男性及び女性よりも黒人及びレズビアンの方が，そしてそれらの 4 集団よりも精神疾患患者及びゲイ男性の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>2.88, adjusted ps<.02, $|r|$s>.27）。

男性参加者が考える多くの日本人女性の男性，女性，黒人，精神疾患患者，ゲイ男性及びレズビアンに対する不快さの順位に差があるかを検討するため，フリードマン検定を実施したところ，有意であった（$\chi^2(5)=123.44$, $p<.001$, $\eta^2=.44$）。Holm 法による多重比較の結果，男性及び女性よりも黒人，レズビアン及びゲイ男性の方が，そしてそれらの 5 集団よりも精神疾患患者の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>3.41, adjusted ps<.04, $|r|$s>.35）。女性参加者が考えるそれについても同様の分析を行ったところ有意であり（$\chi^2(5)=202.79$, $p<.001$, $\eta^2=.63$），Holm 法による多重比較の結果，男性及び女性よりも黒人，レズビアン及びゲイ男性の方が，そしてそれらの 5 集団よりも精神疾患患者の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>3.34, adjusted ps<.004, $|r|$s>.32）。

恐さの順位　自由記述欄に順位を付けることができない旨の記述をした上

でこの設問に無回答であった参加者が複数名みられたため，この設問について無回答であったデータは全て 6 位の回答として分析に含めた。ただし，この設問以降，フェイスシートを含め全ての問いに無回答であった場合には，その回答を分析から除外した。

男女参加者別に示した恐さの順位について，Figure 2.5 に示す。

男性参加者の男性，女性，黒人，精神疾患患者，ゲイ男性及びレズビアンに対する恐さの順位に差があるかを検討するため，フリードマン検定を実施したところ，有意であった（$\chi^2(5)=96.42, p<.001, \eta^2=.34$）。Holm 法による多重比較の

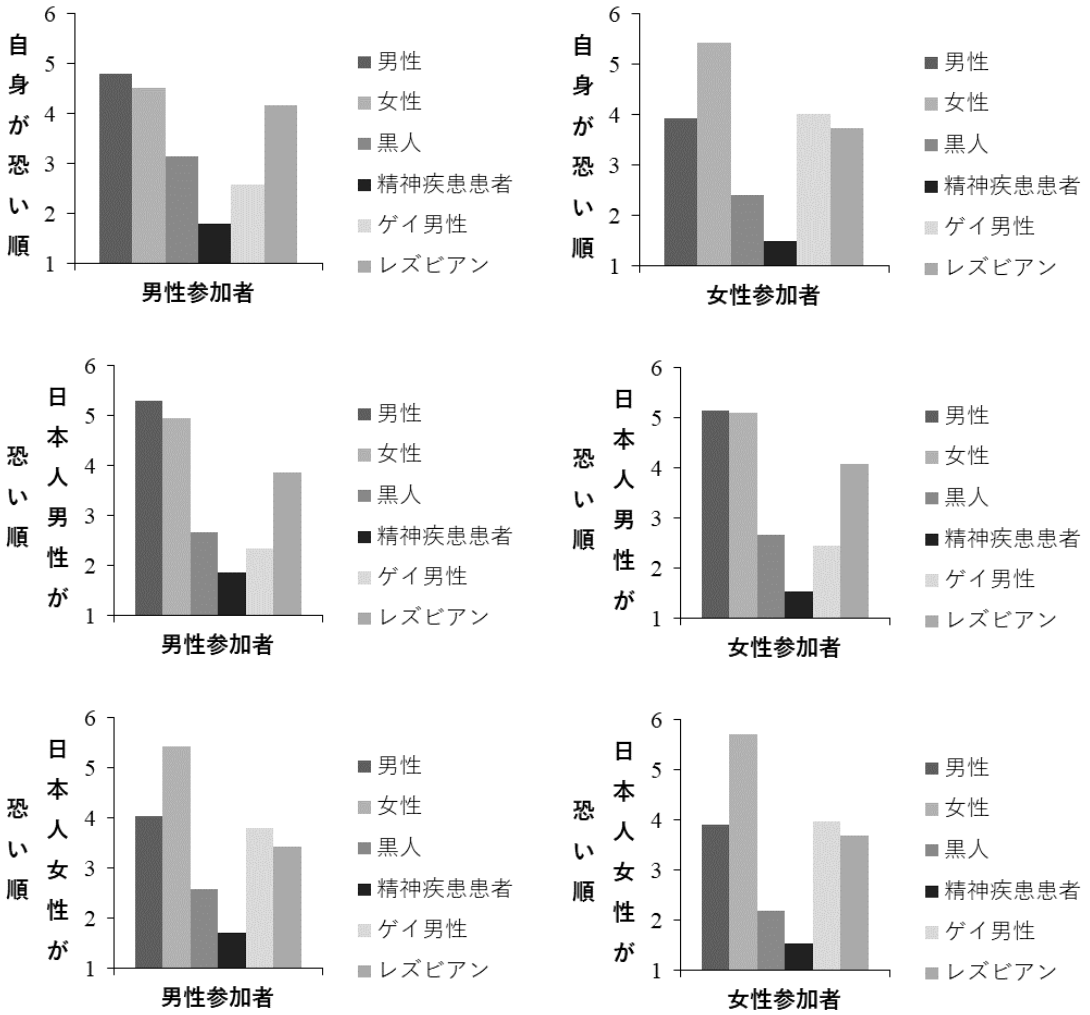

Figure 2.5 男女参加者別の恐さの順位（研究 1）。

結果，男性，女性及びレズビアンよりも黒人，精神疾患患者及びゲイ男性の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>2.64, adjusted ps<.05, $|r|$s>.27）。また，黒人よりも精神疾患患者の方が有意に順位が高く（z=3.47, adjusted p=.001, r=.36），ゲイ男性と黒人との間（z=1.43, adjusted p=.46, r=.15），ゲイ男性と精神疾患患者との間（z=2.04, adjusted p=.21, r=.21）には順位の有意差はみられなかった。女性参加者についても同様の分析を行ったところ有意であり（$\chi^2(5)=149.26$, $p<.001$, $\eta^2=.45$），Holm 法による多重比較の結果，女性よりも男性，レズビアン及びゲイ男性の方が，そしてそれらの 4 集団よりも黒人及び精神疾患患者の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>2.55, adjusted ps<.04, $|r|$s>.24）。

男性参加者が考える多くの日本人男性の男性，女性，黒人，精神疾患患者，ゲイ男性及びレズビアンに対する恐さの順位に差があるかを検討するため，フリードマン検定を実施したところ，有意であった（$\chi^2(5)=142.99$, $p<.001$, $\eta^2=.51$）。Holm 法による多重比較の結果，男性及び女性よりもレズビアンの方が，そしてそれらの 3 集団よりも黒人，精神疾患患者及びゲイ男性の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>2.81, adjusted ps<.03, $|r|$s>.29）。女性参加者が考えるそれについても同様の分析を行ったところ有意であり（$\chi^2(5)=176.35$, $p<.001$, $\eta^2=.53$），Holm 法による多重比較の結果，男性及び女性よりもレズビアンの方が，そしてそれらの 3 集団よりもゲイ男性及び黒人が，さらにそれらの 5 集団よりも精神疾患患者の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>2.54, adjusted ps<.02, $|r|$s>.24）。

男性参加者が考える多くの日本人女性の男性，女性，黒人，精神疾患患者，ゲイ男性及びレズビアンに対する恐さの順位に差があるかを検討するため，フリードマン検定を実施したところ，有意であった（$\chi^2(5)=111.90$, $p<.001$, $\eta^2=.40$）。Holm 法による多重比較の結果，女性よりもレズビアンの方が，そしてそれらの 2 集団よりも精神疾患患者の方が有意に順位が高かった。また，女性よりも男

性及びゲイ男性の方が，そしてそれらの 3 集団よりも黒人及び精神疾患患者の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>3.14, adjusted ps<.02, $|r|$s>.32）。女性参加者が考えるそれについても同様の分析を行ったところ有意であり（$\chi^2(5)=172.00$, $p<.001$, $\eta^2=.52$），Holm 法による多重比較の結果，女性よりも男性，ゲイ男性及びレズビアンの方が，そしてそれらの 5 集団よりも黒人及び精神疾患患者の方が有意に順位が高かった（$|z|$s>4.23, adjusted ps<.001, $|r|$s>.40）。

考察

研究 1 の目的は，異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の強さ，特に男性異性愛者の大学生が持つゲイ男性に対する偏見と，女性異性愛者の大学生が持つレズビアンに対する偏見について，他の集団に属する人物に対する偏見との比較を行うことであった。

社会的距離について。男性参加者はゲイ男性に対する座位が男性に対する座位よりも有意に遠いこと，女性参加者はレズビアンに対する座位が女性に対する座位よりも有意に遠いことが示された。また，男性参加者のゲイ男性に対する座位は黒人，精神疾患患者及びレズビアンに対する座位と，女性参加者のレズビアンに対する座位は男性，黒人，精神疾患患者及びゲイ男性と遠さの有意差がないことも示された。この結果は，一般に男性異性愛者は男性を，女性異性愛者は女性を，相手が同性愛者であることがわかるだけで遠ざけてしまうことを示していると言える。すなわち，同性の同性愛者に対する偏見を反映した結果であると言える。全体として平均値が低かったことについては，相手から「近くに座って話そう」と求められたことが教示に含まれたためであると考えられる。

好きな順，不快だと感じる順，恐いと感じる順について。全体として，男性参加者は男性よりもゲイ男性に対して，女性参加者は女性よりもレズビアンに

対して強い偏見を示すことが示された。また，男性参加者はゲイ男性を精神疾患患者と同程度に好きではなく，不快だと感じ，恐いと感じていること，黒人以上に好きではなく，不快だと感じていることが示された。そして，女性参加者はレズビアンを黒人と同程度に好きではなく，不快だと感じていることが示された。「多くの日本人男性が」「多くの日本人女性が」という社会的望ましさ反応を考慮した設問でも，ほぼ同様の結果がみられた。これらの結果からも，一般に異性愛者が同性の同性愛者に対して，他の社会的マイノリティと同程度の偏見を持ってしまっていることが言える。

ただし，女性参加者はレズビアンに対して，黒人や精神疾患患者に対してよりは恐怖を感じず，その程度は男性やゲイ男性と同程度であった。この結果については，女性は男性から受け得る性的脅威とレズビアンから受け得る性的脅威を同程度に評価していることが窺える。女性参加者にのみこの結果が見られたことは，Kite & Whitley（1996）の，男性が女性よりも性的脅威に晒される機会が少なく，それ故にゲイ男性に対し強い偏見を持つという主張を支持するものであろう。

この研究 1 では，日本の異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の存在と，その相対的な強さが示された。以降の研究では，これらの偏見について，どのような概念であるのかを明らかにし，低減することを試みた。

第 3 章　レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度

第 2 章では，日本の異性愛者の大学生が持つレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の存在と，その相対的な強さが示された。第 3 章では，日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見について整理するため，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度を検討した研究 2，研究 3 を報告する。

研究 2，研究 3 では，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の顕在的態度を測定する尺度である，Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale 日本語版（以下，ATLG-J とする）の作成を試みた。ATLG-J は，ゲイ男性に対する意見項目の下位尺度 ATG Subscale（以下，ATG-J とする），レズビアンに対する意見項目の下位尺度 ATL Subscale（以下，ATL-J とする）の 2 つの下位尺度からなり，回答者がそれらの意見項目に対し賛成または反対の度合いを示すものである。

3.1　研究 2　Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale 日本語 6 項目版の作成[1]

3.1.1　調査 1　尺度の作成と信頼性・妥当性の検討，レズビアン及びゲイ男性

[1] 研究 2 は，以下の論文と学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。堀川 佑惟・岡 隆(2019). ATLG Scale 日本語短縮版の作成と信頼性・妥当性の検討　日本大学心理学研究，40，42-51.　Horikawa, Y., Oka, T. (2016). Development and validation of the Japanese version of the Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale (ATLG-J). The 31st International Congress of Psychology, PS27A-12-280.【Yokohama, Japan: Pacifico Yokohama, 27 Jul. 2016.】 堀川 佑惟・岡 隆（2016）同性愛に対する顕在的・潜在的態度と社会的望ましさ反応との関係 日本社会心理学会第 57 回大会発表論文集，287.【兵庫県西宮市: 関西学院大学西宮上ケ原キャンパス 2016 年 9 月 18 日】

に対する異性愛者の態度の男女差の検討

目的

研究 2 は，調査 1 と調査 2 の 2 つの調査から構成される。調査 1 の目的は以下の 3 点である。1 点目は，Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale, Revised 3-item version （Herek & McLemore, 2010）を日本語訳し，日本語版尺度である ATLG-J を作成することである。2 点目は，作成した ATLG-J の下位尺度である，レズビアンに対する態度を測定する ATL-J，ゲイ男性に対する態度を測定する ATG-J が十分な信頼性・妥当性を有しているかを検討することである。3 点目は，下位尺度 ATL-J，ATG-J を用いて，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度の男女差や，異性愛者の男女それぞれにおけるレズビアンとゲイ男性に対する態度の差を検討することである。

方法

本研究は，日本大学文理学部の研究倫理委員会より承認を得て行われた。

調査参加者と手続き　大学の講義内にて無記名の質問紙調査を 2 回実施した。

1 回目の質問紙調査では，実施に際して，調査への参加の任意性や個人情報保護についてなどの研究倫理に関する説明を行った。大学生 327 名が参加し，回答に欠損のなかった 311 名のうち，自認する性が出生時の身体性と一致する異性愛者 276 名（男性 149 名，女性 127 名）を分析対象とした。平均年齢は男性 19.66 歳（*SD*=1.47），女性 19.58 歳（*SD*=1.12）であった。

再検査信頼性の検討のため，1 回目の質問紙調査に参加した参加者のうち一部を対象に，1 回目の質問紙調査から 3 週間後に 2 回目の質問紙調査を行った。両質問紙調査への参加が確認された，自認する性が出生時の身体性と一致する異性愛者 92 名を，再検査信頼性の分析対象とした。

質問紙の構成　Herek & McLemore (2010)の Attitudes Toward Lesbians and Gay

Men Scale, Revised 3-item version を日本語訳する許可を原著者から得た。この尺度は，ゲイ男性に対する態度を測定する ATG Subscale3 項目と，レズビアンに対する態度を測定する ATL Subscale3 項目，計 6 項目からなる。著者らによって日本語訳された各項目について，外部の研究機関に所属するバイリンガルの研究協力者による逆翻訳がなされ，原著の各項目と意味的な相違がないことが確認された。この日本語訳によって作成された ATLG Scale 日本語 6 項目版（以下，ATLG-J6 とする）の下位尺度，ATG-J（ATL-J）は，「1：非常に反対」から「7：非常に賛成」までの 7 段階評定のリッカート尺度であり，尺度項目は以下の通りである。項目 1「男性（女性）同士の性行為は，明らかに悪い」，項目 2「男性（女性）同性愛者は，気持ち悪いと思う」，項目 3「男性（女性）の同性愛は，男性（女性）の性的関心の自然なあらわれである」。

1 回目の調査：ATLG-J6 は ATG-J，ATL-J の順に質問紙に掲載された。

その他，ATLG-J の収束的妥当性を検証するため，レズビアン及びゲイ男性に対する態度と関連すると考えられる概念を測定する 3 つの尺度が用いられた。1 つ目が，Ambivalent Sexism Inventory (ASI) 日本語版（Glick et al., 2000；宇井・山本, 2001）である。この尺度は,「女性はあまりにも簡単に気分を害しすぎる」などの 10 項目からなる HS と,「女性は，男性から大事にされ，守られなければならない」などの 11 項目からなる BS の 2 つの下位尺度からなる。1（非常に反対）から 7（非常に賛成）までの 7 段階評定で回答を求めた。2 つ目が，権威主義的伝統主義の測定項目（吉川，1998）である。この尺度は,「以前からなされてきたやり方を守ることが，最上の結果を生む」などの 9 項目からなる。1（非常に反対）から 7（非常に賛成）までの 7 段階評定で回答を求めた。3 つ目が，エイズ・エイズ患者に対する態度尺度（西，2000）である。この尺度は,「エイズ患者と友達になることは苦痛だ」などの 10 項目からなる。1（全くそ

う思わない）から 7（非常にそう思う）までの 7 段階評定で回答を求めた。

その後のフェイスシートでは，所属と年齢，出生時の身体性，性自認，性的指向，そして友人・親戚・親しい知人に男性同性愛者と女性同性愛者がそれぞれ何人いるかが尋ねられた。

最後に，再検査信頼性の検討を行う際に 2 回目の回答を同一参加者の 1 回目の回答と結び付けるため，8 桁の暗証番号の記入欄が設けられた。その記入に際して，他者のデータとの区別をするため,「誕生日 4 桁」と「携帯電話の番号下 4 桁」で番号を作成することを推奨した。

2 回目の調査：再検査信頼性の検討のみを目的とした 2 回目の調査に用いられた質問紙には，1 回目の調査と同じ形式の ATLG-J6 と，8 桁の暗証番号の記入欄のみを用いた。1 回目の回答と 2 回目の回答で暗証番号が同じであった質問紙同士を同一人物によって回答されたものとみなし，その回答者の ATLG-J のデータを再検査信頼性の検討に用いた。

調査 1　結果

ATLG-J6 得点の平均値と標準偏差を Table 3.1 に示す。

信頼性の検討　ATG-J, ATL-J の内的整合性はそれぞれ α=.58, .63 であった。ただし，それぞれ項目 3「男性（女性）の同性愛は，男性（女性）の性的関心の自然なあらわれである」を取り除いた場合に，α=.73 .82 とそれぞれ高い値が示された。オリジナルの ATLG Scale の ATG，ATL の α 係数はそれぞれ.89，.77 であり（Herek, 1988），項目 3 を取り除いた場合の α 係数はそれらの値により近いといえる。以下，項目 3 を取り除いた 2 項目の ATG-J, ATL-J からなる ATLG-J を，ATLG-J4 とする。

収束的妥当性の検討　ATLG-J6 の ATG-J3 項目，ATL-J3 項目それぞれの得点について，HS 得点，BS 得点，権威主義的伝統主義得点，エイズ・エイズ患者

Table 3.1
ATLG-Jの平均値と標準偏差（研究2調査1）

	M(*SD*)			
	All	Male	Female	*α*
ATG-J				
1. 男性同士の性行為は明らかに悪い。	3.51 (1.52)	3.82 (1.57)	3.14 (1.37)	
2. 男性同性愛者は，気持ち悪いと思う。	3.61 (1.73)	4.17 (1.65)	2.94 (1.59)	
3. 男性の同性愛は，男性の性的関心の自然なあらわれである。(逆転項目)	4.04 (1.25)	4.26 (1.24)	3.79 (1.23)	
ATLG-J4 得点(項目1-2の平均)	3.56 (1.44)	3.99 (1.38)	3.04 (1.35)	.73
ATLG-J6得点 (項目1-3の平均)	3.72 (1.12)	3.90 (1.06)	3.51 (1.15)	.58
ATL-J				
1. 女性同士の性行為は明らかに悪い。	3.25 (1.42)	3.37 (1.49)	3.10 (1.33)	
2. 女性同性愛者は，気持ち悪いと思う。	3.23 (1.53)	3.50 (1.47)	2.91 (1.54)	
3. 女性の同性愛は，女性の性的関心の自然なあらわれである。(逆転項目)	4.01 (1.27)	4.15 (1.30)	3.83 (1.23)	
ATLG-J4得点 (項目1-2の平均)	3.24 (1.36)	3.44 (1.37)	3.01 (1.32)	.82
ATLG-J6 得点(項目1-3の平均)	3.50 (1.07)	3.61 (1.06)	3.36 (1.08)	.63
n	276	149	127	

注）ATLG-J = Japanese version of Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale。

に対する態度得点との間の相関係数を求めたところ，いずれも有意な相関はみられなかった（$|r|$s<.10, *p*s>.09）。

一方，ATLG-J4 の ATG-J2 項目，ATL-J2 項目それぞれの得点についても同様の分析を行ったところ，いずれも有意な正の相関がみられた（*r*s=.22-.38, *p*s<.01; Table 3.2）。

以上の分析結果より，調査 1 における以降の分析では，ATLG-J4 の結果についてのみ検討することとした。

男女間・下位尺度間の得点差の検討　ATLG-J4 の ATG-J と ATL-J それぞれの得点に男女間で差がみられるか，及びそれらの下位尺度得点間に差がみられるかを調べるため，男女を参加者間要因，下位尺度（ATG-J，ATL-J）を参加者内要因，下位尺度の得点を基準変数とする 2 要因混合計画の分散分析を行った。その結果，男女の主効果（$F(1,274)=19.63$, $p<.001$, $\eta_p^2=.07$），下位尺度の主効果（$F(1,274)=33.25$, $p<.001$, $\eta_p^2=.11$），男女と下位尺度の交互作用（$F(1,274)=25.77$, $p<.001$, $\eta_p^2=.09$）が有意であった。男女の 2 水準による下位尺度の単純主効果の

Table 3.2
ATLG-J4得点とレズビアン・ゲイ男性に対する態度との関連概念との相関
(研究2調査1, n =276)

	嫌悪的セクシズム	好意的セクシズム	権威主義的伝統主義	エイズに対する態度
ATG-J	.25**	.28**	.30**	.38**
ATL-J	.23**	.22**	.25**	.36**

** p< .01

検定を行ったところ，男性においては有意な単純主効果が認められ，男性において ATG-J の得点（M=3.99, SD=1.38）は ATL-J の得点（M=3.44, SD=1.37）よりも有意に高いことが示された（F(1,274)=63.87, p<.001, η_p^2=.30）一方で，女性においては, ATG-J の得点（M=3.04, SD=1.35）と ATL-J の得点（M=3.01, SD=1.32）との差について，有意な単純主効果が認められなかった（F(1,274)=0.22, p=.64, η_p^2=.00）。また，下位尺度の 2 水準による男女の単純主効果の検定を行ったところ, 男性の得点が女性の得点よりも有意に高いことが ATG-J（F(1,274)=33.63, p<.001, η_p^2=.11），ATL-J（F(1,274)=6.84, p=.009, η_p^2=.02）の双方において示された。

再検査信頼性の検討　1 回目の質問紙調査と 2 回目の質問紙調査のデータを用いて，2 項目の ATG-J と ATL-J それぞれの再検査信頼性を検討した。1 回目の ATG-J と 2 回目の ATG-J との間の相関は r=.55，1 回目の ATL-J と 2 回目の ATL-J との間の相関は r=.50 であった。

考察

調査 1 では，ATLG-R-S3 を日本語訳して ATLG-J6 を作成し，信頼性・妥当性の検討を行った。また，先行研究と同様の回答傾向の違いが男女間，下位尺度間でみられるかを検討した。項目 1，項目 2 の 2 項目からなる ATG-J と ATL-J について，高い α 係数と収束的妥当性が認められた。ただし，再検査信頼性については十分な値とは言い難い。また，男女間得点差，下位尺度間得点差につ

いても，Herek（1988）の ATLG Scale と同じ傾向の結果が得られた。男性異性愛者の ATG-J の得点が女性異性愛者の ATG-J の得点よりも有意に高いこと，男性異性愛者において ATG-J の得点が ATL-J の得点よりも有意に高いことが確認された。また，女性異性愛者において，ATLG-J の下位尺度間でその得点に有意な差がみられなかった。

ATLG-R-S3（Herek & McLemore, 2010）とは異なり，両下位尺度とも 3 項目ではなく 2 項目の場合に信頼性・妥当性が認められた。このような短縮版の尺度を作成する場合には，各項目が確実に妥当性を高める方向で寄与する必要があると考えられる。3 項目の場合に収束的妥当性が著しく低くなることから，両下位尺度とも，項目 3 を除いた 2 項目で用いた方が良いであろう。また，Herek (1988)が作成したオリジナルの ATLG Scale は，異性愛者がもつレズビアンとゲイ男性に対する態度について「非難－寛容」の 1 次元を想定し測定している。項目内容を踏まえても，項目 1 と項目 2 が測定するものはこの測定概念から大きく逸脱するものではないと考えられる。

ATLG-J4 得点の関連概念との相関，男女間差，下位尺度間差について，アメリカにおける先行研究と同じ傾向の結果がみられた。このことからは，日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度は，アメリカ等先行研究が行われてきた国々におけるものと同様に説明することができると示唆される。これらの結果について頑健であることが確認されたならば，レズビアン及びゲイ男性に対する態度に関する国外の先行研究の知見を，日本の研究にも活かすことができると考えられよう。

3.1.2　調査 2　回答への社会的望ましさ反応，尺度と潜在的態度との関連の検討

目的

オリジナルの ATLG Scale には，社会的望ましさ反応を測定する顕在指標との有意な関連がないことが示されている（Herek, 1988）。調査 2 では，このオリジナルの ATLG Scale と同様に，ATLG-J6，4 にも社会的望ましさ反応との有意な関連がみられないことを確認する。ATLG-J6，4 のうち，項目 1「男性（女性）同士の性行為は，明らかに悪い」と項目 2「男性（女性）同性愛者は，気持ち悪いと思う」の 2 項目には，「悪い」「気持ち悪い」というネガティブな表現が含まれる。そのため，これらの項目への回答には社会的望ましさ反応がみられてしまう可能性が考えられる。

また，意識的な統制がなされないが故に社会的望ましさ反応の影響を受けにくい潜在的なレズビアンとゲイ男性に対する態度についても，潜在指標を用いて確認し，ATLG-J6,4 との関連性を検証する。もし，ATLG-J6，4 が潜在指標と同様に社会的望ましさ反応と有意に関連しないのであれば，その潜在指標の得点との間には相関がみられると考えられる。

方法

本研究は，日本大学文理学部の研究倫理委員会より承認を得て行われた。

質問紙調査　ATLG-J6，4 の得点と社会的望ましさ反応を測定するため，大学の講義内にて無記名の質問紙調査を実施した。調査の実施に際して，調査への参加の任意性や個人情報保護についてなどの研究倫理に関する説明を行った。大学生 624 名が参加し，回答に欠損のなかった 604 名のうち，自認する性が出生時の身体性と一致する異性愛者 537 名（男性 292 名，女性 245 名）が分析対象となった。平均年齢は男性 19.79 歳（*SD*=1.30），女性 19.56 歳（*SD*=1.99）であった。

質問紙は，ATLG-J6，バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版（以下

BIDR-J とする；谷，2008），フェイスシートから構成された。ATG-J と ATL-J については，調査 1 で日本語訳された 3 項目のものがそれぞれ用いられた。

BIDR-J は，社会的望ましさ反応について「本当に自分の自己像であると信じて無意識的に社会的に望ましく回答する反応」である自己欺瞞因子と「故意に回答を良い方向にゆがめて，真の自己像を偽る反応」である印象操作因子の 2 因子構造を想定しそれぞれ測定する尺度である。自己欺瞞因子は,「私は自分の人生を完全に思い通りに進めている」などの 12 項目からなる。印象操作因子は,「人をののしったことがない」などの 12 項目からなる。1（全くあてはまらない）から 7（非常にあてはまる）までの 7 段階評定で回答を求めた。

フェイスシートでは，所属，年齢，国籍，出生時の身体性，性自認，性的指向，そして友人・親戚・親しい知人に男性同性愛者と女性同性愛者がそれぞれ何人いるかが尋ねられた。

レズビアンとゲイ男性に対する潜在的態度の測定　潜在的態度の測定は，質問紙に不備のなかった自認する性が出生時の身体性と一致する異性愛者のうち，参加希望者 50 名（男性 19 名，女性 31 名）を対象に実験室で行われた。参加者の募集は，別の研究協力者 1 名が筆頭著者と共同で実施している「未知の記号に対する印象形成についての研究」として，質問紙の配布と同時にその研究協力者によって行われた。

潜在的態度の測定は，実験室で 1 名または 2 名ずつ行われた。測定 1 回あたりの所要時間は，説明からデブリーフィングまで合わせて 10 分程度であった。参加者は PC 上で，感情誤帰属手続き（Affect Misattribution Procedure，以下 AMP とする；Payne, Cheng, Govorun, & Stewart, 2005）を行った。AMP は，プライム刺激に対する感情反応がその直後に呈示されるターゲット刺激に誤帰属される現象を利用し，プライム刺激に対する「快―不快」「好き―嫌い」などの評価を

間接的に測定できる潜在指標である。プライム刺激には，ゲイ男性を表す語とレズビアンを表す語の中で，差別語に当たらない，比較的認知度が高い語を 3 語ずつ，計 6 語（「ゲイ男性」「同性愛男性」「男性同性愛者」「レズビアン」「同性愛女性」「女性同性愛者」）が用いられた。

ターゲット刺激には，及川・及川・青林（2009）に倣い，参加者にとって未知の文字であるイ音節文字を用いた。その際，予備調査（n＝41）によって，顕在的態度がネガティブまたはポジティブに偏らない文字を選定した。80 文字のイ音節文字が参加者によって「好き」「嫌い」の 2 択で評価され，それぞれ 0 点，1 点として換算された。全員の得点の平均値が中央値±0.1 以内であった 40 文字をターゲットとして採用した。この AMP で実際に用いられた刺激の例を Figure 3.1 に示す。

参加者は PC 上で，画面中央に呈示される未知の記号，すなわちイ音節文字のターゲット刺激について視覚的に好きか嫌いかを回答すること，記号が呈示される前に見える文字列は無視することを教示された。参加者がスペースバーを押すと，練習の 10 試行が開始された。試行では，画面中央にプライム刺激が

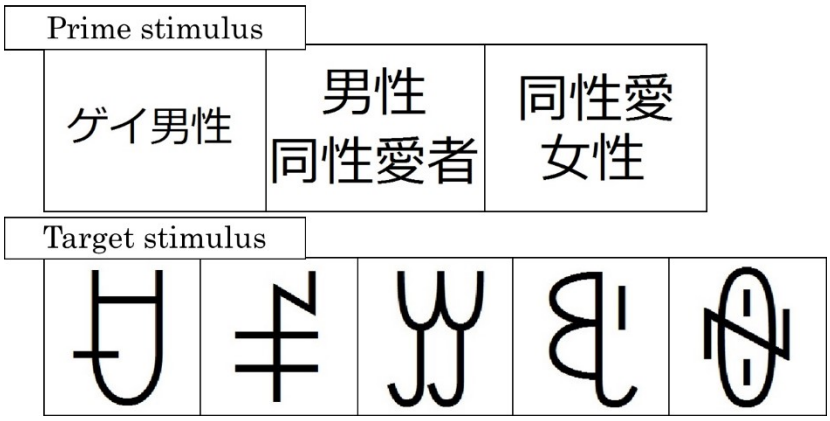

Figure 3.1 AMP（感情誤帰属手続き）において用いられた刺激例（研究 2 調査 2）。

150ms 呈示され，125ms のブランクをおいて，ターゲット刺激が 150ms 呈示された。ターゲット刺激が消えた後には，同じ位置に四角いランダムドットのパタンマスクが呈示された。このとき参加者が，ターゲット刺激が好きか嫌いかについてキーボードの対応するキーの入力によって回答すると，その試行は終了して次の試行が開始された。練習が終了した段階で，参加者は，実施について不明な点がないかを調査者に確認された。その後，本番 30 試行が開始された。その際，調査者は実験室から退室し，参加者は 1 人で本番試行を行った。本番試行終了後，デブリーフィングが行われた。参加者は本来の調査目的を伝えられ，調査全体に対する質問を受け付けられた。

AMP の得点の計算は，ゲイ男性を表すプライム刺激が用いられた AMP（以下ゲイ男性 AMP とする）とレズビアンを表すプライム刺激が用いられた AMP（以下レズビアン AMP とする）とで，それぞれ別々に行われた。「嫌い」と答えた割合から 0.5 を引いた値が得点とされた。

結果

調査 1 の再現性の検討　まず，ATLG-J6，4 について調査 1 と同じ結果がみられるかどうかを確かめた。

3 項目の ATG-J，ATL-J の内的整合性はそれぞれ α=.62，.59 であった。ただし，それぞれ項目 3 を取り除いた場合に，α=.81 .85 と比較的高い値が示された。

調査 1 と同様に，男女間の下位尺度得点差，下位尺度間の得点差について，項目 1，2 からなる 2 項目の ATG-J，ATL-J を用いて 2 要因混合計画の分散分析で検討した。その結果，男女の主効果（$F(1,535)=37.05, p<.001$），下位尺度の主効果（$F(1,535)=45.20, p<.001$），男女と下位尺度の交互作用が有意であった（$F(1,535)=25.67, p<.001$）。男女の 2 水準による下位尺度の単純主効果の検定を行ったところ，男性において ATG-J の得点（$M=3.85, SD=1.43$）は ATL-J の得点

（M=3.46, SD=1.41）よりも有意に高いことが示された（F(1,535)=76.17, p<.001）一方で，女性においては，ATG-J の得点（M=3.01, SD=1.23）と ATL-J の得点（M=2.95, SD=1.26）との差について，有意な単純主効果が認められなかった（F(1,535)=1.26, *n.s.*）。また，下位尺度の 2 水準による男女の単純主効果の検定を行ったところ, ATG-J（F(1,535)=53.03, p<.001）, ATL-J（F(1,535)=19.22, p<.001）の双方において，男性の得点が女性の得点よりも有意に高いことが示された。分散分析のこれらの結果は，すべて調査 1 と同様のものであった。

以上の結果はすべて調査 1 の結果と同じ傾向であり，調査 1 の結果を再現するものであったといえよう。この調査 2 においても，以降の分析では，ATLG-J4 の下位尺度についてのみ検討を行うこととした。

各指標得点間相関の検討　ATLG-J4 と社会的望ましさ反応，レズビアンとゲイ男性に対する潜在的な態度との関連を調べるため, ATLG-J4 それぞれの ATG-J，ATL-J の得点と，BIDR-J の自己欺瞞因子と印象操作因子，ゲイ男性 AMP，レズビアン AMP の各得点との相関を調べた（Table 3.3）。ATLG-J4 の各下位尺度得点と BIDR-J の 2 因子の下位尺度得点との間には，いずれも有意な相関はみられなかった（rs=-.07-.06, *n. s.*）。また，ATG-J の得点とゲイ男性 AMP の得点, ATL-J の得点とレズビアン AMP の得点それぞれの間にも有意な相関はみられなかった（rs=-.07-.13, *n. s.*）。

考察

相関分析の結果より，オリジナルの ATLG Scale と同様に，ATLG-J4 の回答には社会的望ましさ反応が有意にみられないということが示された。ATLG-J4 は「悪い」や「気持ち悪い」など，極端ともとれる表現が含まれる尺度である。それにもかかわらずこのような結果がみられた理由として，人々は同性愛者に対する非難について社会的に望ましいことであるかどうかを考えていないので

Table 3.3
ATLG-J4得点と社会的望ましさ反応，レズビアン・ゲイ男性に対する潜在的態度の相関（研究2調査2）

	n	*α*	1	2	3	4	5	6
ATLG-J4								
1. ATG-J	537	.81	−	.84 **	.06	−.07	.13	.11
2. ATL-J	537	.85		−	.04	−.02	.07	−.07
社会的望ましさ反応								
3. 自己欺瞞	537	.65			−	.11 *	.08	.01
4. 印象操作	537	.68				−	−.03	−.23
潜在的態度								
5. ゲイ男性に対する態度	50	−					−	.16
6. レズビアンに対する態度	50	−						−

** $p < .01$, * $p < .05$.

注）ATLG-J=Japanese version of Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale。

はないか，という可能性が推察できる。

一方，ATLG-J4 について，レズビアンとゲイ男性に対する潜在的態度とも関連がみられなかった。信頼性と妥当性が確認され，社会的望ましさ反応との関連がみられなかったにもかかわらず，ATLG-J4 と AMP との間に相関がみられなかった理由として，2 つの原因が考えられる。1 つは，両測度間で測定に用いた言葉が違うことである。ゲイ男性 AMP とレズビアン AMP は,「好き－嫌い」の 1 次元でレズビアンとゲイ男性に対する潜在的態度をとらえる指標であった。しかし，ATLG-J4 のオリジナルである ATLG Scale（Herek & McLemore, 2010）は,「非難－寛容」の 1 次元でレズビアンとゲイ男性に対する態度をとらえる尺度である。「同性愛者は嫌いだけれども悪いとは思わない」「同性愛は悪いことだけれども同性愛者は好きだ」といった考え方も一応成立するため,「非難」と「好き」,「寛容」と「嫌い」といった 2 つの態度は個人内に共存し得ると考えられる。もう 1 つは，同性愛者に対する顕在的態度と潜在的態度とが関連しないことである。社会的望ましさ反応以外の何らかの要因が，これら 2 つに影響しているかもしれない。

研究 2 では調査 1，調査 2 により，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の顕在的態度を測定する尺度である ATLG-J4 が開発され，その信頼性・妥当性が確認された。ただし，この ATLG-J については，大きな問題点が 2 つ挙げられる。まず，オリジナルの ATLG-R-S3（Herek & McLemore, 2010）は 3 項目の尺度であるにもかかわらず，日本では 2 項目の尺度としてしか妥当性が認められなかったことである。項目数が少ない尺度では各項目が有する重みが大きいため，各項目が有し得る文化的な解釈のずれによる尺度の構成概念への影響もまた大きくなる。次に，再検査信頼性の値がやや低いことである。このことからは，尺度の信頼性に疑問が呈されるだけではなく，ATLG-J4 が縦断的な研究に耐え得ないかもしれないことがうかがえる。

3.2　研究 3　Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale 日本語 20 項目版の作成と妥当性の検討[2]

目的

研究 2 で作成したレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度を測定する尺度 ATLG-J6，4 の信頼性が十分に認められなかったことを受け，研究 3 では，Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale（Herek, 1988）を日本語訳し，作成した 20 項目の ATLG-J（以下，ATLG-J20 とする）について信頼性・妥当性

[2] 研究 3 は，以下の論文と学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。堀川 佑惟・岡 隆(2018). Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale 日本語 20 項目版（ATLG-J20）の作成と妥当性の検討　社会心理学研究, 34, 85-93. 堀川 佑惟・岡 隆（2017）Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale 日本語 6 項目版（ATLG-J6）と原著との関連の検討 日本社会心理学会第 58 回大会発表論文集，339.【広島県東広島市: 広島大学西条キャンパス，2017 年 10 月 29 日】

の検討を行う。そしてその上で，男女間・下位尺度間の得点差によって，日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度の男女差について確認する。

具体的には，まず，ATLG-J20 の下位尺度である ATL Subscale（以下，ATL-J とする）と ATG Subscale（以下，ATG-J とする）それぞれについて因子的妥当性を確認した後,内的一貫性と再検査信頼性の検証によって信頼性を確認する。その後，両下位尺度について，男女間，下位尺度間での得点差，収束的妥当性，社会的望ましさ反応との関連，潜在的態度との関連を確認する。さらに，研究 2 で作成した ATLG-J6 との測定概念の一致を確認する。

方法

本研究は，日本大学文理学部の研究倫理委員会より承認を得て行われた。

ATLG Scale の日本語訳　日本語訳にあたり，原著者の許可を得た。そして，著者らによって日本語訳された ATLG Scale（Herek, 1988）の各項目について，他の研究室に所属するバイリンガルの研究協力者によって逆翻訳がなされた。逆翻訳によって作成された英文について，原文との意味的な相違がその研究協力者によって確認された。意味的な相違がみられた項目については，筆頭著者とその研究協力者との話し合いによって，最終的な日本語訳文を決定した。

また，研究 2 で作成した ATLG-J6 について，低い信頼性が報告されている尺度であるため，翻訳元である ATLG Scale Revised 3-item version（Herek & McLemore, 2010）の全項目について，ATLG-J20 と同じ研究協力者によって改めて逆翻訳がなされた。この逆翻訳の結果，6 項目中 4 項目が研究 2 とは異なる訳となった。この逆翻訳によって作成した改良短縮版を以下，ATLG-J6R（Table 3.4）とする。

加えて，研究 2 で作成した 6 項目の ATLG-J についても，作成する 20 項目版

Table 3.4
ATLG-J6R

ATG-J
1男性同士の性行為は、どうしようもなく間違っている。
2男性同性愛者は、気持ち悪いと思う。
*3男性の同性愛は、男性の性的関心の自然なあらわれのひとつである。
ATL-J
4女性同士の性行為は、どうしようもなく間違っている。
5女性同性愛者は、気持ち悪いと思う。
*6女性の同性愛は、女性の性的関心の自然なあらわれのひとつである。

注）*=逆転項目。

との測定概念の一致を調べるために調査に用いた。

各 ATLG-J は，レズビアン及びゲイ男性に対する態度をそれぞれ測定する ATL-J, ATG-J の 2 つの下位尺度からなる。9 段階評定である場合の教示は,「以下のそれぞれの主張に対して,「1（非常に反対）～9（非常に賛成)」の中で,あなたの考えに最も近いところに○をつけてください。」とされた。

調査参加者と手続き　大学の講義内で無記名の質問紙調査を実施した。配布を行う前に，調査への参加の任意性や個人情報保護などについての，研究倫理に関する説明を行った。632 名が参加し，うち回答に欠損のない，自認する性が出生時の身体性と一致する異性愛者 471 名(男性 245 名, 平均年齢 19.71 歳, *SD* = 2.98; 女性 226 名，平均年齢 19.14 歳，*SD* = 1.07）が分析対象となった。その 2 週間後，一部の参加者を対象として 2 回目の質問紙調査を実施した。74 名（男性 25 名，女性 49 名）が，1 回目と 2 回目の両質問紙調査への参加を確認された。また，さらに後日行った実験室での潜在的態度の測定には，1 回目質問紙調査参加者のうち参加希望者 60 名（男性 31 名，女性 29 名）が参加した。

1 回目質問紙の構成　ATLG-J：ATLG-J は 20，6R，6 の順に掲載された。ただ

し，ATLG-J6 からは，ATLG-J6R と共通する 2 項目を省略した。ATLG-J20 は 9 段階評定，6R，6 は 7 段階評定で用いた。

その他の尺度：ATLG-J の収束的妥当性を確認するために，4 種類の尺度を用いた。まず，両面価値的セクシズムを測定する尺度である，Ambivalent Sexism Inventory (ASI) 日本語版（Glick et al., 2000; 宇井・山本, 2001）を用いた。この尺度は,「女性はあまりにも簡単に気分を害しすぎる」などの 10 項目からなる HS と,「女性は，男性から大事にされ，守られなければならない」などの 11 項目からなる BS の 2 つの下位尺度からなる。1（非常に反対）から 7（非常に賛成）までの 7 段階評定で回答を求めた。2 つ目に，権威主義的伝統主義の測定項目（吉川, 1998）を用いた。「以前からなされてきたやり方を守ることが，最上の結果を生む」などの 9 項目に対し，1（非常に反対）から 7（非常に賛成）までの 7 段階評定で回答を求めた。3 つ目に，エイズ・エイズ患者に対する態度尺度（西, 2000）を用いた。「エイズ患者と友達になることは苦痛だ」などの 10 項目に対し，1（全くそう思わない）から 7（非常にそう思う）までの 7 段階評定で回答を求めた。そして 4 つ目に，伝統的家族観の測度として平等主義的性役割態度スケール短縮版 SESRA-S（鈴木, 1994）を用いた。「女性の居るべき場所は家庭であり, 男性のいるべき場所は職場である。」などの 15 項目に対し，1（ぜんぜんそう思わない）から 5（まったくその通りだと思う）までの 5 段階評定で回答を求めた。

加えて，社会的望ましさ反応を測定するため，バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版（以下，BIDR-J とする; 谷, 2008）を用いた。BIDR-J は，社会的望ましさ反応について「本当に自分の自己像であると信じて無意識的に社会的に望ましく回答する反応」である自己欺瞞因子と「故意に回答を良い方向にゆがめて，真の自己像を偽る反応」である印象操作因子の 2 因子構造でそれぞ

れ測定する尺度である。「私は自分で決めたことを後悔しない。」「他人には言えないようなことをしたことがある。」などの 24 項目に対し，1（全くあてはまらない）から 7（非常にあてはまる）までの 7 段階評定で回答を求めた。

フェイスシート：所属，年齢，出生時の身体性，性自認，性的指向を尋ねた。加えて，1 回目の質問紙調査時から 2 週間後に行われる 2 回目の質問紙調査における回答を同一参加者の 1 回目の回答と結び付けるため，誕生日 4 桁と電話番号の下 4 桁からなる 8 桁の暗証番号の記入欄を設けた。

2 回目質問紙の構成　再検査信頼性の検討のみを目的とした 2 回目の調査に用いた質問紙には，3 種の ATLG-J と，1 回目の調査で用いられた 8 桁の暗証番号の記入欄のみを設けた。検査－再検査で同じ暗証番号が記入された質問紙同士を，同一人物による回答とみなした。

潜在的態度の測定　1 回目の質問紙を配布する時に，その質問紙調査とは別の研究における実験参加者の募集として，潜在的態度を測定する実験室調査の参加者募集を行った。

測定は，実験室で 1 名または 2 名ずつ行った。参加者は PC 上で‘同性愛者－異性愛者’IAT（IAT Corp., 2017）を実施した。この IAT は，「異性愛者・同性愛者」と「良い・悪い」との潜在的連合強度を測定するテストである。試行では，画面左上，右上にそれぞれカテゴリが表示されている。画面の中央に一つずつ表示される，それらのカテゴリに属する語や画像を，キーボードの I キーまたは E キーを用いて，できるだけ早く，正確に，画面左上または右上のいずれのカテゴリにあてはまるか弁別する課題である。

得点は，Greenwald, Nosek, & Banaji（2003）の Improved algorithm に従って算出した。「異性愛者」と「良い」が左上に，「同性愛者」と「悪い」が右上にあるフェイズと，「異性愛者」「同性愛者」の位置が反対となるフェイズとがあり，

それぞれのフェイズの反応時間や正誤を得点算出の基としている。得点が高いほど,「同性愛者」と「悪い」との連合が強く，同性愛者に対しネガティブな潜在的態度を持つことを示す。

結果

ATLG-J20，6R，6 の因子的妥当性の確認　まず，ATLG-J20 の下位尺度である ATL-J，ATG-J それぞれの因子構造を検討するために，最尤法による探索的因子分析を行った。その結果，ATL-J の第一因子は分散の 45.51%を，ATG-J の第一因子は分散の 49.59%を説明した。この結果より，両下位尺度について，Herek（1988）の ATLG Scale と同様に 1 因子構造であることが示された。

ATLG-J20 の下位尺度である ATL-J，ATG-J それぞれの因子構造について確認するため，確証的因子分析を行った（Table 3.5）。モデルの適合度は，ATL-J では SRMR = .070，GFI = .905，AGFI = .851，RMSEA = .111 であり，ATG-J では SRMR = .054，GFI = .917，AGFI = .869，RMSEA = .098 であった。双方の適合度から，ある程度の因子的妥当性は確認された。

ATLG-J の信頼性の検討　ATLG-J20, 6R, 6 の記述統計量を Table 3.6 に示す。ATLG-J20，6R，6 それぞれの α 係数は，ATL-J が αs = .85, .75, .72，ATG-J が αs = .88, .72, .75 であった。ATLG-J20，6R，6 それぞれの再検査信頼性係数については，ATL-J が *r*s = .82, .80, .82，ATG-J が *r*s = .88, .84, .85 と，すべて高い値がみられた。

以降の分析結果においても，ATLG-J6R，6 それぞれの間に特筆すべき差異はみられなかった。また，ATLG-J6R と 6，それぞれの ATL-J 間，ATG-J 間の相関は，ともに *r*=.92 ときわめて高い値であった。そのため，以下，ATLG-J6 に関する結果報告は割愛する。

ATLG-J の収束的妥当性の検討　ATLG-J20，6R と，HS，BS，権威主義的伝

Table 3.5
ATLG-J20の項目と確証的因子分析（CFA）の結果（研究3）

	項目	CFA 推定値	CFA R^2
1	女性同性愛者達は、どうしても私たちの社会に合わせることができない。	0.59	0.35
2*	いかなる状況においても、女性の同性愛が雇用差別の理由となってはならない。	-0.35	0.12
3	女性の同性愛が社会にとって有害なのは、それが男女間のあるべき垣根を壊してしまうためだ。	0.57	0.32
4*	私的で合意のある女性同士の性行為を取り締まっている法律は、緩和されるべきだ。	-0.47	0.22
5	女性の同性愛は、ばち当たりだ。	0.68	0.46
6	女性同性愛者達の数が増えることは、日本のモラルの低下を表す。	0.75	0.56
7*	女性の同性愛それ自体には問題はない。むしろ、女性の同性愛に対する社会の扱い方のほうが問題となり得る。	-0.55	0.30
8	女性の同性愛は、多くの基本的な社会制度にとっての脅威だ。	0.67	0.44
9	女性の同性愛は、下品な性のあり方だ。	0.86	0.74
10	女性同性愛者達は、病気だ。	0.69	0.48
11*	男女の夫婦と同じように、男性同性愛者達は、子どもの里親になることが許されるべきだ。	-0.54	0.29
12	男性同性愛者達には嫌気がさす、と私は考える。	0.81	0.65
13	男性同性愛者達は、学校の先生になってはならない。	0.71	0.50
14	男性の同性愛は、変態である。	0.77	0.60
15*	他の生物種でみられるように、人間の男性の同性愛も、性のあり方のひとつの自然なあらわれだ。	-0.59	0.35
16	同性愛の感情を持っている男性は、その感情を克服するためになんでもするべきだ。	0.51	0.26
17*	もし自分の息子が同性愛者だとわかっても、そんなに落ち込むことはないだろう。	-0.48	0.23
18	男性同性愛的な行為は、どうしようもなく間違っている。	0.79	0.63
19	男性同士の結婚などという考えは、私には馬鹿げて思える。	0.83	0.69
20*	男性の同性愛は、非難されるべきでないライフスタイルのひとつにすぎない。	-0.49	0.24

注）項目1-10: ATL-J、項目11-20: ATG-J。*は逆転項目。
推定値は下位尺度ごとにそれぞれ行われた確証的因子分析によって得られた標準化パス係数。

統主義，エイズ・エイズ患者に対する態度，伝統的家族観との関連を検討するため，相関分析を行った。結果を Table 3.7 に示す。両 ATLG-J ともすべての変数との間に先行研究で報告された値と同程度の有意な相関が確認され，収束的妥当性が支持された。

ATLG-J と社会的望ましさ反応との関連　ATLG-J20 の下位尺度 ATL-J と自己欺瞞との間（$r = .09, p = .048$），ATLG-J6R の下位尺度 ATG-J と印象操作との

Table 3.6
ATLG-J20、6R、6の記述統計量（研究3）

	ATLG-J20		ATLG-J6R		ATLG-J6	
	ATL-J	ATG-J	ATL-J	ATG-J	ATL-J	ATG-J
M (*SD*)						
男性	2.73 (1.22)	3.55 (1.51)	2.98 (1.20)	3.32 (1.27)	2.98 (1.19)	3.29 (1.34)
女性	2.66 (1.16)	3.00 (1.29)	2.65 (1.15)	2.75 (1.14)	2.60 (1.15)	2.65 (1.17)
全体	2.70 (1.19)	3.29 (1.43)	2.82 (1.19)	3.05 (1.24)	2.80 (1.18)	2.98 (1.30)
α	.85	.88	.75	.72	.72	.75

注）n=471。男性245名、女性226名。

Table 3.7
ATLG-J20、6Rと関連概念との相関係数（研究3）

	ATLG-J20		ATLG-J6R	
	ATL-J	ATG-J	ATL-J	ATG-J
両面価値的セクシズム[1]				
嫌悪的セクシズム[1]	.26***	.27***	.25***	.29***
好意的セクシズム[1]	.24***	.23***	.21***	.20***
権威主義的伝統主義[1]	.38***	.26***	.27***	.25***
エイズに対する態度[1]	.39***	.43***	.36***	.42***
伝統的家族観[1]	.38***	.44***	.37***	.43***
社会的望ましさ反応[1]				
自己欺瞞[1]	.09*	.00	.04	.04
印象操作[1]	.01	-.05	-.04	-.10
潜在的態度[2]	.04	.15	.02	.09

注）1: n=471、2: n=60。*p < .05、***p < .001。

間（r = -.10, p = .036）にそれぞれわずかな相関がみられたことを除き，ATLG-J20, 6R と社会的望ましさ反応との間に有意な相関はみられなかった（Table 3.7）。研究 2 と同様に，ATLG-J によって測定されるレズビアン及びゲイ男性に対する態度は，社会的望ましさによる影響を受けにくいものであることが示された。

ATLG-J と同性愛者に対する潜在的態度との関連　‘同性愛者－異性愛者’IAT の平均得点は 0.00（*SD*=0.43）であった。この結果から，参加者らにとって，こ

の IAT のカテゴリであった「同性愛者」は「良い」とも「悪い」とも連合していないことが示唆されたといえる。また，ATLG-J20，6R それぞれの下位尺度と IAT 得点との相関は，いずれも有意ではなかった（rs = .02-.15, ps > .26; Table 3.4）。研究 2 と同様に，ATLG-J によって測定されるレズビアン及びゲイ男性に対する顕在的態度は，潜在的態度と関連しないものであることが示された。

ATLG-J20 と 6R との関連の検討　ATLG-J20 と 6R との各下位尺度間の相関係数は, ATL-J では r = .69, ATG-J では r = .79 という高い値であった（ps < .001）。ATLG-J20 と ATLG-J6R は，測定概念がほぼ一致した尺度であることが示された。

ATLG-J の男女間・下位尺度間の得点差の検討　ATLG-J20，6R を目的変数とし，2（性別: 男対女）×2（下位尺度: ATL-J 対 ATG-J）の 2 要因混合計画の分散分析を行った。その結果，両尺度ともに有意な性別の主効果（Fs(1, 469) = 7.66, 17.83, ps < .01, η_p^2s = .016, .037），下位尺度の主効果（Fs(1, 469) = 163.33, 59.06, ps < .001, η_p^2s = .258, .112），交互作用（Fs(1, 469) = 27.02, 16.45, ps < .001, η_p^2 = .054, .034）がみられた。性別の 2 水準による下位尺度の単純主効果の検定を行ったところ，両尺度とも，男性（ts(469) = 12.98, 8.47, ps < .001, ds = .84, .38），女性（ts(469) = 5.26, 2.52, ps < .02, ds = .26, .09）ともに ATG-J は ATL-J よりも有意に得点が高かった。下位尺度の 2 水準による性別の単純主効果の検定を行ったところ，ATLG-J6R では ATL-J（t(938) = 3.01, p = .003, d = 0.52），ATG-J（t(938) = 5.14, p < .001, d = 0.67）ともに男性は女性よりも有意に得点が高かった。一方，ATLG-J20 では ATG-J のみで男性が女性よりも有意に得点が高く（t(938) = 4.53, p < .001, d = 0.59），ATL-J においては有意な得点の男女差はみられなかった（t(938) = 0.60, p = .55, d = 0.10）。両尺度において，男性異性愛者が女性異性愛者よりも ATG 得点が高く, 男性異性愛者において ATG 得点が ATL

得点よりも高い，という，Herek（1988）及び研究 2 の結果は再現された。

考察

研究 3 の目的は，Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale（Herek, 1988）を日本語訳し，作成した 20 項目の ATLG-J20 について信頼性・妥当性の検討を行うこと，そしてその男女間・下位尺度間の得点差によって，日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度の男女差について確認することであった。

ATLG-J20 の信頼性・妥当性の面から，ATLG-J20 は研究 2 で作成した ATLG-J6,4 の上位互換と言える。逆翻訳法によって ATLG Scale の日本語版である ATLG-J20 が作成され，因子的妥当性，オリジナルの ATLG Scale（Herek, 1988）と同様の性別・下位尺度毎の回答傾向，信頼性，収束的妥当性が認められた。また，社会的望ましさ反応との関連もほとんどみられなかった。研究 2 と同様に潜在的態度との関連はみられなかったものの，ATLG-J20 について，レズビアン及びゲイ男性に対する顕在的な態度を測定する尺度としての十分な妥当性が認められたといえよう。

そして，同様に妥当性が認められた ATLG-J6R との高い相関によって，ATLG-J20 と ATLG-J6R との測定概念がほぼ一致していることが認められた。得点の男女差や下位尺度間差も研究 2 調査 1 の結果を三度再現するものであった。これらのことから，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度の中でもゲイ男性に対する男性の態度は特にネガティブである，という，多くの他国における先行研究でみられてきた傾向が日本においてもみられるという結果の頑健性が認められたといえる。

第 4 章　レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者のステレオタイプ

第 3 章では，レズビアン及びゲイ男性それぞれに対する異性愛者の男女それぞれの態度について検討した。その結果，ゲイ男性に対する男性異性愛者の態度が特にネガティブであることが示された。この男女差の背景について検討すべく，この第 4 章では，異性愛者にとって，伝統的男性ステレオタイプを示す高作動性・低共同性と，伝統的女性ステレオタイプを示す高共同性，低作動性のいずれがレズビアンやゲイ男性により当てはまりが良いかに焦点を当てた。

この第 4 章では，性格特性である共同性・作動性の 2 次元を用いたレズビアン及びゲイ男性ステレオタイプの検討を行った研究 4 の報告を行う。

4.1　研究 4　共同性・作動性の 2 次元を用いたレズビアン及びゲイ男性ステレオタイプの検討

目的

研究 4 では，異性愛者にとって，高作動性・低共同性で示される伝統的男性ステレオタイプと，高共同性，低作動性で示される伝統的女性ステレオタイプのいずれがレズビアンやゲイ男性により当てはまりが良いかを検討する。

本研究では，優位なレズビアンステレオタイプ，ゲイ男性ステレオタイプの探索的検討により，この検討を行うこととする。山本・岡（2018）によると，優位なステレオタイプ的特性とは,対象集団に対する当てはまりの程度が強く，対象集団を考える際に一番に思考上に浮かびやすい，すなわち，アクセス可能性が高いステレオタイプ的特性である。また，非優位なステレオタイプ的特性とは，対象集団に対する当てはまりの程度が相対的に弱く，対象集団を考える際に思考上に浮かびにくい，すなわち，アクセス可能性が低いステレオタイプ的特性である。本研究の方法は，このステレオタイプの優位性の考えに基づい

て女性ステレオタイプに当てはまりの良い性格特性語を選定した山本・岡（2016）に準ずる。

方法

本研究は，日本大学文理学部の研究倫理委員会より承認を得て行われた。

調査参加者　質問紙調査参加者 114 名のうち，分析対象者は自認する性が出生時の身体性と一致する異性愛者 97 名（男性 67 名，女性 30 名。*M*age=19.06, *SD*=1.13）であった。

質問紙の内容　質問紙では，沼崎・小野・高林・石井（2006）の性格特性語 64 語を連体修飾語の形に統一したものについて，レズビアン及びゲイ男性にそれぞれどの程度あてはまるかを，1（全く当てはまらない）から 7（非常にあてはまる）の 7 段階で尋ねた。この語群は，2（ジェンダー：伝統的男性対伝統的女性）×2（共同作動；共同性対作動性）×2（感情価：ポジティブ対ネガティブ）の 8 つの下位分類を持つ。レズビアンとゲイ男性のどちらについて先に問うかは，カウンターバランスが取られた。

その後，フェイスシートにて年齢，出生時の身体性，性自認，性的指向を尋ねた。加えて，レズビアン及びゲイ男性それぞれについて「会って話した経験の有無」「実在の人物を知っているか否か」「空想上の人物を知っているか否か」を探索的に尋ねた。

結果

64 語の性格特性語それぞれについて，男性参加者からレズビアンへの評定，男性参加者からゲイ男性への評定，女性参加者からレズビアンへの評定，女性参加者からゲイ男性への評定（それぞれ以下，M→L，M→G ，F→L，F→G とする）の 4 つそれぞれの平均点を算出した（Table 4.1）。各語群の信頼性については，αs > .70 という概ね高い値が確認された。以降，性格特性語 64 語を，こ

Table 4.1
語群・ステレオタイプ保持者の性別・ステレオタイプ対象の性的指向毎のステレオタイプ評定平均点（研究4）

ステレオタイプ保持者	対象	伝統的男性				伝統的女性			
		低共同性		高作動性		高共同性		低作動性	
		ポジ	ネガ	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ
男性異性愛者 (n=67)	レズビアン	3.84	3.56	4.10	3.63	4.10	3.59	3.70	3.33
		(0.85)	(0.97)	(1.06)	(1.20)	(1.00)	(0.82)	(0.92)	(0.91)
	ゲイ男性	3.70	3.51	4.00	3.34	4.24	3.65	3.49	3.38
		(0.86)	(0.86)	(1.00)	(1.05)	(1.02)	(0.91)	(0.93)	(1.02)
女性異性愛者 (n=30)	レズビアン	3.70	3.02	4.04	3.01	4.35	3.43	3.76	3.05
		(0.98)	(1.06)	(1.11)	(1.05)	(1.29)	(1.05)	(1.03)	(1.11)
	ゲイ男性	3.79	3.07	3.97	3.11	4.50	3.72	3.68	3.19
		(1.00)	(1.12)	(1.19)	(1.11)	(1.20)	(1.13)	(1.02)	(0.98)

注）括弧内は標準偏差。

の 4 つの変数を持つ 64 名のデータとみなして扱う。

レズビアンとゲイ男性が優位に持たれているステレオタイプを表す性格特性語群を確認するため，上記 4 変数を従属変数として，2（ジェンダー：伝統的男性対伝統的女性）×2（共同作動：共同性対作動性）×2（感情価：ポジティブ対ネガティブ）の参加者間分散分析を実施した（Table 4.2）。M→L については，主効果も交互作用もみられなかった（Fs<1, ps>.32）。M→G については，3 次交互作用が有意であった（$F(1, 56)=8.45$, $p=.005$, $\eta_p^2=.13$）。全パターンの単純主効果検定を実施した結果，伝統的女性・共同性・ポジティブの語群（「優しい」「家庭的な」「親しみやすい」など; $M=4.24$, $SD=1.02$）及び伝統的男性・作動性・ポジティブの語群（「自信のある」「勇敢な」「決断力のある」など; $M=4.00$, $SD=1.00$）の得点が他の語群の得点よりも有意に高いことが示された。F→L と F→G については，双方とも感情価の主効果が有意であり，（F→L では $F(1, 56)=81.40$, $p<.001$, $\eta_p^2=.59$; F→G では $F(1, 56)=60.89$, $p<.001$, $\eta_p^2=.52$）。また，双方ともジェンダーと共同作動の 2 次交互作用（F→L では $F(1, 56)=12.42$, $p=.001$, $\eta_p^2=.18$; F→G では $F(1, 56)=18.34$, $p<.001$, $\eta_p^2=.25$）が有意であったため，両評定につい

Table 4.2
評定平均点を目的変数，語群を説明変数とした参加者間分散分析（研究4）

	ステレオタイプの保持者と対象となる同性愛者(F)			
	男性異性愛者		女性異性愛者	
	レズビアン	ゲイ男性	レズビアン	ゲイ男性
ジェンダー(A)	0.97	0.37	4.76*	9.71**
ネガポジ(B)	0.33	23.13***	81.40***	60.89***
共同作動(C)	0.56	7.81**	2.89†	9.43**
A×B	0.47	0.21	0.01	0.73
A×C	0.10	12.29**	12.42***	18.34***
B×C	0.21	0.01	0.15	0.22
A×B×C	0.20	8.45**	2.34	1.39

†p <.10, *p <.05, **p <.01, ***p <.001

て全パターンの単純主効果検定を実施した。それらの結果より，伝統的女性・共同性・ポジティブの語群の得点が他の語群の得点よりも，F→L（M=4.35, SD=1.29），F→G（M=4.50, SD=1.20）ともに有意に高いことが示された。

分散分析で主効果も交互作用もみられなかった M→L の 64 語について，優位なステレオタイプを示す性格特性語を検出するため，クラスター分析（平方ユークリッド距離，ウォード法）によって 4 クラスターに分類した（Table 4.3）。4 クラスターを説明変数，評定平均点を目的変数とした一元配置分散分析を行った結果，主効果が有意であった（F(3, 60)=168.06, p<.001）。Shaffer 法による多重比較の結果，1 つのクラスター（M=4.26, SD=0.23）が他のクラスターよりも有意に得点が高いことが示された（ps<.001）。このクラスターは,「うるさい」「口出しする」「意志の弱い」「弱弱しい」「気立ての良い」「協力的な」「親しみやすい」「おしとやかな」「自分勝手な」「とっつきにくい」「ごう慢な」「独立した」「意志の強い」「決断力のある」「自信のある」の 15 語からなり，8 語群の語を 1 語から 3 語

Table 4.3
性格特性語64語の評定平均点によるクラスター分析の結果（研究4）

				ステレオタイプの保持者と対象となる同性愛者			
	語群			男性異性愛者		女性異性愛者	
性格特性語	ジェンダー	共同作動	感情価	レズビアン	ゲイ男性	レズビアン	ゲイ男性
独立した	伝統的男性	低共同性	ポジティブ	**4**	**4**	3	3
気ままな	伝統的男性	低共同性	ポジティブ	3	3	**4**	**4**
束縛されない	伝統的男性	低共同性	ポジティブ	3	2	3	2
堂々とした	伝統的男性	低共同性	ポジティブ	3	3	3	**4**
分析的な	伝統的男性	低共同性	ポジティブ	3	2	3	3
冷静な	伝統的男性	低共同性	ポジティブ	3	3	3	3
孤高の	伝統的男性	低共同性	ポジティブ	2	2	3	2
論理的な	伝統的男性	低共同性	ポジティブ	2	2	2	2
自分勝手な	伝統的男性	低共同性	ネガティブ	**4**	3	2	2
とっつきにくい	伝統的男性	低共同性	ネガティブ	**4**	3	2	2
孤独な	伝統的男性	低共同性	ネガティブ	3	3	2	2
批判的な	伝統的男性	低共同性	ネガティブ	3	2	1	1
無愛想な	伝統的男性	低共同性	ネガティブ	3	1	1	1
打ち解けない	伝統的男性	低共同性	ネガティブ	2	2	1	2
そっけない	伝統的男性	低共同性	ネガティブ	2	1	1	1
独りよがりな	伝統的男性	低共同性	ネガティブ	1	3	2	2
意志の強い	伝統的男性	高作動性	ポジティブ	**4**	**4**	**4**	**4**
決断力のある	伝統的男性	高作動性	ポジティブ	**4**	**4**	**4**	3
自信のある	伝統的男性	高作動性	ポジティブ	**4**	**4**	3	3
統率力のある	伝統的男性	高作動性	ポジティブ	3	2	3	3
勇敢な	伝統的男性	高作動性	ポジティブ	3	**4**	**4**	3
はっきりした	伝統的男性	高作動性	ポジティブ	2	**4**	**4**	3
指導力のある	伝統的男性	高作動性	ポジティブ	1	1	2	2
有能な	伝統的男性	高作動性	ポジティブ	1	3	3	3
ごう慢な	伝統的男性	高作動性	ネガティブ	**4**	2	2	2
高圧的な	伝統的男性	高作動性	ネガティブ	3	1	2	2
攻撃的な	伝統的男性	高作動性	ネガティブ	3	1	2	1
頑固な	伝統的男性	高作動性	ネガティブ	2	2	2	3
支配的な	伝統的男性	高作動性	ネガティブ	2	1	1	1
闘争的な	伝統的男性	高作動性	ネガティブ	2	2	2	1
威圧的な	伝統的男性	高作動性	ネガティブ	1	1	1	1
強引な	伝統的男性	高作動性	ネガティブ	1	3	1	2

（Table 4.3の続き）

気立ての良い	伝統的女性	高共同性	ポジティブ	**4**	**4**	**4**	**4**
協力的な	伝統的女性	高共同性	ポジティブ	**4**	**4**	**4**	**4**
親しみやすい	伝統的女性	高共同性	ポジティブ	**4**	**4**	**4**	**4**
世話好きな	伝統的女性	高共同性	ポジティブ	2	**4**	**4**	**4**
面倒見の良い	伝統的女性	高共同性	ポジティブ	2	**4**	**4**	**4**
優しい	伝統的女性	高共同性	ポジティブ	2	**4**	**4**	**4**
温かい	伝統的女性	高共同性	ポジティブ	1	**4**	**4**	**4**
家庭的な	伝統的女性	高共同性	ポジティブ	1	**4**	**4**	**4**
うるさい	伝統的女性	高共同性	ネガティブ	**4**	2	2	2
口出しする	伝統的女性	高共同性	ネガティブ	**4**	3	2	2
おせっかいな	伝統的女性	高共同性	ネガティブ	3	3	3	3
うわさ好きな	伝統的女性	高共同性	ネガティブ	2	3	3	3
おしゃべりな	伝統的女性	高共同性	ネガティブ	2	**4**	**4**	**4**
干渉的な	伝統的女性	高共同性	ネガティブ	2	3	3	2
でしゃばりな	伝統的女性	高共同性	ネガティブ	1	2	1	2
八方美人な	伝統的女性	高共同性	ネガティブ	1	1	2	2
おしとやかな	伝統的女性	低作動性	ポジティブ	**4**	2	3	2
謙虚な	伝統的女性	低作動性	ポジティブ	3	3	3	2
もの静かな	伝統的女性	低作動性	ポジティブ	3	2	2	2
可愛らしい	伝統的女性	低作動性	ポジティブ	2	1	**4**	**4**
純真な	伝統的女性	低作動性	ポジティブ	2	3	**4**	**4**
おっとりした	伝統的女性	低作動性	ポジティブ	1	2	3	2
控えめな	伝統的女性	低作動性	ポジティブ	1	1	3	2
優雅な	伝統的女性	低作動性	ポジティブ	1	1	2	2
意志の弱い	伝統的女性	低作動性	ネガティブ	**4**	1	1	1
弱弱しい	伝統的女性	低作動性	ネガティブ	**4**	2	1	2
依存的な	伝統的女性	低作動性	ネガティブ	3	3	3	3
頼りない	伝統的女性	低作動性	ネガティブ	3	2	1	2
意見のない	伝統的女性	低作動性	ネガティブ	2	1	1	1
おくびょうな	伝統的女性	低作動性	ネガティブ	2	2	2	2
受け身的な	伝統的女性	低作動性	ネガティブ	1	3	3	2
流されやすい	伝統的女性	低作動性	ネガティブ	1	1	1	1

注）全ての保持者－対象者の組み合わせにおいて，評定平均点はクラスター4>3>2>1。すなわち，クラスターの値が大きいほど，そのクラスターに含まれる語群は対象となる同性愛者によく当てはまると評されていることを示す。

ずつ有した。M→G，F→L，F→G についても同様にクラスター分析を行い，全て 4 クラスターに分類した。4 評定全てで最も得点が高いクラスターに分類された語は,「気立ての良い」「協力的な」「親しみやすい」「意志の強い」の 4 語であった。

考察

異性愛者にとって，レズビアンとゲイ男性には，伝統的女性ステレオタイプが比較的当てはまりが良いことが示された。ただし例外として，男性異性愛者が持つレズビアンステレオタイプについては，本研究で扱った 3 次元でうまく表すことができなかった。

ゲイ男性について，伝統的女性ステレオタイプが比較的当てはまりが良いことについては，欧米で行われてきた先行研究（Blashill & Powlishta, 2009; Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002）の知見と一致する。一方で，レズビアンステレオタイプについては，男女双方の異性愛者からゲイ男性や女性異性愛者以上に男性的に評されることを示した先行研究（Blashill & Powlishta, 2009）とは異なる傾向がみられた。レズビアンに対しても伝統的女性ステレオタイプの当てはまりが比較的良いと女性異性愛者が評するということは，日本の女性異性愛者がレズビアンを女性的であると考えていることを示唆する。また，男女異性愛者のゲイ男性ステレオタイプ，女性異性愛者のレズビアンステレオタイプはポジティブなものが優位であった。このことからは，異性愛者はレズビアン及びゲイ男性に対し，共同性・作動性については少なくとも顕在的にはポジティブな評価をしていると言える。このことから，ステレオタイプの感情価がレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の原因であると考えることは難しいであろう。

しかし，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者のステレオタイプがポジティブなものであったとしても，そのステレオタイプが偏見の原因になる可能

性は十分に考えられる。たとえば，ゲイ男性ステレオタイプについては，高作動性・低共同性によって表される伝統的男性ステレオタイプからは逸脱していると言える。研究 2，研究 3 においては，セクシズムの強さとゲイ男性に対するネガティブな顕在的態度との関連がみられている。これらのことから，ゲイ男性が伝統的男性ステレオタイプから逸脱しているとみなされていることが，研究 1 で確認されたゲイ男性に対する異性愛者の偏見，特に男性異性愛者の偏見の一要因になっていると考えられよう。

一方で，女性異性愛者が有するレズビアンステレオタイプについては，作動性がとりわけ低く示されているとは言い難いものの高い共同性が示されているために，性役割からの大きな逸脱を示しているとは言い難い。このことから，女性異性愛者からレズビアンに対する偏見について，日本と先行研究が行われた諸外国とで要因が異なることが考えられる。この研究で扱っていないステレオタイプや，ステレオタイプ以外の要因を検討することで，女性異性愛者からレズビアンへの偏見についての更なる理解に繋がるであろう。

そして，唯一の例外であった男性異性愛者が有するレズビアンステレオタイプについては，一概にポジティブなステレオタイプが優位であるとも言えないものであった。男性異性愛者はゲイ男性に対してはポジティブなステレオタイプを有していた。このことから，研究 2，研究 3 において示された，男性異性愛者はレズビアンよりもゲイ男性に対しネガティブな態度を有するという結果とは，傾向が異なる結果が見られたと言える。ただし，ポジティブな性格特性語とネガティブな性格特性語，伝統的男性ステレオタイプに近い性格特性語と伝統的女性ステレオタイプに近い性格特性語が混在するということは，男性異性愛者が有するレズビアンステレオタイプは部分的にはネガティブで，部分的には性役割から逸脱しているということを示す。男性異性愛者がそれらの部分

に注目した場合に，レズビアンに対し偏見を有することが考えられよう。

第 5 章　第I部総合考察

第I部では，日本における男女の異性愛者それぞれがレズビアン及びゲイ男性それぞれに対して有する偏見について，その存在の確認と他の社会的マイノリティに対する偏見との強さの比較を行った上で，態度とジェンダーステレオタイプの 2 側面から検討した。

第I部で得られた主な示唆は以下の 3 点である。1 点目は，日本においても，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見は強く存在することである。2 点目は，日本においても，レズビアン及びゲイ男性に対する態度の中でもゲイ男性に対する男性異性愛者の態度が特にネガティブであったことである。3 点目は，日本においては，男性異性愛者が有するゲイ男性ステレオタイプだけでなく女性異性愛者が有するレズビアンステレオタイプについても，伝統的女性ステレオタイプと同様，高共同性を示すポジティブな性格特性語によって示せたことである。ゲイ男性ステレオタイプについては，態度の男女差も，性格特性語によって表されるステレオタイプの内容も，欧米諸国における先行研究で見られてきたものと同じ傾向であった。一方でレズビアンステレオタイプについては，男性ステレオタイプに近いという欧米諸国における先行研究の結果とは異なり，伝統的女性の性役割と部分的に一致するステレオタイプがみられた。

第II部

レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する偏見に及ぼす効果の検討

第II部では，レズビアンとの仮想接触（imagined contact / imagined intergroup contact; Crisp & Turner, 2009）がレズビアンに対する偏見に及ぼす効果について検討を行う。

次頁より詳説する仮想接触は，日本の同性愛者に対する偏見を低減するための有用な手段のひとつであると考えられる。なぜなら，偏見の対象となる社会的マイノリティと実際に接触する必要がないためである。第I部で述べた通り，日本においてレズビアン及びゲイ男性は不可視化され，いないものとして扱われている。また，偏見の存在から，自らが同性愛者であることを表明している同性愛者も少ないことが考えられる。実際には身近に存在するにもかかわらず，認知されず，いないことにされている日本の同性愛者に対する異性愛者の偏見を低減する手段として，異性愛者と同性愛者との接触を必要としない手段が有用であろう。

第 6 章　序論

6.1　仮想接触研究の概観

Turner, Crisp, & Lambert（2007）の Experiment 1, 2 では，高齢者との会話を想像した参加者が，野外場面を想像した参加者や，単に高齢者について考えた参加者よりも低い集団間の偏見の程度を示した。また，Experiment 3 では，ゲイ男性との会話を交流した参加者が，集団間不安の低減を介してゲイ男性に対する評価をポジティブにすることを示した。

Crisp & Turner（2009）はこの仮想接触について，「外集団のメンバーとの社会的交流のメンタルシミュレーション」と定義した。そしてそのコアなる教示として「シミュレーションをしてもらうという教示」「ポジティブな交流の想像」の 2 つを挙げている。交流のシミュレーションを行うことによって単に外集団のことを考えるよりも態度がポジティブになること（Turner, Crisp, & Lambert, 2007, Experiment 2），ポジティブな仮想接触がそうでない仮想接触よりも偏見の低減に有用であること（Stathi & Crisp, 2008, Experiment 1）がそれぞれ示されていることが，その論拠である。この仮想接触仮説は，提唱された後も多くの研究結果によって支持されてきている。

マイノリティ集団とのポジティブな仮想接触の効果　仮想接触研究における従属変数，すなわち偏見の程度の指標として主に用いられてきた概念は，態度，集団間不安，行動意図，行動である。

態度は「ある程度の好き嫌いでの特定の存在の評価によって表される心理学的傾向（Eagly & Chaiken, 1998）」と定義される。態度は一般に，反応や行動のための心的な準備状態であり，またそれらを説明する仮説構成概念である。第Ⅰ部でも述べた通り，この態度は，非意識的，非統制的，非言語的な潜在的態度と，そうでない顕在的態度とに大きく二分される。多くの社会的マイノリテ

ィとの仮想接触研究において,顕在的態度や潜在的態度の指標は,「好き－嫌い」や「非難－寛容」といった，カテゴリに基づいた反応のうち感情的な部分を扱うものである。

集団間不安は,「外集団のメンバーとの接触に起因する不安（Stephan & Stephan, 1985)」と定義される。Stephan & Stephan（1985）によると，この集団間不安は，事前の集団間関係，知識やステレオタイプなどの集団間認知，状況要因によって説明され，行動，認知，感情に影響を及ぼす。

以上の情報を踏まえ，これまでの仮想接触研究で扱われてきた集団間不安，顕在的態度，潜在的態度，行動意図，行動について，それぞれの位置付けや関係性を簡易的に Figure 6.1 に示す。感情的な反応である顕在的態度や潜在的態度，集団間不安は，認知的な反応であるステレオタイプによって説明され，その後の行動に結び付くものであると考えられよう。

71 の仮想接触実験を扱った Miles & Crisp（2014）のメタ分析では，外集団に対する顕在的態度，潜在的態度，集団間不安，行動意図，行動について，外集団のメンバーとの仮想接触によって全て有意にポジティブにすることが示されている。

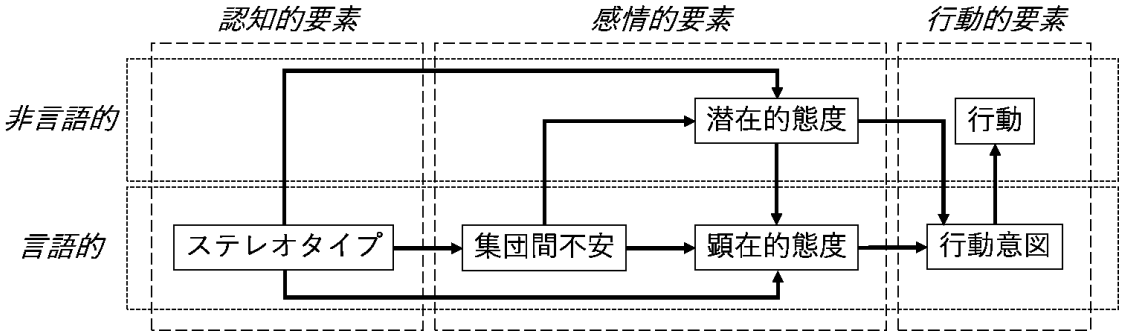

Figure 6.1 ステレオタイプ，集団間不安，態度，行動意図，行動の関係を示す概念図。

また，同研究では，イギリス，アメリカ，ヨーロッパにおいて仮想接触の効果が有意であったこと，国籍，精神疾患，年齢，性的指向，宗教についての外集団との仮想接触の効果が有意であったことも示している。ただし一方で，同研究では，民族，身体障害，体重についての外集団との仮想接触の効果は有意ではないことも示されている。他のマイノリティと比較してより強く文化に根差した偏見が原因であるのか，それとも単なる標本数の不足が原因であるのかは不明である。この結果から言えることは，ある特定のマイノリティ集団とのポジティブな仮想接触でみられた効果について，なんの議論もなく他の全てのマイノリティ集団にも一般化できると考えるのは危険である，ということであろう。

また，Miles & Crisp（2014）のメタ分析ではポジティブな仮想接触の偏見を低減する有意な効果が確認されているものの，その効果は実際の接触に比べ弱い上，個々の実験においてはその効果がみられないことや部分的であることも少なくない，という批判もある（Bigler & Hughes, 2010）。

仮想接触の効果に関する他の解釈可能性　外集団のメンバーとのポジティブな仮想接触が外集団に対する態度をポジティブにする効果について，認知的な負荷の影響である可能性，単なる要求特性の効果である可能性，ステレオタイププライミングの効果である可能性，ポジティブな情動の効果である可能性がこれまでの先行研究では考えられた。そして，これらの可能性はすべて検討され，棄却されている。仮想接触をした者としていない者とで認知的な負荷が異なるために結果が異なった可能性については，たとえば Turner, Crisp, & Lambert（2007）の Experiment 1，2 において，仮想接触をしなかった条件でもイメージ課題を行っているにもかかわらず効果が確認されていることから棄却された。要求特性の効果である可能性については，たとえば Turner, Crisp, &

Lanbert（2007）において，実験終了後に実験目的を言い当てた参加者がいないにもかかわらず効果が確認されていることから棄却された。仮想接触を行った参加者のみが仮想接触の教示という外集団についてのステレオタイププライミングを受けた効果である可能性については，たとえば Turner, Crisp, & Lambert (2007)の Experiment 2 において，外集団のメンバーとの仮想接触を行った参加者が単なる外集団のプライミングを受けた参加者よりも外集団に対する偏見が低減したことから棄却された。仮想接触を行った参加者のみがポジティブなことを考えたためにみられた効果である可能性については，たとえば Stathi & Crisp (2008)の Experiment 2 において，外集団のメンバーとのポジティブな仮想接触とそうでない者とのポジティブな仮想接触とで，その後の外集団に対する偏見が低減したことから棄却された。

6.2　レズビアン及びゲイ男性との仮想接触研究の概観

先行研究の概観　Miles & Crisp（2014）のメタ分析で扱われた同性愛者との仮想接触を扱った実験は 4 件であった。同研究では，同性愛者に対する偏見は仮想接触によって低減されるという結果が見られている。ただし，この 4 件の実験の結果は全て記述的な自己報告による結果に依存している。また，全てゲイ男性との仮想接触のみを扱った研究であり，レズビアンとの仮想接触の結果報告は分析に含まれていない。

2019 年 4 月現在，著者が確認できた同性愛者との仮想接触実験の報告は 12 件である（Table 6.1）。まずは顕在的な指標の結果について概観する。12 件のうち集団間不安が低減するか否かを扱った研究は 5 件であり，全てゲイ男性との仮想接触を扱ったものである。この 5 件の研究のうち 2 件（Miller, Markman, Wagner, & Hunt, 2013; West & Greenwald, 2016）で，仮想接触が集団間不安を低

Table 6.1
2019年3月までに出版された仮想接触研究の結果の要約

論文	研究	実験参加者 性	実験参加者 国	交流相手	不安	態度 顕在	態度 潜在	行動	行動意図
Turner et al. (2007)	3	M27	-	G	有意	有意			
Frye et al. (2012)	1	M11F53	-	G	有意				
Miller et al. (2013)	1	F66他10	アメリカ	G	非有意	有意			非有意
Turner et al. (2013)	2	M14F27	-	G	有意	有意			有意
Dermody et al. (2013)	1	M33F52	ｵｰｽﾄﾗﾘｱ	G		非有意	非有意		
West et al. (2015)	1	M42	キプロス	G		有意			有意
	2	M20F80	ｼﾞｬﾏｲｶ	G		有意			
West et al. (2016)	2	M33F52X6	イギリス	G	非有意	非有意			
McDermott et al. (2012)	1	F115	ｱｲﾙﾗﾝﾄﾞ	L		非有意	非有意		
LaCosse et al. (2019)	1	M47F53	アメリカ	LG		有意			有意
	2	M36F47	アメリカ	LG		有意			
	3	M52F68	アメリカ	LG		有意傾向			

注）M=男性，F=女性，X=ジェンダー無回答。L=レズビアン，G=ゲイ男性，LG=レズビアンとゲイ男性の双方。

減する効果は非有意であった。態度のうち顕在的態度については，レズビアン及びゲイ男性のいずれを対象とした場合でも概ね有意な結果が見られている。行動意図についても同様である。全体として，レズビアン及びゲイ男性に対する偏見を低減する結果が見られていると言えよう。

一方，非言語的な偏見の指標については，仮想接触によってポジティブな効果がもたらされた報告はない。潜在的態度については，有意に低減することを示す結果は得られていない。ただし，潜在的態度の測定を行った 2 つの研究（Dermody, Jones, & Cumming, 2013; McDermott, Morrison, McDonagh, & O'Doherty, 2012）では，ともに顕在的態度の結果も有意でなかった。しかし，これらの研究で扱われた仮想接触は，Crisp & Turner（2009）に示された手続きに従ったものであり，さらに顕在的態度についても非有意であった。その原因として，仮想接触の効果が弱かった可能性がまず考えられる。また，これらの実験が行われたオーストラリアとアイルランドはともに近年，これらの研究が発表されてから数年後に同性婚が国民投票によって合法化された国であるため，

これらの研究が行われた時点でそもそも回答者が同性愛者に対し強い偏見を持っていなかった可能性もあるであろう。行動については，これらの研究では全く取り扱われていない。

レズビアン及びゲイ男性との仮想接触研究の課題　これまでに行われたレズビアン及びゲイ男性との仮想接触の課題点としてまず挙げられるのは，レズビアンを扱った研究の少なさである。第I部で示された通り，レズビアンに対する偏見とゲイ男性に対する偏見にはそれぞれ異なる傾向がみられるため，それを低減する方略を考えるにあたってもなんの議論もないままに同質のものとして扱うことはできないと考える。また，潜在的態度や行動などの非言語的な偏見についての知見も同様に研究数が少ない。これらの検討を行うことによって，仮想接触による偏見の低減がみられなかった研究の知見と合わせ，レズビアンとゲイ男性に対する偏見を仮想接触によって低減するにはどのような要因が関わってくるのか，どのような手続きが仮想接触の効果を強めるのかを検討することが可能である。

6.3　日本におけるレズビアン及びゲイ男性との仮想接触の研究の意義と課題

仮想接触研究を日本で行うためには，まず先行研究の追試によってレズビアンとゲイ男性に対する偏見の低減に仮想接触が有効であるかを確かめる必要がある。

そして，当該研究の更なる発展のためには，その効果がレズビアン及びゲイ男性との仮想接触特有のものであるのか，それとも他の集団のメンバーとの仮想接触においても同様にみられる効果であるのかを確認することも要される。なぜなら，一般化が可能であるか否かを検討することによって，その効果の解

釈において日本のレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見という問題の特有の背景を考慮する必要があるか否かを判断できるためである。たとえば，第 1 章で述べた通り，仮想接触の先行研究が行われてきた諸国とは異なり，日本における同性愛者は社会において不可視化されていると考えられる。このことは，日本において異性愛者がレズビアン及びゲイ男性を想像することが困難である可能性を示す。このような解釈可能性を棄却できるか否かは，研究結果をより正確に理解するためにも，今後の当該研究の発展のためにも重要であろう。

第 7 章　レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する日本の女性異性愛者の態度に及ぼす効果の検討

第 7 章では，レズビアンとのポジティブな仮想接触がレズビアンに対する日本の女性異性愛者の態度に与える影響について検討するため，研究 5，研究 6，研究 7 の 3 つの研究を報告する。研究 5 では，「女性同性愛者」との仮想接触と，「女性」との仮想接触とで比較を行った。研究 6 では，研究 5 でみられた結果に，従属変数の測定順序が影響しているかを調べた。研究 7 では，「女性同性愛者」との仮想接触と，単に女性同性愛者について考える課題とで効果の比較を行った。

7.1　研究 5　レズビアンに対する日本の女性異性愛者の態度に仮想接触が及ぼす効果[3]

目的

研究 5 の目的は，レズビアンとのポジティブな仮想接触の効果を確認することである。レズビアンとの仮想接触を行う実験条件と行わない統制条件とでレズビアンに対する集団間不安，顕在的態度，行動に差がみられるかを調べる。第 6 章で述べてきた通りの仮想接触の効果が見られるならば，レズビアンに対する集団間不安は低減し，顕在的態度や行動はポジティブになるであろう。

方法

本研究は，日本大学文理学部の研究倫理委員会より承認を得て行われた。

---

[3] 研究 5 は，以下の学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。堀川 佑惟・岡 隆（2017） レズビアンに対する女性異性愛者の態度に仮想接触が及ぼす効果 日本心理学会第 81 回大会発表論文集, 65.【福岡県久留米市: 久留米シティプラザ, 2017 年 9 月 20 日】

実験参加者　自認する性が出生時の身体性と一致する女性異性愛者の大学生66名は，実験条件または統制条件にランダムに割り振られた。仮想接触を適切に行うことができなかった 6 名 と，実験終了後に異性愛者でないことを報告した 1 名が分析から除外されたため，最終的な分析対象者は 59 名（実験条件30 名，統制条件 29 名，平均年齢 19.58 歳，*SD*=3.63）であった。うち，レズビアンに対する行動についての分析は，測定を適切に行うことができなかった 9 名を除いた 50 名(実験条件 25 名, 統制条件 25 名, 平均年齢 19.67 歳, *SD*=3.84）を対象に行われた。

手続き　1 回の実験につき 1 名の参加者が実験に参加した。実験の流れをFigure 7.1 に示す。

最初に，イメージ課題が行われた。この課題は，Turner, West, & Christie (2013)を参考として作成された。まず参加者は，自身が休日に誰かと行いたいことを用紙に 3 つまで書き出し，それらの趣味の中で一番のお気に入りの右側に星マークをつけるよう教示された。実験条件の参加者になされた仮想接触の教示は，

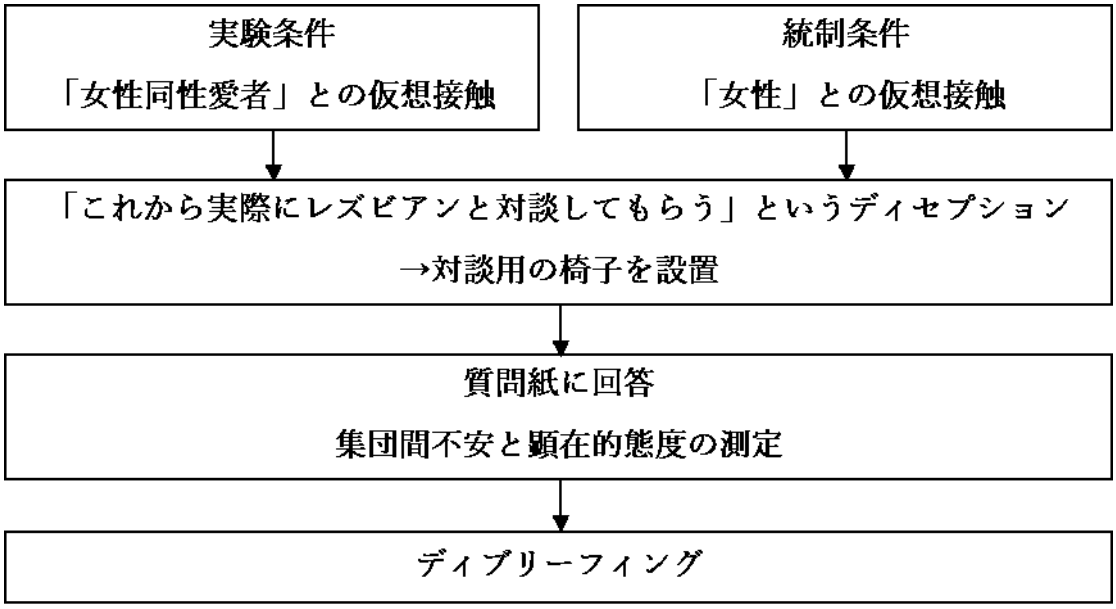

Figure 7.1 研究 5 の手続き。

「これから，あなた自身が初対面の女性同性愛者に会って，今書いてもらった趣味を彼女と一緒にし終わったことをイメージしてください。私が合図するまで，ポジティブで，リラックスした，心地良い交流をイメージしてください。」というものであった。統制条件の参加者には，実験条件の教示の「女性同性愛者」を「女性」に置き換えた教示がなされた。この仮想接触は，実験者からは見えないところで 2 分間行われた。仮想接触の後，想像の中でどのような相手とどのような交流を行ったかについて書き出す課題が，2 分間，実験者からは見えないところで行われた。

以降の手続きは，Turner & West (2011) を参考に構成された。参加者は，想像した趣味について，隣の面接室で実験協力者である同性愛者の女性と約 10 分間の対談を行ってもらう，と伝えられた。そして，協力者の到着まで面接室にて 1 人で待機すること，その間に面接室の机の上にある指示書に従ってもらうことについて教示された。

指示書には 2 つの指示が書かれていた。1 つ目の指示は，対談の際に参加者と協力者がまっすぐ向かい合って座るため，実験室内にある対談用の椅子 2 脚を，2 枚のパネルの間に対面になるよう設置してほしい，というものであった[4]。実際には対談は行われず，2 脚の椅子の間隔は，レズビアンに対する行動の指標として扱われた。それぞれの座面前部中央間の間隔が実験終了後に実験者によって測定され，cm 単位で小数点第一位まで記録された。2 枚のパネルに背もたれが接触するようにまっすぐ置いた際にこの間隔が 100cm になるよう，パ

[4] 椅子を設置する際，実験室のパネルを対面となった椅子の脇や間などに移動させた参加者計 9 名を，この手続きに関する分析から除外した。研究 6 以降，指示書に「危険ですので、パネルには触れないでください」という一文を加えたところ，同様のケースは見られなくなった。

ネルは設置されていた。

2 つ目の指示は，別の研究者による調査の質問紙に回答してほしい，というものであった。質問紙では，まず，Stephan & Stephan (1985)を参考に作成されたレズビアンに対する集団間不安尺度が扱われた。この尺度は,「もし，あなたが初対面の女性同性愛者と 2 人で交流する（たとえば，一緒に出掛ける，一緒に仕事をする）としたら，あなたが初対面の女性異性愛者と 2 人で交流する場合と 比較して どのように感じますか。1：あてはまらないから 10：あてはまるの間でもっとも近いところに○をつけてください。」という教示のもと,「1.落ち着いている（逆転項目)」「2.心地が悪い」「3.自分を意識している」「4.楽しい（逆転項目)」「5.心強い（逆転項目)」「6.自信に満ちている（逆転項目)」「7.苛立たしい」「8.耐えられない」「9.気が乗らない」「10.気が気でない」「11.相手を警戒している」の 11 項目に答えさせるものであった。次に，研究 2 で作成された ATLG-J6 の下位尺度 ATL-J が扱われた。ATL-J の得点が高いほど，レズビアンに対する顕在的態度がネガティブであることが示される。

フェイスシートでは，まず年齢が尋ねられた。加えて,「今まで実際に，女性同性愛者と交流したことはありますか」という質問について「ある」または「ない」,「知っている実在の女性同性愛者はいますか」「知っているフィクション上の女性同性愛者はいますか」の 2 問について「いる」または「いない」で回答を求めた。

最後に,質問紙調査に対する疑問や感想についての自由記述欄が設けられた。この自由記述で，本来の実験目的に気付いたことを報告した参加者はいなかった。

指示書の最後には，協力者が来る前に質問紙への回答が終わったら，その質問紙を実験室にいる実験者に渡すよう記述されていた。参加者が質問紙を実験

者に渡した時点で，対談は行われないことが実験者から参加者に伝えられ，デブリーフィングが行われた。

結果

集団間不安尺度のα係数は.88, ATL-J のα係数は.60 であった。このうち ATL-J について，2 項目でのα係数を確認したところ，α係数は.67 となった。以降，ATL-J を，2 項目の尺度として分析に用いる。

集団間不安尺度得点と ATL-J 得点との間には，有意な正の相関がみられた（r=.48, p<.001）。集団間不安尺度得点と椅子の間隔との間には，正の相関の有意傾向がみられた（r=.26, p=.06）。ATL-J 得点と椅子の間隔との間には有意な相関はみられなかった（r=.13, p=.36）。

実験条件－統制条件間で，レズビアンに対する集団間不安尺度得点，ATL-J 得点，椅子の間隔に差がみられるかを t 検定によって確認した（Table 7.1）。その結果，椅子の間隔については，実験条件の参加者（M=65.94cm, SD=12.56）が統制条件の参加者（M=74.46cm, SD=13.95）よりも有意に短かったことが示された（t(48)=2.27, p=.03, d=0.64）。一方，集団間不安尺度得点については，実験条件の参加者（M=4.52, SD=1.35）と統制条件の参加者（M=4.07, SD=1.23）との間に有意な差はみられなかった（t(57)=1.34, p=.18, d=0.35）。ATL-J 得点についても同様に，実験条件の参加者（3 項目では M=2.81, SD=0.95；2 項目では M=2.50, SD=1.11）と統制条件の参加者（3 項目では M=2.89, SD=0.82；2 項目では M=2.53, SD=1.04）との間に有意な差はみられなかった（3 項目では t(57)=0.32, p=.75, d=0.08；2 項目では t(57)=0.12, p=.90, d=0.03）。

考察

レズビアンとのポジティブな仮想接触はレズビアンに対する行動をポジティブにすることを示唆する結果が得られた。この結果は，仮想接触の結果が再現

Table 7.1
「女性同性愛者」との仮想接触と「女性」との仮想接触との間でのレズビアンに対する態度への効果の比較（研究5）

	「女性同性愛者」との仮想接触		「女性」との仮想接触				
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*	*p*	*d*
集団間不安	4.52[a]	1.35	4.07[b]	1.23	1.34	0.18	0.35
ATL-J	2.50[a]	1.11	2.53[b]	1.04	0.12	0.90	0.03
椅子の間隔(cm)	65.94[c]	12.56	74.46[c]	13.95	2.27	0.03	0.63

注）[a] $n = 30$, [b] $n = 29$, [c] $n = 25$。
得点が高いほど偏見が強いことを示す。

されたことと，仮想接触が女性異性愛者のレズビアンに対する態度の改善にも有効であるかもしれないことを示す。ただしこの効果について，想像の中での接触の有無とは関係なく，単に実験条件の参加者のみ，従属変数の測定前にレズビアンに関する情報の呈示を受けてレズビアンについて考えていたことによる効果である可能性は残る。

集団間不安と顕在的態度に条件間で差がみられなかった理由として，仮想接触に態度をポジティブにする効果がなく，行動がポジティブになった効果が第一種の過誤であった可能性を除くと，まず以下に示す 3 つが考えられる。1 つ目は，両条件ともレズビアンとの対談を行うことを知らされた上での測定であったために，態度が大きくポジティブに歪み，2 条件間の差を検出できなかった可能性である。特定の相手との接触予期は，その相手に対するポジティブな態度を形成することが示されている（Darley & Berscheid，1967）。2 つ目は，実験条件と統制条件の双方の参加者がそれぞれポジティブな接触を想像したためにポジティブな気分が生じ，その気分が顕在指標に実験操作以上の影響を与えた可能性である。3 つ目は，レズビアンとの仮想接触の効果が顕在的測度には表れない可能性である。

加えて，集団間不安と ATL-J それぞれについて，異なる要因によって効果がみられなかった可能性もある。集団間不安については，レズビアンそのものを想像することが多くの参加者にとって困難であったために，実際のレズビアンと接触する際の不安を低減する効果がみられなかった可能性がある。過去にレズビアンと交流があると回答した参加者は分析対象者 59 名中 9 名と少数であったことも，この可能性を支持する。ATL-J については，十分な信頼性がない可能性があることが第I部において示されている。本研究においても，ATL-J の α 係数はやや低いものであった。

7.2　研究 6 レズビアンとの仮想接触における言語的･行動的測度の順序効果の検討の試み[5]

目的

レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する偏見に及ぼす効果について検討した研究 5 では，レズビアンとの接触予期がなされたことが従属変数に影響を及ぼした可能性がうかがわれた。研究 6 ではこの可能性について検討するため，研究 5 の追試を行うとともに，レズビアンとの仮想接触の実験において，レズビアンに対する態度の測定順序が言語的・行動的測度への回答に影響するかを検討する。仮にレズビアンとの接触予期がなされることがレズビアンに対

[5] 研究 6 は，以下の論文と学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。堀川 佑惟・岡 隆(2019). レズビアンとの仮想接触における言語的・行動的測度の順序効果の検討の試み　日本大学心理学研究，40，38-41.　Horikawa, Y., Oka, T. (2018). The order effect of verbal and behavioral measures of the attitudes toward lesbians in imagined contact studies. 2018 SPSP Annual Convention, L-047.【Atlanta, U. S.: Hyatt Regency Atlanta & Atlanta Marriott Marquis, 3 Mar. 2018.】

する態度に影響するならば，その影響とはその態度をポジティブにするものであろう。

方法

本研究は，日本大学文理学部の研究倫理委員会より承認を得て行われた。

実験参加者　自認する性が出生時の身体性と一致する女性異性愛者の大学生 80 名は，2（交流相手：「女性同性愛者」対「女性」）×2（測定順序：「言語－行動」対「行動－言語」）の 4 条件のいずれかにランダムに割り振られた。2 名の参加者が課題において椅子を設置しなかったため，その 2 名を除外した 78 名を分析の対象とした。実験は 1 名ずつ，実験室で行われた。

仮想接触の手続き　実験手続きを Figure 7.2 に示す。

まず，仮想接触の手続きが行われた。すべての参加者は，自身の趣味を用紙に 3 つまで書き出した。そして，その中で一番のお気に入りに星マークをつけ

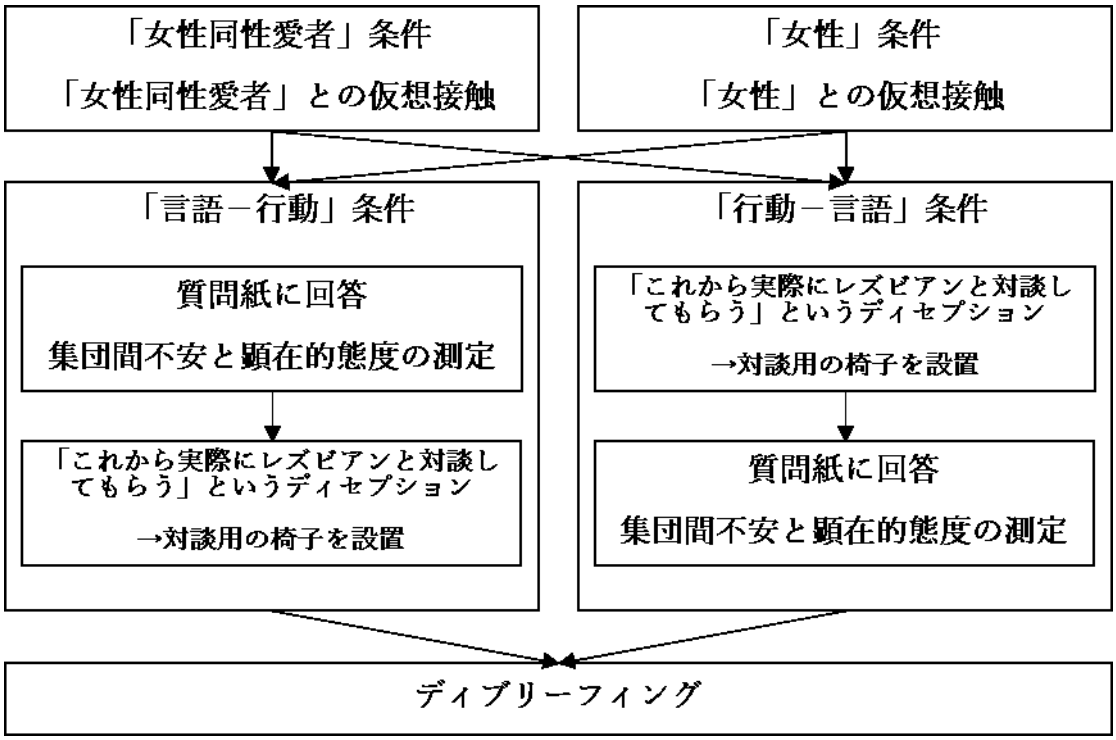

Figure 7.2 研究 6 の手続き。

た。次に，レズビアンと仮想接触を行う参加者は，以下の教示を受けた。「あなたは休日，趣味の合うひとりの女性と 2 人で過ごすことになりました。その女性とあなたは初対面です。また，その女性は同性愛者です。あなたはその女性と一緒にその趣味をやり終え，今はその女性と 2 人で楽しくおしゃべりしているところです」。女性と仮想接触を行う参加者への教示は，「また，その女性は同性愛者です。」という一文が除かれた点以外は，レズビアンと仮想接触を行う参加者へのものと同じであった。参加者はこれらの教示文に沿って，ポジティブで，リラックスした，心地良い交流をイメージするよう求められた。その後，参加者は，想像上で交流した相手の特徴とその交流の内容について，3 分間用紙に書き出した。

従属変数の測定　仮想接触の手続きが終わった後，全参加者は，レズビアンに対する集団間不安，顕在的態度，行動の測定を受けた。

集団間不安，顕在的態度は，研究 5 と同様に質問紙によって測定された。質問紙は，Stephan & Stephan（1985）を参考に作成されたレズビアンに対する集団間不安の尺度（α＝.78）11 項目 10 段階評定と，ATLG-J4 の下位尺度であるレズビアンに対する顕在的態度を測定する ATL-J（α＝.72）2 項目 7 段階評定であった。

行動についても研究 5 と同様に，これから実験室に来室するレズビアンとの椅子の間隔（0-100cm）を用いて測定された。

ただし，「言語－行動」条件と「行動－言語」条件とで，以上の従属変数の測定順序は異なっていた。「言語－行動」条件の参加者は，2 つの言語的測度への回答を行った後に，レズビアンとの対談を行うことが伝えられ，椅子の設置を行った。「行動－言語」条件の参加者は，先に対談用の椅子を設置した後，対談相手を待っている間に言語的測度に回答した。

両条件の参加者とも，全ての課題を終了した後，対談相手を待っている間に実験に対する疑問や感想などを用紙に書き出した。実験目的に気付いたことを報告した参加者はいなかった。

全ての課題を終えた後，参加者は実験者に，対談は実際には行われないことを伝えられ，デブリーフィングを受けた。

結果

記述統計量を Table 7.2 に示す。

レズビアンに対する集団間不安,顕在的態度,行動それぞれを従属変数とし，2（仮想接触対象：「女性同性愛者」対「女性」）×2（測定順序：言語－行動対行動－言語）の参加者間分散分析を行った結果,レズビアンに対する集団間不安，顕在的態度，行動すべてにおいて，主効果・交互作用ともにみられなかった（Table 7.3）。

考察

研究 6 の目的は，仮想接触の実験において，外集団のメンバーに対する態度の測定順序が言語的・行動的測度への回答に影響するかを検討することであった。

仮想接触によってレズビアンに対する態度がポジティブになる効果は見られなかったものの，測定順序について効果がみられなかったことについて，ある程度の考察は可能である。まず，少なくとも今回用いられた集団間不安と顕在的態度の指標は，この研究で用いた社会的距離の測定手続きによる影響を有意に受けないことが示された。

本研究では，レズビアンとの仮想接触に，レズビアンに対する集団間不安を低減する効果や，レズビアンに対する態度をポジティブにする効果はみられなかった。このことから，今回の実験においては，レズビアンとの仮想接触の試

Table 7.2
記述統計量（研究6，*N*=78）

	「女性同性愛者」との仮想接触				「女性」との仮想接触			
	言語－行動		行動－言語		言語－行動		行動－言語	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
集団間不安	4.18	0.25	4.28	0.19	4.08	0.27	4.14	0.30
ATL-J	2.66	0.26	2.25	0.23	2.28	0.23	2.24	0.25
椅子の距離(cm)	76.39	4.30	76.96	3.30	74.41	3.51	70.99	4.11

Table 7.3
仮想接触×測定順序の2要因混合計画分散分析（研究6，*N*=78）

	集団間不安		ATL-J		椅子の距離	
	F	η_p^2	*F*	η_p^2	*F*	η_p^2
仮想接触（A）	0.24	0.00	0.92	0.01	1.13	0.02
測定順序（B）	0.10	0.00	1.36	0.02	0.10	0.00
(A)×(B)	0.01	0.00	1.02	0.01	0.32	0.00

行がうまくいかなかったと考えられる。その原因について，以下の 3 つの可能性が考えられる。まず，仮想接触そのものがうまくポジティブに行えていなかった可能性である。Crisp & Turner (2009)で述べられた，仮想接触が態度をポジティブにするための必要条件である「シミュレーションに従事すること」「ポジティブであること」の 2 点は満たされていると考えられるものの，それ以外の点で仮想接触の教示内容にイメージを妨げる要因があったために，参加者はうまくポジティブな交流をイメージできなかったかもしれない。次に，研究 5 でみられたレズビアンとの仮想接触の効果に再現性がない可能性である。最後に，従属変数となったすべての指標が社会的認知をうまく測定できていなかった可能性である。これらの可能性を検討するためには，今後更なる研究を行う必要がある。

今回の実験における椅子の距離の測定には，レズビアンとの対談を行うことを予期させる教示が含まれていたと言える。Darley & Berscheid（1967）は，接

触予期が接触相手に対する態度をポジティブにすることを示している。本研究の結果からは，少なくとも本研究で用いた集団間不安と顕在的態度の指標について，そのような接触予期による影響を有意に受けなかったことが言えよう。

7.3　研究 7　レズビアンに対する日本の女性異性愛者の態度に仮想接触が及ぼす効果―カテゴリプライミングの効果との比較―[6]

目的

研究 7 では，研究 5 で確認されたレズビアンとの仮想接触が有するポジティブな効果について，レズビアンというカテゴリをプライミングしたことによる効果ではないことを確認する。具体的には，仮想接触と交流の想像ではないカテゴリプライミングとの間で，その後のレズビアンに対する集団間不安，顕在的態度，行動への効果を比較する。そして，研究 5，研究 6 の結果も踏まえて仮想接触の効果についての解釈を試みる。第 6 章で述べてきた通りの仮想接触の効果が見られるならば，交流の想像ではないカテゴリプライミングよりも，レズビアンとの仮想接触はその後のレズビアンに対する集団間不安を低減させ，顕在的態度や行動をポジティブにするであろう。

方法

本研究は，日本大学文理学部の研究倫理委員会より承認を得て行われた。

実験参加者　自認する性が出生時の身体性と一致する女性異性愛者の大学生 50 名は，実験条件または統制条件に 25 名ずつランダムに割り振られた。平均

---

[6] 研究 7 は，以下の学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。堀川 佑惟・岡 隆（2018）レズビアンに対する女性異性愛者の態度に仮想接触が及ぼす効果―カテゴリプライミングの効果との比較― 日本心理学会第 82 回大会発表論文集, 66.【宮城県仙台市: 仙台国際センター, 2018 年 9 月 25 日】

年齢は 18.74 歳（*SD*=0.85）であった。

手続き　1 回の実験につき 1 名の参加者が実験に参加した。実験手続きを Figure 7.3 に示す。

最初に，イメージ課題が行われた。まず，実験条件の参加者は，研究 5 と同様の方法で，趣味についての書き出しを行った。その後，以下の教示に従って，レズビアンとのポジティブな仮想接触を行うよう求められた。「あなたは休日，あなたの友人からの紹介で，趣味の合うひとりの女性と 2 人で過ごすことになりました。その女性とあなたが会うのは初めてです。そしてあなたは，その女性が同性愛者であることをその女性から事前に知らされていました。あなたは，その相手と会ってすぐに意気投合し，今，その人と一緒に共通の趣味を楽しんでいるところです」。統制条件の参加者は，趣味についての書き出しや仮想接触は行わなかった。代わりに，「これからタイマーが鳴るまで，女性同性愛者についてイメージしてください。」という教示に従い，単にレズビアンについて考える課題を行った。イメージを 2 分間行った後に，想像した内容についての書き

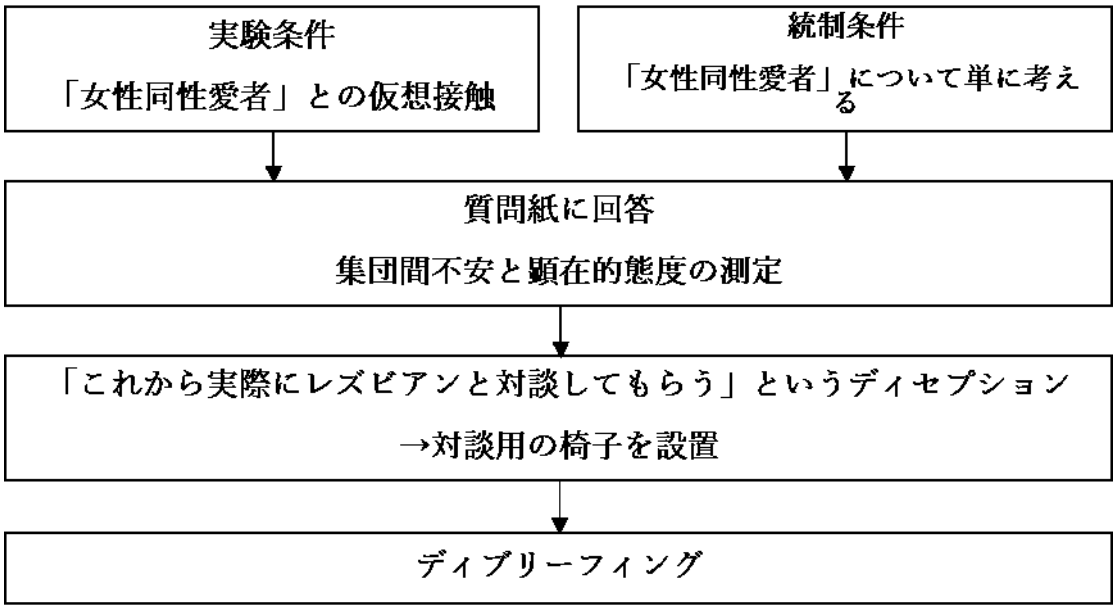

Figure 7.3 研究 7 の手続き。

出し課題が 3 分間行われた。その課題において，実験条件の参加者は仮想接触した相手の特徴や交流内容を，統制条件の参加者は単に考えた内容をそれぞれ可能な限り書き出すよう求められた。

その後，参加者は，レズビアンに対する集団間不安と顕在的態度を測定する質問紙に回答した。参加者は，研究 5，6 と同様に，別の研究者が行っている調査の質問紙であることを伝えられた。この質問紙の測定について，参加者がレズビアンとの接触を予期していない状態で測定するように，すなわち，社会的距離の測定より前に測定するように，研究 5 から測定順序を変更した。

集団間不安尺度は,研究 6 において一部の項目に床効果がみられたことから,仮想接触研究である Turner, West, & Christie（2013）で用いられたものを参考としたものに変更された。参加者は,「以下の質問を読み，それに対するあなたの考えに最も近いところに○をつけてください。」という教示のもと,「1.もしあなたが女性同性愛者に会ったら,あなたはどの程度気まずいですか？(逆転項目)」といった 4 つの項目に 1（まったく気まずくない）から 7（とても気まずい）の数字で回答した。他の項目文については,「どの程度」までは項目 1 と同文であり，その後「楽しいですか？」「堂々としていますか？」「リラックスしていますか？」と続いた。それらの項目の回答方法も各項目文に準拠した。たとえば 2 番の項目であれば，1（まったく楽しくない）から 7（とても楽しい）の数字で回答が求められた。

顕在的態度は，研究 5 で用いた ATLG-J4 の信頼性についての懸念を踏まえ，研究 3 で作成した ATLG-J20 の下位尺度である ATL-J によって測定した。1（非常に反対）から 7（非常に賛成）までの 7 段階評定，10 項目のリッカート尺度として用いた。得点が高いほど，レズビアンに対する顕在的態度がネガティブであることが示される。

その後，研究 5 で用いられた質問紙と同様のフェイスシートが設けられた。

質問紙への回答後，参加者は，これから実験協力者である同性愛者の女性と約 10 分間の対談を行うことを伝えられた。実験者は，今から実験協力者を呼んでくると参加者に告げ，2 分間退室した。その際，参加者に，今いる部屋にある 2 枚のパネルの間に椅子 2 脚を向かい合わせで設置するよう，口頭で指示を与えた。参加者は椅子を設置した後，実験に対する疑問や感想などがあれば用紙に書き出した。この自由記述で，本来の実験目的に気付いたことを報告した参加者はいなかった。

実験者が退室してから 2 分後，参加者は，実験室に戻ってきた実験者に，対談は行われないことを伝えられた。その後，デブリーフィングを受けた。

結果

集団間不安尺度の α 係数は.76，ATL-J の α 係数は.82 であった。

集団間不安尺度得点と ATL-J 得点との間には，有意な正の相関がみられた（r=.53, p<.001）。集団間不安尺度得点と椅子の間隔との間（r=-.05, p=.71），ATL-J 得点と椅子の間隔との間（r=.05, p=.71）には，有意な相関はみられなかった。

実験条件－統制条件間で，レズビアンに対する集団間不安尺度得点，ATL-J 得点，椅子の間隔に差がみられるかを t 検定によって検討した（Table 7.4）。その結果，ATL-J 得点については，実験条件の参加者（M=1.68, SD=0.56）が統制条件の参加者（M=2.11, SD=0.72）よりも有意に低かったことが示された（t(48)=2.32, p=.02, d=0.65）。一方，集団間不安得点については，実験条件の参加者（M=2.62, SD=1.10）と統制条件の参加者（M=2.98, SD=1.03）との間で有意差はみられなかった（t(48)=1.19, p=.24, d=0.33）。椅子の間隔についても同様に，実験条件の参加者（M=60.35cm, SD=15.10）と統制条件の参加者（M=61.54cm, SD=18.20）との間で有意差はみられなかった（t(48)=0.25, p=.80, d=0.04）。

Table 7.4
女性同性愛者との仮想接触と単に女性同性愛者について考えることとの間でのレズビアンに対する態度への効果の比較（研究7）

	女性同性愛者との仮想接触		女性同性愛者について単に考える				
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*	*p*	*d*
集団間不安	2.62	1.1	2.98	1.03	1.19	0.24	0.33
ATL-J	1.68	0.56	2.11	0.72	2.32	0.02	0.65
椅子の間隔(cm)	60.35	15.1	61.54	18.2	0.25	0.80	0.07

注）両条件とも $n = 25$。

考察

研究 5，研究 6 の結果とは異なり，研究 7 ではレズビアンとのポジティブな仮想接触を行うことによって，レズビアンに対する顕在的態度が有意にポジティブになることが示された。この結果の原因については，第一種の過誤の可能性を除くと，以下の 2 つの可能性が考えられる。1 つ目は，尺度を変えたことである。研究 5，研究 6 で用いられた ATLG-J6 の ATL-J と研究 7 で用いられた ATLG-J20 の ATL-J とは測定概念を共有してはいるものの，第I部の研究においても本研究においても，十分な信頼性が確認されたのは後者のみである。2 つ目は，気分の効果である。ポジティブな交流の想像は，研究 5，研究 6 では実験条件だけでなく統制条件でもなされた一方，研究 7 では実験条件のみで行われた。この想像がポジティブな気分を喚起したために，研究 7 でのみ条件間で結果の差異がみられた，という解釈である。ただし，これら 2 つの解釈のうち後者を真と考えた場合には，研究 7 で集団間不安や行動の指標に有意差がみられていない結果を解釈することが困難になる。また，第 6 章で述べた通り，行動は集団間不安や顕在的態度によって説明されるものであると考えられる。しかし，研究 5 においてはレズビアンに対する行動に条件間差が見られたにもかかわらず，顕在的態度に有意差が見られなかった。仮に研究 5 における顕在的

態度に関する結果が真であるとするならば，仮想接触が直接的に行動に影響を及ぼすことを示唆する結果となるものの，その因果関係のメカニズムについて説明を試みることは困難である。以上より，将来の更なる実証研究こそ必要であるものの，レズビアンとのポジティブな仮想接触が顕在的態度をポジティブにする効果を有することを示唆する結果が得られたと考えられる。

レズビアンに対する集団間不安について，研究 5，研究 6 と同様に，研究 7 においてもレズビアンとのポジティブな仮想接触が有意な影響を与えるという結果は見られなかった。この結果によって，研究 5 の結果についての，接触予期や気分の変化によって集団間不安が両条件とも大きく低減された，という解釈は成り立たなくなった。この研究 7 でレズビアンとのポジティブな仮想接触が ATL-J 得点を低下させたことから，レズビアンとのポジティブな仮想接触が顕在的測度には影響しない，という解釈もまた棄却される。残された解釈可能性は，レズビアンを想像すること自体が多くの参加者にとって困難であるために,その想像がレズビアンに対する集団間不安を低減することができなかった，という可能性である。研究 7 においても，過去にレズビアンと交流があると回答した参加者は，50 名中 13 名と少数であった。

レズビアンに対する行動について，研究 5，研究 7 それぞれの結果を考え合わせると，レズビアンとのポジティブな仮想接触はレズビアンに対する行動をポジティブにする一方で，その効果は接触の想像ではないカテゴリプライミングと差がないものと考えられる。研究 7 でみられた実験条件・統制条件双方のレズビアンとの椅子の間隔が，研究 5 でみられた実験条件のそれと同程度ないしより短かったことからも，この解釈は支持される。差がみられなかった理由については，集団間不安に関する結果の解釈と同様に，レズビアンを想像することが困難であったためであると解釈できよう。

ただし，研究 5，6 において仮想接触による顕在的態度がポジティブになる効果が見られなかった理由について実証的に検討できていないため，現状ではレズビアンとの仮想接触が女性異性愛者の顕在的態度をポジティブにする効果が頑健なものであると主張することは難しい。その理由を明らかにするため，以降の研究では，仮想接触がその後の態度に及ぼす効果のうち，感情的な要素により焦点を当てて検討することとした。具体的には，接触するメンバーが所属する集団に対する態度について，これまで扱ってきた顕在的態度の測定のみではなく，非意識的，非統制的な潜在的態度の測定も同時に行う。

第 8 章　仮想接触が偏見に及ぼす効果の一般化可能性―精神疾患患者との仮想接触を扱った検討―

第 7 章では，レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する態度をポジティブにする効果が示された。第 8 章ではこの効果について，レズビアンとの仮想接触特有のものであるか，それとも日本における仮想接触に一般的にみられる効果であるかを検討するため，研究 8 の報告を行う。研究 8 では，第 7 章で扱った仮想接触について，接触する外集団のメンバーを精神疾患患者とした場合の効果を確認した。

8.1　研究 8　精神疾患患者との仮想接触が精神疾患患者に対する態度に及ぼす効果[7]

目的

研究 8 では，精神疾患患者との仮想接触が精神疾患患者に対する偏見に及ぼす効果について扱うことで，仮想接触の対象を精神疾患患者とした場合に，研究 5 から 7 までで見られた結果と同様の結果が見られるかを検討する。日本における精神疾患患者に対する偏見については，研究 1 において，他のマイノリティに対する偏見と同程度かそれ以上に強いことが示されている。

この研究 8 では,研究 7 と同じく,集団間不安と顕在的態度の指標を用いて,仮想接触がその後の集団間不安,顕在的態度に及ぼす影響について検討を行う。加えて，以下に示す 2 つの手段によって，仮想接触がその後の態度に及ぼす影

[7] 研究 8 は，以下の学会ポスター発表の内容を加筆修正したものである。堀川佑惟・岡 隆（2018）精神疾患患者とネガティブなステレオタイプとの連合に仮想接触が及ぼす効果―代替思考としての仮想接触の役割に注目した検討― 日本社会心理学会第 59 回大会発表論文集, 124.【大阪府茨木市: 追手門学院大学西条キャンパス, 2018 年 8 月 28 日】

響についてより詳細に検討する。まず，仮想接触が精神疾患患者に対する潜在的態度に及ぼす影響ついて調べるため，従属変数として精神疾患患者とネガティブなステレオタイプとの連合を調べる IAT 課題を用いることとした。一般に，特定の人々とネガティブな概念との潜在的連合は，潜在的態度の指標として用いられる。また，仮想接触によって態度がポジティブになる効果の持続性を検討するため，全ての従属変数を，実験操作直後だけでなくその 2 週間後にも測定することとした。これらの検討によって，研究 5 から 7 まででは不明瞭であった仮想接触がその後の態度に及ぼす影響についてより詳細に検討できると考える。

第 7 章の実験とは異なり，この研究では社会的距離の測定は行わない。すなわち，行動の指標を設けない。この研究の実験では同一の従属変数の測定を 2 度行う必要があるために椅子の距離の課題のディセプションを行うことができないこと，非意識的・統制的な偏見の指標として IAT 課題を用いていることがその理由である。一般に，他者に対する行動の変容はその他者に対する感情の変容の結果として表れるものであると考えられるため，仮想接触が態度に及ぼす影響が明らかになった段階では，仮想接触が行動に及ぼす影響についての検討も行う意義は大きくなるであろう。

方法

本研究は，日本大学文理学部の研究倫理委員会より承認を得て行われた。

デザイン　実験室実験は，2（仮想接触有無：あり対なし）×2（測定時期：イメージ直後対イメージ 2 週間後）の混合計画で行われた。以下，仮想接触あり条件を実験条件，仮想接触なし条件を統制条件，イメージ直後条件を T1，イメージ 2 週間後条件を T2 とする。

実験参加者　病院・クリニックの精神科への受診経験がない日本大学の大学

生 86 名が参加した。神経科，神経内科，心療内科受診経験者や各種相談機関での被カウンセリング経験者は，研究対象から除外されなかった。1 回目・2 回目双方の実験に参加した 80 名（実験条件：男性 20 名，女性 21 名。統制条件：男性 20 名，女性 19 名）が分析対象となった。

実験は 2 回に分けて行われた。1 回の実験につき，1 名または 2 名の学生が参加した。2 名の参加者が同時に参加した場合にも，実験中，その 2 名はパネルで隔てられ，お互いの様子を知ることはできなかった。

手続き　実験手続きを Figure 8.1 に示す。

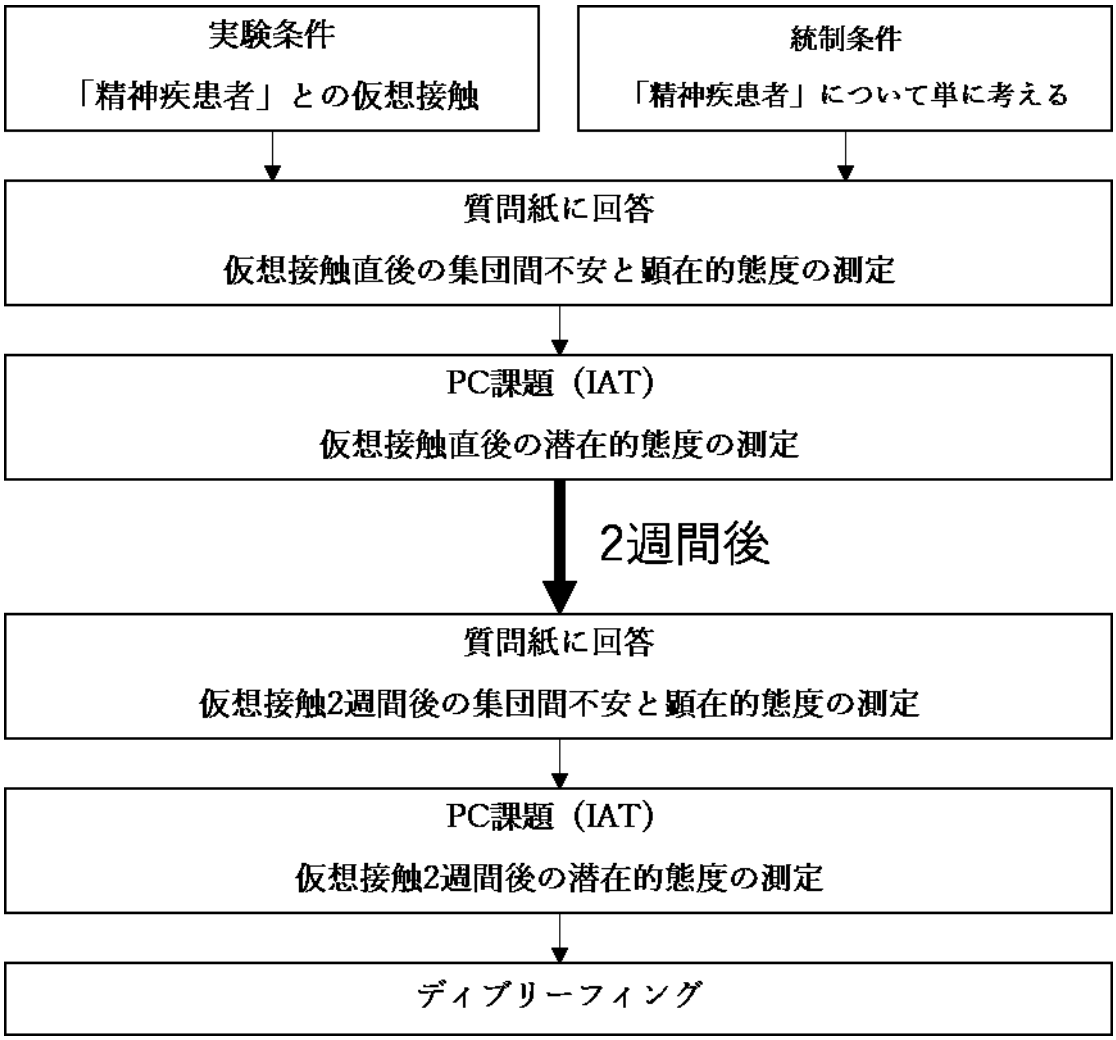

Figure 8.1 研究 8 の手続き。

1 回目の実験では，実験開始前に，参加者は実験参加の任意性や個人情報の扱われ方などの研究倫理に関する十分な説明を受けた。その後，参加者は仮想接触を行い，質問紙への回答と PC 課題を終えた。2 回目の実験では，1 回目の実験と同じ質問紙課題と PC 課題が行われた後，デブリーフィングが行われた。

実験条件の仮想接触の手続きは，Turner, West, & Christie (2013)を基に作成された。最初に，実験条件の参加者は，実験者から用紙を 1 枚渡された。そして，その用紙の空欄に，自身が休日に誰かとしたいことを 3 つまで書き，その中でも一番したいことの右に星マークを書くように教示された。

次に，参加者は実験者から以下のシナリオが書かれた紙を渡され，口頭でも同じシナリオを教示された。「あなたは休日，趣味の合うあなたと同性の相手と，2 人で一緒に過ごすことになりました。その人とあなたが会うのは初めてです。そしてあなたは，その人が精神疾患者であり，精神科へ定期的に通院していることを事前に知らされていました。あなたは，その相手と会ってすぐに意気投合し，今，その人と一緒に共通の趣味を楽しんでいるところです。」そして参加者は，このシナリオに従った，ポジティブで，リラックスした，心地良い交流をイメージするよう，2 回繰り返して指示された。趣味は，最初の用紙に書き出した中から選択された。星マークをつけた趣味ではイメージしにくい場合には，他の趣味を選択しても良いという教示が，実験者によってなされた。

仮想接触は 2 分間行われた。その後参加者は，最初に渡された用紙の裏面に，イメージの中で交流した相手の特徴とその交流の内容について，可能な限り書き出すよう求められた。この書き出しは 3 分間行われた。

統制条件の参加者には，休日に誰かとしたいことについての書き出しと，仮想接触の教示は行われなかった。代わりに，「精神科に定期的に通院している精神疾患者」についてイメージすることが求められた。参加者は，イメージを 2

分間行った後，イメージした内容について，用紙への 3 分間の書き出しを行った。

全参加者を対象に，それらの課題の後に行われた質問紙は，PC 課題を行うための導入課題と称された。このディセプションは，仮想接触とは別の課題であることを参加者に伝え要求特性が生じにくくするため，また，日をまたいで同じ質問紙に 2 回回答することについて参加者に不自然な手続きであると思われないようにするためのものであった。2 回の質問紙は同一の内容で，精神疾患患者への集団間不安と，精神疾患患者に対する顕在的態度を測定するものであった。

集団間不安の質問は，Turner, West, & Christie (2013)を参考に作成された。参加者は,「以下の質問を読んで，あなたの考えに最も近い数字 1 つを○で囲んで示してください。」という教示のもと，4 項目に 7 段階評定（1-7）で回答した。すべての項目は「もしあなたが精神疾患者に会ったら，あなたはどの程度」という教示で始まり，その後「気まずいですか？（逆転項目)」「楽しいですか？」「堂々としていますか？」「リラックスしていますか？」と続いた。得点が高いほど，精神疾患患者への集団間不安が強いことを示す。

精神疾患患者に対する顕在的態度の指標には，先行研究において信頼性と妥当性の報告がなされた，Link スティグマ尺度日本語版（下津・坂本・堀川・坂野, 2006; 下津・坂本, 2010）が用いられた。12 項目 4 段階評定（1-4）の尺度で，得点が高いほど，精神科にかかったことがある精神疾患患者に対する顕在的態度がネガティブであることを示す。

質問紙課題の後，精神疾患患者と，精神疾患患者に対するネガティブなステレオタイプとの連合を測定するため，PC 上で身体疾患者－精神疾患者 IAT（Implicit Association Test）が行われた。この課題は,「身体疾患者－精神疾患

者」と「無害な－危険な」との潜在的連合強度を測定するテストである。試行では，画面の左上，右上に表示されるこれらのカテゴリのいずれかに属する語が，画面中央に表示された。参加者はその語がいずれのカテゴリに当てはまるかを，キーボードのＩキーとＥキーを用いて，できるだけ早く，正確に弁別するよう求められた。

各カテゴリの語は，Mental Illness IAT（IAT Corp., 2017）を参考とした。ただし，オリジナルの Mental Illness IAT のカテゴリである「Physically Ill People」「Mentally Ill People」それぞれが有する各 4 語の語群の中には，日本では病名や病状に関する認知度が低いと思われる疾患が多く含まれていると考えられたため，予備調査によって項目の再選定が行われた。Mental Illness IAT で用いられた 8 語を日本語訳したものに加え，久保（2008）を参考に知名度が高いと考えられる身体疾患名 6 語，精神疾患名 6 語を加えた 20 語が，この予備調査には用いられた。この際，心身症に当たり得る病名は明確な弁別が困難であると考えられたため，選定されなかった。168 名（男性 102 名，女性 66 名）の大学生が，これらの 20 語について身体疾患であるか精神疾患であるかを，1（間違いなく身体の疾患）から 4（間違いなく精神の疾患）の 4 段階評定に 0（わからない）を加えた 5 件法で回答した。身体疾患については 1 と 2，精神疾患については 3 と 4 の選択肢が正答とされ，正答率が 80%を超えた語の中から病理の重複がない範囲で語群を選定した。選定した語群を Table 8.1 に示す。最終的な語群は，「身体疾患者」カテゴリが「骨粗しょう症」「ヘルニア」「歯周病」「貧血」の 4 語，精神疾患者カテゴリが「強迫性障害」「ストレス障害」「うつ病」「パニック障害」の 4 語，「無害な」カテゴリが「無害な」「安全な」「平和な」「優しい」の 4 語，「危険な」カテゴリが「危険な」「あぶない」「暴力的な」「攻撃的な」の 4 語とされた。

IAT の得点は，Greenwald, Nosek, & Banaji（2003）の Improved algorithm に従って算出された。「身体疾患者」と「無害な」が左上に，「精神疾患者」と「危険な」が右上にあるフェイズと，「精神疾患者」「身体疾患者」が反対となるフェイズとがあり，それぞれのフェイズの反応時間や正誤を基として得点算出がなされる。得点が高いほど，「精神疾患者」と「危険な」というネガティブなステレオタイプとの連合が強いことが示される。

結果

T1，T2 それぞれの集団間不安得点，Link スティグマ尺度日本語版得点（この章では以下，顕在的態度得点とする），身体疾患者―精神疾患者 IAT 得点（以下，IAT 得点とする）の平均点と標準偏差を Table 8.2 に示す。

集団間不安得点，顕在的態度得点，IAT 得点それぞれを目的変数とし，2（実験条件対統制条件）×2（T1 対 T2）の混合計画分散分析を行った（Table 8.3）。集団間不安得点については，仮想接触有無の主効果（$F(3, 78)=6.98$, $p=.01$, $\eta_p^2=.082$）と交互作用（$F(3, 78)=19.22$, $p<.001$, $\eta_p^2=.198$）がみられた。測定時期の主効果は有意ではなかった（$F(3, 78)=3.03$, $p=.085$, $\eta_p^2=.037$）。測定時期の各水準における仮想接触有無の単純主効果を確認した結果，仮想接触直後では実験条件の参加者が統制条件の参加者よりも有意に得点が低かったものの（$F(1, 78)=19.25$, $p<.001$, $\eta_p^2=.325$），2 週間後（$F(1, 78)=3.41$, $p=.069$, $\eta_p^2=.082$）では条件間に有意な得点差はみられなかった。顕在的態度得点については，主効果と交互作用はみられなかった（Fs<1）。IAT 得点については，仮想接触有無の主効果（$F(3, 78)=7.28$, $p=.009$, $\eta_p^2=.085$）がみられ，実験条件の参加者が統制条件の参加者よりも有意に得点が高いことが示された。測定時期の主効果（$F<1$）と交互作用（$F(3, 78)=3.64$, $p=.060$, $\eta_p^2=.045$）は有意ではなかった。

考察

Table 8.1
予備調査にて用いられた疾患名（研究8）

身体疾患	精神疾患
糖尿病(Diabetes)	強迫性障害(Obsessive-Compulsive Disorder)
多発性硬化症(Multiple Sclerosis)	統合失調症(Schizophrenia)
盲腸(Appendicitis)	双極性障害(Bipolar Disorder)
脳性まひ(Cerebral palsy)	うつ病(Depression)
骨粗しょう症	解離性障害
白内障	ストレス障害
ヘルニア	神経症
歯周病	人格障害
血友病	自閉症
貧血	不安障害

注）英語はオリジナルのMental Disorder IATで用いられた語

Table 8.2
条件毎の変数の平均得点（研究8）

	T1		T2	
	接触あり	接触なし	接触あり	接触なし
集団間不安	3.35(0.96)	4.27(1.18)	3.82(0.97)	4.06(1.06)
顕在的態度	2.42(0.47)	2.47(0.46)	2.37(0.53)	2.48(0.41)
潜在的連合	0.29(0.45)	0.14(0.46)	0.40(0.49)	0.05(0.51)

()内は標準偏差。

Table 8.3
2×2混合計画分散分析の結果（研究8）

	集団間不安		顕在的態度		潜在的連合	
	F	η_p^2	F	η_p^2	F	η_p^2
接触有対無(A)	6.98**	0.08	0.59	0.01	7.28**	0.09
T1対T2 (B)	3.03†	0.04	0.32	0.00	0.07	0.00
(A)×(B)	19.22**	0.20	0.86	0.01	3.64†	0.04

† $p<.10$, ** $p<.01$

研究5から研究7までで扱われたレズビアンとの仮想接触とは異なり，精神疾患患者に対する集団間不安は精神疾患患者とのポジティブな仮想接触によって低減されることが示された。顕在的態度についてもレズビアンとの仮想接触

とは異なり，仮想接触直後，2 週間後ともに仮想接触を行わなかった場合と効果が変わらないことが示された。これらの結果から，レズビアンとの仮想接触と精神疾患患者との仮想接触とではその後の偏見に及ぼす効果がそれぞれ異なることが示唆された。ただし，集団間不安の差は 2 週間後には有意でなくなってしまうこともまた示された。

一方，精神疾患患者とネガティブなステレオタイプとの連合については，仮想接触によって強化され，更にその効果が 2 週間後にも残っているという結果がみられた。このことは，精神疾患患者との仮想接触が精神疾患患者に対する潜在的態度をネガティブにすることを示唆する。この結果は，同性愛者との仮想接触においても再現されるのであろうか。先行研究においては，ゲイ男性との仮想接触についても，潜在的態度がポジティブになるという結果は見られていない。この点を明らかにするためには，同性愛者との仮想接触研究にて追試を行い，その効果を確認する必要があるであろう。

第 9 章　第II部総合考察

第II部では，女性異性愛者によるレズビアンとのポジティブな仮想接触がレズビアンに対する態度に与える影響について検討した。研究 5 では，レズビアンとのポジティブな仮想接触を行った参加者と女性異性愛者とのポジティブな仮想接触を行った参加者との間で，レズビアンに対する集団間不安，顕在的態度，行動に差がみられるかを確認した。その結果，仮想接触によってレズビアンに対する行動がポジティブになることが示されたものの，集団間不安と顕在的態度については 2 条件間に有意な差がみられなかった。研究 6 では，従属変数の測定順序の要因を加えて研究 5 を追試した。その結果，仮想接触と測定順序ともにその後の集団間不安・顕在的態度・行動への有意な主効果は見られなかった。交互作用についても同様に見られなかった。研究 7 では，レズビアンとの仮想接触を行った参加者と単にレズビアンについて考えた参加者との間で，レズビアンに対する集団間不安，顕在的態度，行動に差がみられるかを確認した。その結果，仮想接触によってレズビアンに対する顕在的態度がポジティブになることが示されたものの，集団間不安と行動については 2 条件間に有意な差がみられなかった。そして研究 8 では，研究 5 から 7 までとは異なり，精神疾患患者との仮想接触によって，精神疾患患者に対する集団間不安の低減と，精神疾患患者とネガティブなステレオタイプとの連合の強化がみられた。この研究 8 において，精神疾患患者との仮想接触ではこれらの結果とは異なる結果が見られたことから，研究 5 から 7 までの結果についてはレズビアンとの仮想接触特有のものであることが示唆された。すなわち，研究 5 から 7 までの結果を考察するにあたっては，第Ⅰ部で議論と検討を重ねた日本におけるレズビアンに対する異性愛者の偏見の特徴について考慮する必要がある。

第II部における 4 本の研究の考察を考え合わせ，結論を述べる。レズビアン

に対する顕在的態度については，レズビアンとのポジティブな仮想接触によってポジティブになることが示唆された。しかし，レズビアンとのポジティブな仮想接触が，レズビアンに対する態度全般をポジティブにするわけではないこともまた示された。その仮想接触がレズビアンに対する行動に与えるポジティブな影響は，単なるカテゴリプライミングと有意な差がない程度のものであろう。ただしこれらの効果について，再現性が低い，または効果が弱く安定していないものである可能性がある。

また，集団間不安については，レズビアンとのポジティブな仮想接触によっては低減しないことが一貫して示された。しかし，研究 8 においては，精神疾患患者との仮想接触によって精神疾患患者に対する集団間不安が一時的にではあるが低減することが示された。

この要因としてまず考えられるのは，日本において同性愛について触れることがタブー視されていること（小宮，2015；山下，2016）から，レズビアンの想像自体が困難であったことが考えられる。文化に強く根差した偏見が存在する場合に，その偏見の対象となる集団との仮想接触の効果がみられないかもしれない（Miles & Crisp, 2014）という指摘も，この解釈を支持する。しかしこの解釈は，レズビアンを想像することが困難であるにもかかわらず，態度の低減がみられたことについての説明を要する。

最も考えやすいその説明は，強い集団間不安を向ける相手とのポジティブな接触を想像することによって認知的不協和が生じた，というものであろう。仮に参加者が，今までレズビアンとの交流を持った経験がないために，あるいは少ないために，レズビアンとの接触に不安を感じていたならば，レズビアンとのポジティブな交流を行うことは認知的な不協和を生じさせるであろう。そして交流者は，その不協和を解消するため，接触相手のレズビアンに対し好感を

抱くことが考えられる。その過程が接触の想像によって再現されたのであれば，集団間不安が維持されたまま相手に好意的になるかもしれない。この推論に関しては第Ⅲ部にて更なる検討を行い，その研究結果も踏まえて再度考察する。

第Ⅱ部においては，実際に接触することが困難なレズビアンに対する態度を簡易な手続きによって部分的にでもポジティブにできるという，レズビアンとの仮想接触の有用性がある程度示されたと言える。多くの先行研究において示されているものの，本論文のここまでの研究においてはまだ検討することができていないゲイ男性との仮想接触を含め，仮想接触によってレズビアン及びゲイ男性に対する偏見をより低減するためにはどのような改善を図れば良いか，検討する意義は大きいと考えられる。

第**III**部

レズビアン及びゲイ男性との仮想接触効果に影響を及ぼす要因

仮想接触研究にはいくつかの課題が存在する。たとえば，介入の効果の頑健性・安定性・持続性・一般化可能性，態度を内面化させるために必要な試行回数，実際の接触や拡張的接触とのメカニズムの共通点と差異，仮想接触後の実際の接触への影響などである。第Ⅲ部ではこのうち仮想接触の効果について，特にその頑健性・安定性に焦点を当てた。具体的には，仮想接触の手続きを他のイメージの利用可能性に関する研究や集団間接触研究から得られた知見を基に改良することを試みる。そして，改良がなされた仮想接触によって，レズビアンだけではなく第Ⅱ部までで検討することができていないゲイ男性に対する異性愛者の態度がどのように変わるかを検討する。

Crisp & Turner（2009）からは，仮想接触の理論は，イメージに関する理論と集団間接触の理論を組み合わせたものであると理解することができる。Garcia, Weaver, Moskowitz, & Darley（2002）は，社会的文脈の想像が，その文脈に実際に置かれている場合と同様の効果を後続刺激に与えるプライムとして機能することを示している。このことから，想像によって接触の効果を再現しようと試みたのが仮想接触である。

第Ⅲ部は研究 9，研究 10 の 2 本からなる。研究 9 ではイメージの利用可能性に関する先行研究の知見を，研究 10 では集団間接触に関する先行研究の知見をそれぞれ応用し，仮想接触の効果にどのような効果が及ぶかを検討した。

第 10 章　イメージの利用可能性に関する研究の仮想接触研究への応用

10.1　イメージの利用可能性に関する研究の概観と仮想接触への応用可能性

イメージに関する先行研究を応用するにあたって，その思考の利用可能性，すなわち接触する状況についての想像しやすさを操作することを考えた。高林・沼崎・小野・石井（2008）では，伝統的女性ステレオタイプまたは非伝統的ステレオタイプを想像した女性参加者の中で，想像しやすさが高かった参加者のみにそのステレオタイプを内面化する効果がみられた。このことから，想像しやすい仮想接触であるほど，その効果は強まることが類推される。

利用可能性が高い代替思考である仮想接触を考えるにあたって，仮想接触の対象となる外集団が持たれているステレオタイプに注目した。外集団に関するステレオタイプはプライミングされると外集団と結び付きやすい一方で，反ステレオタイプはプライミングされても外集団と結び付きにくいため，代替思考としての利用可能性は低い（山本・岡，2018）。また，反ステレオタイプ的な思考を代替思考として用いると，かえって抑制したいステレオタイプへのアクセス可能性を高めてしまうことも示されている（Oe & Oka, 2003）。ポジティブな仮想接触は，ネガティブなステレオタイプの対象である外集団のメンバーとのポジティブな接触の想像であるため，反ステレオタイプ的な思考のひとつであると言えよう。そのため，ステレオタイプに反する内容の仮想接触の教示は，利用可能性が低く，外集団とネガティブステレオタイプとの連合を弱めることができず，むしろ強めてしまうことが考えられる。研究 8 にて，精神疾患患者との仮想接触が精神疾患患者とネガティブなステレオタイプとの連合を強めたのも，このためであるかもしれない。

一方で，抑制対象のステレオタイプとは別次元の，外集団についてのポジティブなステレオタイプを代替思考として用いた場合には，抑制対象となるネガティブなステレオタイプがうまく抑制できることも示されている（田戸岡・村田，2010）。このことから，レズビアン及びゲイ男性に関するポジティブなステレオタイプを有するレズビアン及びゲイ男性との仮想接触は，そうでない仮想接触よりも，レズビアン及びゲイ男性とネガティブなステレオタイプとの連合を弱める，あるいは強めないことが考えられる。

10.2　研究 9　ゲイ男性ステレオタイプと一致するゲイ男性との仮想接触の効果

目的

研究 9 では，ゲイ男性との交流がより想像しやすい場合，より想像しにくい場合に,その後のゲイ男性に対する態度にどのような影響が及ぶかを検討する。その際，感情価の影響を統制するため，本研究で用いるステレオタイプ性格特性語は全てポジティブなものになるようにした。優位なゲイ男性ステレオタイプと一致するポジティブな性格特性を有しているゲイ男性との仮想接触は，ゲイ男性ステレオタイプと不一致であるポジティブな性格特性を有しているゲイ男性との仮想接触や，そのような情報が与えられない通常の仮想接触，そして仮想接触を行わなかった場合よりも，その後のゲイ男性に対する男性異性愛者の態度をポジティブにするであろう。また，ゲイ男性ステレオタイプと不一致であるポジティブな性格特性を有しているゲイ男性との仮想接触は，そのような情報が与えられない通常の仮想接触や,仮想接触を行わなかった場合よりも，その後のゲイ男性に対する男性異性愛者の態度をポジティブにするであろう。

方法

本研究は，日本大学文理学部の研究倫理委員会より承認を得て行われた。

デザイン　1 要因 4 水準（ステレオタイプ一致条件，ステレオタイプ不一致条件，ステレオタイプ情報なし条件，統制条件）のデザインであった。

実験参加者　自認する性が出生時の身体性と一致する男性異性愛者の大学生 80 名は，4 条件のいずれかにランダムに割り振られた。1 回の実験につき 1 名または 2 名が参加した。初対面の男性異性愛者との仮想接触を行わなかったことを趣味の書き出しにおいて示した 3 名の参加者を除外した 77 名（平均年齢 19.01 歳，*SD*=1.08）を，本研究の分析の対象とした。

手続き　実験手続きを Figure 10.1 に示す。

まず参加者は,条件毎に指定された課題を行った。統制条件以外の参加者は，研究 5 と同様に趣味の書き出しを行った。その後，ステレオタイプ一致条件の参加者は，研究 4 でみられたポジティブなゲイ男性ステレオタイプと一致する印象（協調的で親しみやすい）を，ステレオタイプ不一致条件の参加者は，研

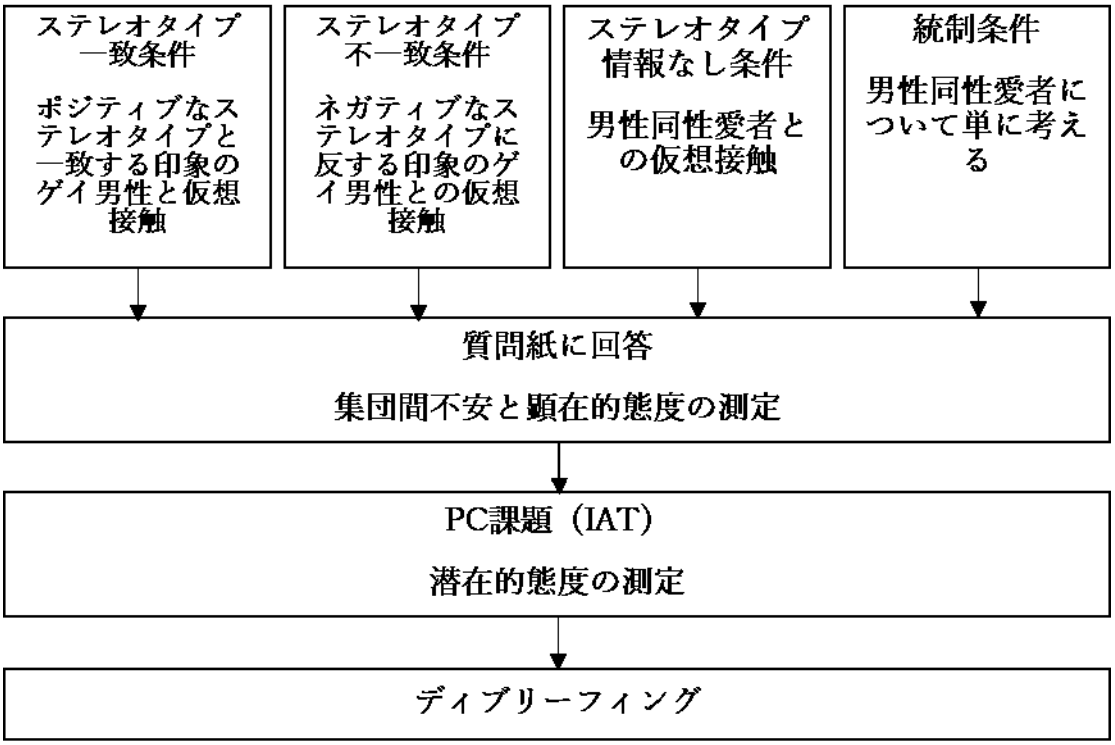

Figure 10.1 研究 9 の手続き。

究 4 でみられたゲイ男性のネガティブなステレオタイプとはジェンダー・共同作動・感情価の 3 次元が反する印象（もの静かでおとなしい）をそれぞれ男性同性愛者から受け，その男性同性愛者と共通の趣味を楽しむ，という内容の仮想接触を行った[8]。ステレオタイプ情報なし条件の参加者は，単に男性同性愛者と共通の趣味を楽しむ，という内容の仮想接触を行った。趣味の書き出しを行わなかった統制条件の参加者は，男性同性愛者について単に考えるよう求められた。

次に参加者は，PC 課題に取り組む前の導入課題と称された質問紙に回答した。質問紙は,Turner, West, & Christie (2013)を参考に作成した研究 7 と同様の集団間不安尺度 4 項目と，研究 3 で作成した ATLG-J20 の下位尺度 ATG-J10 項目から構成された。

その後参加者は，PC 課題と称されたゲイ男性－異性愛者 IAT（Implicit Association Test）を実施した。この課題は,「異性愛者－ゲイ男性」と「良い－悪い」との潜在的連合強度を測定することで，潜在的態度を測定するテストである。試行では，画面の左上，右上に表示されるこれらのカテゴリのいずれかに属する語が，画面中央に表示される。参加者はその語がいずれのカテゴリに当てはまるかを，キーボードの I キーと E キーを用いて，できるだけ早く，正

[8] 研究 4 において，感情価がネガティブである 4 語群の中で男性異性愛者からゲイ男性へのステレオタイプの評定得点が最も高かったのは，伝統的女性・共同性・ネガティブの語群であった。しかし，男性異性愛者からゲイ男性へのステレオタイプはアンビバレントなものであり，その語群とジェンダー・共同作動・感情価の 3 次元が反する伝統的男性・作動性・ポジティブの語群についても，男性異性愛者からゲイ男性への優位なステレオタイプであることが示されている。そのため，感情価がネガティブである 4 語群の中でも次点で得点が高かった伝統的男性・共同性・ネガティブの語群に反する，伝統的女性・作動性・ポジティブの語群を本研究では用いることとした。

確に弁別するよう求められた。各カテゴリの刺激は, Gay-Straight IAT（IAT Corp., 2018）を参考とした。「良い」カテゴリは「嬉しさ」「愛情」などの 8 単語で,「悪い」カテゴリは「苦悩」「ひどい」などの 8 単語でそれぞれ構成された。「異性愛者」カテゴリには男女 1 名ずつが並んでいることを示すピクトグラムの他,「異性愛」「異性愛者」の 2 単語が用いられた。「ゲイ男性」カテゴリには男性 2 名が並んでいることを示すピクトグラムの他,「ゲイ男性」「同性愛」「同性愛者」の 3 単語が用いられた。カテゴリ毎の刺激一覧を Table 10.1 に示す。

IAT の得点は，Greenwald, Nosek, & Banaji（2003）の Improved algorithm に従って算出された。「異性愛者」と「良い」が左上に,「ゲイ男性」と「悪い」が右上にあるフェイズと,「異性愛者」「ゲイ男性」が反対となるフェイズとがあり，それぞれのフェイズの反応時間や正誤を基として得点算出がなされる。得点が高いほど,「ゲイ男性」と「悪い」というネガティブなステレオタイプとの連合が強いことが示される。

結果

記述統計量と一元配置分散分析の結果を Table 10.2 に示す。4 条件を独立変数，集団間不安を従属変数とした一元配置分散分析の結果，主効果が有意であった（$F(3, 73)=2.93$, $p=.04$, $\eta_p^2=.11$）ため Shaffer 法による多重比較を行った。その結果，ステレオタイプ不一致条件の参加者（$M=3.53$, $SD=0.94$）はステレオタイプ情報なし条件の参加者（$M=2.61$, $SD=1.03$）よりも有意に得点が高いことが示された（$t(73)=2.74$, adjusted $p=.046$, $d=0.86$）。また，ステレオタイプ情報なし条件の参加者の集団間不安得点について，統制条件の参加者の集団間不安得点（$M=3.39$, $SD=1.23$）よりも低いという有意傾向が示された（$t(73)=2.32$, adjusted $p=.07$, $d=0.74$）。同様の分析を，従属変数を顕在的態度（$F(3, 73)=0.44$, $p=.72$, $\eta_p^2=.02$），潜在的連合（$F(3, 73)=1.08$, $p=.36$, $\eta_p^2=.04$）として行った場合には,

Table 10.1
ゲイ男性－異性愛者IATの刺激一覧（研究9）

ゲイ男性	異性愛者	良い	悪い
		嬉しさ	苦悩
		愛情	ひどい
		平和	恐ろしい
		素晴らしい	意地の悪い
		楽しみな	邪悪な
ゲイ男性	異性愛	輝かしい	怖い
同性愛	異性愛者	笑い	失敗
同性愛者		幸せな	害する

Table 10.2
一元配置分散分析の結果（研究9）

	M(*SD*)					
	①一致	②不一致	③情報なし	④統制	*F*	多重比較
集団間不安	3.11(0.96)	3.53(0.94)	2.61(1.03)	3.39(1.23)	2.93*	③<②
顕在的態度	2.56(1.00)	2.96(1.17)	2.59(1.24)	2.78(1.43)	0.44	
潜在的連合	-0.34(0.40)	-0.24(0.50)	-0.05(0.64)	-0.26(0.47)	1.08	

*$p < .05$

有意な主効果はみられなかった。

考察

ゲイ男性に対する集団間不安については，ステレオタイプ情報なし条件，すなわちゲイ男性との通常の仮想接触によって，有意傾向ではあるが，単にゲイ男性について考えた統制条件よりも低いことが示唆された。この点については，ゲイ男性との仮想接触が偏見を低減する効果を有する可能性を示したと言える。ただし，顕在的態度と潜在的連合については条件間での差が見られなかった。

ステレオタイプと不一致である，もの静かで大人しいゲイ男性との仮想接触については，通常の仮想接触よりも集団間不安が有意に高まる結果がみられた。この結果より，ステレオタイプと一致しないゲイ男性，すなわち想像しにくい

仮想接触の場合には集団間不安がかえって高まってしまう可能性が示されたと言える。ただし，もの静かで大人しいゲイ男性がステレオタイプと不一致であったためではなく，もの静かで大人しいという性格特性に接触相手の集団間不安を高める効果がある可能性も考えられる。しかしいずれにせよ，想像する相手の性格特性が仮想接触に影響を及ぼすことは示されたと言える。ステレオタイプと不一致であればどのような性格特性であっても仮想接触に及ぼす効果が同じであるかどうか，どのような外集団を対象としてもポジティブな，あるいはネガティブな効果を仮想接触に及ぼす性格特性の情報があるかを明らかにするためには，今後更なる検討を要するであろう。

ステレオタイプ一致条件として設けた，協調的で親しみやすいゲイ男性との仮想接触については,通常の仮想接触との従属変数の有意差がみられなかった。このことについては，いくつかの解釈が考えられる。まず，これらの性格特性は高共同性を示す語であり，伝統的女性ステレオタイプを示す語であると言える。そのため，男性異性愛者にとって，この性格特性を有するゲイ男性との仮想接触では，ゲイ男性が外集団のメンバーであることをより強調するものであったかもしれない。そのことが，仮想接触の効果をポジティブにするステレオタイプとの一致による想像しやすさの効果と競合した可能性が考えられる。あるいは，協調的で親しみやすい，という性格特性が，絶対的なゲイ男性のステレオタイプではなかったことも可能性として考えられる。この性格特性は，研究 4 において相対的に優位であったものであるものの，研究 4 におけるステレオタイプ当てはまり度得点は中点に近いものであった。このステレオタイプは，男性異性愛者が行うゲイ男性との仮想接触の効果をポジティブにするためには不適であったかもしれない。ステレオタイプ不一致条件で高い集団間不安が見られたことを考えると，これらの可能性を排除できる外集団とステレオタイプ

を用いて，再度検討する価値はあるであろう。

集団間不安の結果については，研究 7 で示されたレズビアンとの仮想接触と単にレズビアンについて考えることとの間で差がみられなかった結果とは異なる結果である。顕在的態度についても，同様の統制条件との有意差がみられた研究 7 とは異なる結果であった。研究 8 における仮想接触直後のデータと比較すると，集団間不安と顕在的態度に関する結果は概ね再現され，潜在的連合に関する結果については異なるものであったと言える。これらの結果について，ゲイ男性特有の結果であると言えるかどうかについて議論するためには，更なるデータを要するであろう。

第 11 章　仮想接触への集団間接触研究の応用

11.1　集団間接触研究の概観と仮想接触への応用可能性

接触仮説　Allport（1954）が提唱した接触仮説によると，外集団のメンバーとの適切な接触は，集団間の嫌悪を低減し，外集団に対するよりポジティブな態度を形成することに繋がる。Pettigrew & Tropp（2006）は 515 の接触研究，713 の独立したサンプルを用いたメタ分析を行い，接触仮説の効果の強さと頑健性を示した。

また，外集団のメンバーとの接触によって外集団に対する態度がポジティブになる効果については，集団間不安の低減を介する効果であることが示されている（Islam & Hewstone, 1993）。この集団間不安は，集団間接触の際に個々が敵意を伴って接触する可能性を増加させる（Plant & Devine, 2003），接触による偏見低減における重要な要因のひとつであるといえる。

集団間の偏見を低減するにあたって，集団間接触は有用な方略である。しかし，しばしば，社会的マジョリティと，偏見の対象となる社会的マイノリティとの間には物理的・社会的距離がある。この論文で扱うレズビアンやゲイ男性についても，この例に漏れない。すなわち，偏見の対象となる外集団のメンバーとは実際には接触できない場合が多い。このことが，この接触仮説を偏見低減の方略として用いる際の問題点のひとつとして挙げられる（Crisp & Turner, 2009）。

接触理論の応用　接触の理論はさまざまな応用がなされ，外集団のメンバーと一対一の直接的な対人接触でなくともその効果が得られることがわかっている。

代表的なもののひとつが，拡張的接触仮説（Extended contact hypothesis; Wright, Aron, McLaughlin-Volpe, & Ropp, 1997）である。これは，内集団のメンバーが外

集団のメンバーと親密な関係にあるということを知ることが，よりポジティブな集団間態度を形成するという理論である。この方略は，外集団との直接の接触が必要なく，対象となる外集団と物理的・社会的距離があり実際の接触が困難である場合にも有用である。同様の理論として，内集団のメンバーが外集団のメンバーとの成功している交流を観察することによって外集団に対する態度がポジティブになるという代理接触（Vicarious contact; Mazziotta, Mummendey, & Wright, 2011）という理論も存在する。

しかし，ここまでに示した理論は，偏見の対象となる外集団に属するメンバーとの直接的ないし間接的な繋がりがなければ，偏見を低減する手段として用いることはできない。この問題を解消する方略として期待されるのが，そのような繋がりが必要とならない仮想接触である。

仮想接触への応用　仮想接触は想像による集団間接触の再現であると考えられている（Crisp & Turner, 2009）。そのため，よりポジティブな態度が形成されやすい集団間接触の理論に基づいた仮想接触であれば，従来の仮想接触よりも態度がポジティブになると考えられる。たとえば，仮想接触に拡張的接触や代理接触の文脈を取り入れることで，仮想接触の効果は強まるであろう。

この仮説について，次節での研究では扱う。具体的には，接触相手である外集団のメンバー,すなわち同性愛者が,異性愛者である自身の友人と仲が良い，という文脈を仮想接触の教示に付与する。そして，その友人も交えて 3 人での交流を想像する。このことによって，自身の内集団のメンバーが外集団のメンバーと仲が良い時に生ずる拡張的接触の効果や，それを観察することによって生ずる代理接触の効果を，自身が行う交流の効果と同時に得られるのではないかと考えられる。

加えて，この三者関係によって交流相手である同性愛者に対する態度がポジ

ティブになる効果は，Heider（1958）のバランス理論によっても説明が可能である。バランス理論によると，三者関係に含まれる 3 つの二者関係の関係性がポジティブであるかネガティブであるかをそれぞれプラスとマイナスで表した際，それらの積がマイナスである場合には不均衡状態であり，積がプラスである均衡状態になるよう関係性が変容しやすい。このことから，自身と友人，交流相手と友人の関係性がそれぞれポジティブであるならば，それらの関係性を均衡状態で維持するために自身と交流相手との関係性もまたポジティブになりやすいと考えられる。

11.2　研究 10　自身・レズビアン・女性異性愛者の三者間での仮想接触がレズビアンに対する態度に及ぼす影響

目的

研究 10 では，自身とレズビアン，そしてその二者の共通の知り合いである女性異性愛者を交えた三者間での交流を想像する仮想接触の手続きが，レズビアンとの仮想接触の効果に及ぼす影響を検討する。仮想接触の相手であるレズビアンが，同席する自身と仲が良い女性異性愛者と仲が良い場合には，自身とレズビアンとの二者間の仮想接触や，仮想接触を行わない場合よりも，その後のレズビアンに対する態度がポジティブになるであろう。同席する自身と仲が悪い女性異性愛者と仲が悪い場合については，探索的に検討を行う。この場合においてはポジティブな接触が想像上で行われにくいとは考えられるものの，Heider（1958）のバランス理論によると均衡状態の三者関係となるため，その場面の想像自体は行いやすいものであると考えられるためである。

方法

本研究は，日本大学文理学部の研究倫理委員会より承認を得て行われた。

デザイン　1 要因 4 水準（正バランス条件，負バランス条件，二者条件，統制条件）のデザインであった。

実験参加者　実験参加希望時に自認する性が出生時の身体性と一致することを報告した女性異性愛者の大学生 47 名は，4 条件のいずれかにランダムに割り振られた。分析対象は，実験時に異性愛者でないことを報告した 3 名を除外した 44 名（平均年齢 18.55 歳，*SD*=0.87）であった。

1 回の実験につき 1 名または 2 名が参加した。2 名の参加者が同時に参加した場合にも，その 2 名が実験を受ける空間はパネルで隔てられ，お互いの様子を知ることはできなかった。

手続き　実験手続きを Figure 11.1 に示す。

まず参加者は，条件毎に指定された課題を行うよう求められた。正バランス条件の参加者は，自身，自身と仲が良い同級生で同性の異性愛者，その同級生と仲が良い初対面の同性の同性愛者の三者で大学の講義の課題に一緒に取り組み，初対面の同性愛者と意気投合したという内容の交流の想像を行うよう求められた。負バランス条件の参加者は，自身，自身と仲が悪い同級生で同性の異性愛者，その同級生と仲が悪い初対面の同性の同性愛者の三者での，正バランス条件と同様の場面を想像した。二者条件の参加者は，自身と初対面の同性の同性愛者との二者間での，同様の場面を想像した。統制条件の参加者は，仮想接触は行わず，女性同性愛者について単に考える課題を行った。

その後，統制条件以外の参加者は，イメージの中で交流した初対面の同性の同性愛者の特徴についてと，イメージの中で行った三者間（二者条件では二者間）での交流の内容を，用紙に 4 分間記述するよう求められた。統制条件の参加者は，イメージした内容について用紙に 4 分間記述するよう求められた。

その記述の後，統制条件以外の参加者は，イメージした状況についてどの程

度はっきりイメージできたかを 1（全くできなかった）から 7（非常にできた）までの 7 段階評定で，イメージした交流についてどの程度快か不快かを 1（不快）から 7（快）までの 7 段階評定で回答を求められた。さらに，正バランス条件と負バランス条件の参加者は，イメージした異性愛者の人物について，普段どの程度同性愛者に好意的であるかを 1（全く好意的ではない）から 7（非常に好意的だ）までの 7 段階評定で，自身がどの程度好きであるかを 1（全く好きではない）から 7（非常に好きだ）までの 7 段階評定でそれぞれ回答を求められた。

次に参加者は，別の実験者が作成した PC 課題に取り組む前の導入課題とし

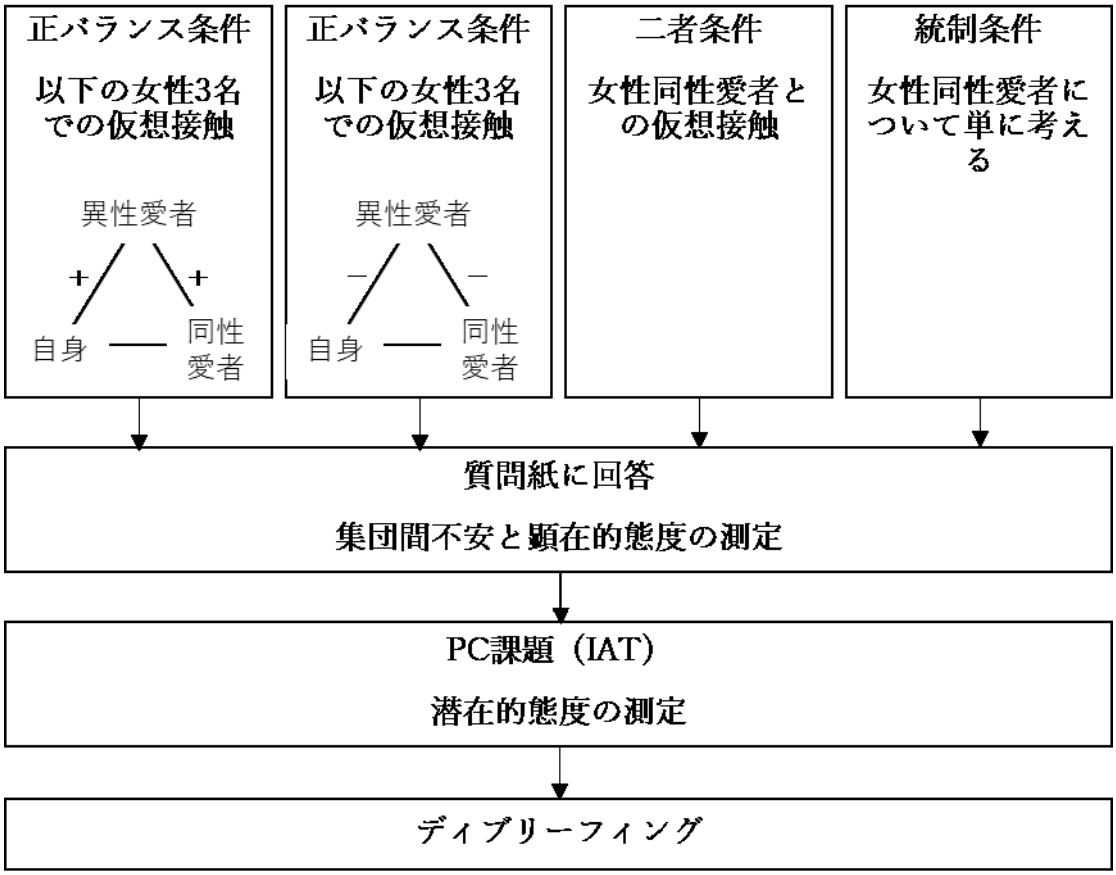

Figure 11.1 研究 10 の手続き。「+」は二者間の関係がポジティブであることを，「−」はネガティブであることをそれぞれ示す。

て質問紙に回答した。このディセプションを設けた理由は，仮想接触課題からは独立した課題であることを参加者に説明するためであった。質問紙は,Turner, West, & Christie (2013)を参考に作成した研究 7 と同様の集団間不安尺度 4 項目と，研究 3 で作成した ATLG-J20 の下位尺度 ATL-J10 項目から構成された。

その後参加者は，PC 課題と称されたレズビアン－異性愛者 IAT（Implicit Association Test）を実施した。この課題は,「異性愛者－レズビアン」と「良い－悪い」との潜在的連合強度を測定することで，レズビアンに対する参加者の潜在的態度を測定するテストである。試行では，画面の左上，右上に表示されるこれらのカテゴリのいずれかに属する語が，画面中央に表示される。参加者はその語がいずれのカテゴリに当てはまるかを，キーボードの I キーと E キーを用いて，できるだけ早く，正確に弁別した。

各カテゴリの刺激は，Gay-Straight IAT（IAT Corp., 2018）を参考とした。「良い」カテゴリは「嬉しさ」「愛情」などの,「悪い」カテゴリは「苦悩」「ひどい」などの，研究 9 で用いたものと同じ 8 単語でそれぞれ構成された。「異性愛者」カテゴリには男女 1 名ずつが並んでいることを示すピクトグラムの他,「異性愛」「異性愛者」の 2 単語が用いられた。「レズビアン」カテゴリには女性 2 名が並んでいることを示すピクトグラムの他,「レズビアン」「同性愛」「同性愛者」の 3 単語が用いられた。

IAT の得点は，Greenwald, Nosek, & Banaji（2003）の Improved algorithm に従って算出された。「異性愛者」と「良い」が左上に,「レズビアン」と「悪い」が右上にあるフェイズと,「異性愛者」「レズビアン」が反対となるフェイズとがあり,それぞれのフェイズの反応時間や正誤を基として得点算出がなされる。得点が高いほど,「レズビアン」と「悪い」というネガティブなステレオタイプとの連合が強いことが示される。

最後に参加者はフェイスシートに回答した。フェイスシートは，年齢，学年，学科，出生時の身体性，恋愛対象[9]，レズビアンとの接触経験，ゲイ男性との接触経験の設問で構成された。身体性は「男性」「女性」の 2 択，恋愛対象は「男性のみ」「女性のみ」「どちらでもない」「わからない」の 4 択であった。探索的に尋ねた接触経験は,「以下のいずれも当てはまらない」「実際にレズビアン（ゲイ男性）と会って話したことがある」「実在のレズビアン（ゲイ男性）を知っている」「空想上のレズビアン（ゲイ男性）を知っている（アニメ，ゲーム，小説など)」の 4 択から複数選択を求めた。

結果

以下にて説明する *t* 検定と一元配置分散分析の結果について，Table 11.1 に示す。

イメージの具体性　正バランス条件（M=4.73, SD=1.01），負バランス条件（M=4.18, SD=1.40），二者条件（M=5.09, SD=0.83）の 3 条件間の得点差を調べるために一元配置分散分析を行った結果，効果は有意ではなかった（$F(2, 30)=1.88$, $p=.17$, $\eta_p^2=.11$）。

交流の快･不快　正バランス条件（M=5.27, SD=0.90），負バランス条件（M=4.36, SD=1.80），二者条件（M=5.64, SD=1.03）の 3 条件間の得点差を調べるために一元配置分散分析を行った結果，効果は有意傾向であった（$F(2, 30)=2.77$, $p=.08$, $\eta_p^2=.16$）。

同性愛者に対する同性の知り合いの普段の好意　正バランス条件（M=5.27,

[9] 研究 5 にて実験後に異性愛者でないことを報告した参加者がいたことを受け，研究 5，6，7，9 においては参加者が異性愛者であるか否かを判別するため募集時にのみ行っていた身体性と恋愛対象に関する質問を，研究 10 では実験中にも改めて行った。

Table 11.1
*t*検定と一元配置分散分析の結果（研究10）

	M(*SD*)						
	①正ﾊﾞﾗﾝｽ	②負ﾊﾞﾗﾝｽ	③二者	④統制	*t*	*F*	多重比較
イメージの具体性	4.73(1.01)	4.18(1.40)	5.09(0.83)	-		1.88	
交流の快さ	5.27(0.90)	4.36(1.80)	5.64(1.03)	-		2.77†	
同性愛者に対する知り合いの好意	5.27(1.19)	3.09(0.94)	-	-	4.76**		
知り合いに対する参加者の好意	6.36(0.81)	3.18(1.89)	-	-	5.14**		
集団間不安	3.45(1.26)	3.11(0.98)	1.95(0.56)	2.75(0.94)		4.88**	③<①,②
顕在的態度	2.10(0.79)	1.76(0.73)	1.99(0.79)	1.68(0.93)		0.63	
潜在的連合	0.12(0.40)	0.00(0.32)	0.03(0.50)	0.27(0.35)		1.07	

†p < .10, **p < .01.

SD=1.19）と負バランス条件（*M*=3.09, *SD*=0.94）との，同性愛者に対する同性の知り合いの普段の好意の評価を比較するために *t* 検定を行った結果，正バランス条件の方が負バランス条件よりも有意に好意的であることが示された（$t(20)=4.76$, $p<.001$, $d=1.95$）。

同性の知り合いに対する参加者の好意　正バランス条件（*M*=6.36, *SD*=0.81）と負バランス条件（*M*=3.18, *SD*=1.89）との，同性愛者に対する同性の知り合いの普段の好意の評価を比較した結果，正バランス条件の方が負バランス条件よりも有意に好意的であることが示された（$t(20)=4.76$, $p<.001$, $d=1.95$）。

条件間の集団間不安，顕在的態度，潜在的連合の差　4 条件間のレズビアンに対する集団間不安得点について比較するため，一元配置分散分析を行った結果，効果が有意であった（$F(3, 40)=4.88$, $p=.006$, $\eta_p^2=.27$）。Shaffer 法による多重比較を行った結果，二者条件の方が正バランス条件（$t(30)=3.64$, adjusted $p=.005$, $d=1.49$）と負バランス条件（$t(30)=1.16$, adjusted $p=.02$, $d=1.15$）よりも有意に集団間不安が低かった。同様の分析を顕在的態度（$F(3, 40)=0.63$, $p=.60$, $\eta_p^2=.04$），潜在的連合（$F(3, 40)=1.07$, $p=.37$, $\eta_p^2=.07$）についても行ったところ，有意な効

果は見られなかった。

考察

研究 10 では，自身と接触相手であるレズビアンとの共通の知り合いを交えた三者間での交流を想像する仮想接触の手続きが，レズビアンとの仮想接触の効果に及ぼす影響を検討した。その結果，集団間不安について，二者間での交流よりも有意に高まることが示された。顕在的態度と潜在的連合については，有意差は見られなかった。

集団間不安　三者間での仮想接触後の集団間不安が比較的強く見られた理由として，集団間不安の設問が二者間での交流を想定させ得るものであったことが考えられる。三者間で交流した正バランス条件と負バランス条件の参加者よりも，二者間で交流した二者条件の参加者の方が，二者場面での接触に対する不安は低減しやすいであろう。今後の実験においては，複数人でレズビアンと関わる際の集団間不安についても測定できれば，この考えについては検証可能であると考える。ただし，たとえこの考えが真であったとしても，三者間での仮想接触の効果が限定的なものであることに変わりはないことを留意しなければならないであろう。

統制条件の操作　顕在的態度と潜在的連合について，3 つの実験条件と，レズビアンについて単に考えた後にその内容を書き出すことを求められた統制条件との差が見られなかった。このうち顕在的態度については，統制条件の平均得点から 1*SD* を引くと理論的最低値である 1 を下回る床効果が見られている。このような統制条件で低い得点が見られる傾向は，レズビアンとの仮想接触を扱った研究 7 や，ゲイ男性との仮想接触を扱った研究 9 でも同様に見られている。Table 11.2 に示した通り，ATLG-J20 を作成し信頼性と妥当性の検討を行った研究 3 における ATG-J 得点，ATL-J 得点と見比べた場合にも，低い値が確認

Table 11.2
研究3，7，9，10のATLG-J20得点の平均値と標準偏差

	操作なし	レズビアン／ゲイ男性のことを考え，その内容を記述		
ATLG-J20	研究3	研究7	研究9	研究10
ATG-J	3.55(1.51)	-	2.78(1.43)	-
ATL-J	2.66(1.16)	2.11(0.72)	-	1.68(0.93)

注）括弧内は標準偏差。研究3について，ATG-J得点は男性参加者，ATL-J得点は女性参加者の得点。

されているように見られる。

研究 7，9，10 における ATLG-J20 得点の測定について，研究 3 における同測定との相違点は，測定前にレズビアンまたはゲイ男性について考えたこと，その内容を記述したこと，そして，集団間不安の測定を行ったことの 3 点である。このうち 2 番目の，レズビアンまたはゲイ男性について考えたことを記述する課題について，統制条件の参加者のレズビアンまたはゲイ男性に対する態度をポジティブにする手続きとなったことが考えられる。Son Hing, Li, & Zanna (2002)は，自身が偏見を有する外集団に対し偏見を持つことはネガティブなことであることを記述する行動は，自身の態度との間に認知的不協和を生じさせ，その不協和を解消するために態度をポジティブに変容させることを示している。本論文の 3 つの実験は，実験室で参加者 1 人または 2 人に対し実験者が 1 人という，実験後に実験者に回答が見られることが意識されやすいと思われる環境で行われた。統制条件の参加者らは，その環境下でレズビアンまたはゲイ男性について記述することを求められたため，社会的望ましさ反応によってレズビアンまたはゲイ男性が偏見の対象である旨の記述をし，その結果として認知的不協和を生じさせた可能性がある。

この解釈について示唆を得るため，研究 7，9，10 の統制条件の参加者につい

て，イメージ後にレズビアンまたはゲイ男性が偏見の対象であることを記述しているかを調べた。具体的には，カミングアウトや社会からの否定，アライと呼ばれるセクシュアルマイノリティについての理解者である身体性と性自認が一致する異性愛者の存在など，レズビアンまたはゲイ男性に対する社会的な偏見に関して言及しているか否かを確認した。加えて，自分は偏見を持たない，同性愛は自由である，同性愛に対する理解が必要であるなどの主張があるか否かも調べた。記述を Table 11.3，Table 11.4，Table 11.5 に示す。

研究 7 では統制条件の参加者 25 名中 17 名（68%）が偏見の存在について言及し，うち 6 名（24%）が自分は偏見を持っていない，あるいは持つべきではないことを主張した。研究 9 では統制条件の参加者 20 名中 12 名（60%）が偏見の存在について言及し，うち 4 名（20%）が自分は偏見を持っていない，あるいは持つべきではないことを主張した。研究 10 では統制条件の参加者 11 名中 5 名（45%）が偏見の存在について言及し，うち 4 名（36%）が自分は偏見を持っていない，あるいは持つべきではないことを主張した。

以上のように，レズビアンまたはゲイ男性について単に考えることを求められただけで，半数近い参加者が社会的な偏見の存在について言及し，およそ 3 人から 5 人に 1 人は自身が偏見を持っていない，あるいは持つべきではないことを主張した。日常においてレズビアンまたはゲイ男性についてカテゴリプライミングを受けた際，例えばテレビや SNS でレズビアンまたはゲイ男性という語を見かけたり，友人との話の中でそれらの語が出てきたりした際にも，半数近くの人々が偏見の話題に触れ，3 人から 5 人に 1 人は自身が偏見を持たない主張をするであろうか。また，床効果が見られるほどに態度がポジティブになるのであろうか。すなわち，日常におけるカテゴリプライミングと，本実験で行われたカテゴリプライミングとの間に乖離はなかったであろうか。

これらの疑問に関する詳細な分析を行うためには，本研究のサンプルサイズでは不足している。これらの言及や主張が認知的不協和を生じさせ偏見の低減に結び付くと考えられる以上，今回の実験で行った操作が適切であったかについては，以降の研究で考慮すべきである。

また，これらの評価は著者によって行われた。著者による確証バイアスの影響を避けるためには，実際に自由記述を用いた研究を行う際，その研究とは関係ない第三者複数名による評定が行われることが望ましい。

Table 11.3
研究7の統制条件参加者の記述

偏見言及	偏見否定	記述内容
なし	なし	髪の長いきれいな女性　やさしくて素直な人のイメージ　おしゃれに気をつかっている人。
なし	なし	・知的　・女子力が高そう（美容、料理に詳しそう）　・さびしがり屋　・感情を表に出しそう　・社交的　・男性とは仲良くなりにくそう。
なし	なし	・男性同性愛者よりはきれいなイメージ　・過去に男性との間に何かトラブルがあって男性はトラウマなのかな　・ホルモンバランスがかたよっている　・男性の性に対する感情がないのか
なし	なし	苦労することが多そうだと思ったが、異性愛者でもそこはあまり変わらないかもしれない。細やかなところに気を配れる人が多いイメージ
なし	なし	街を2人で歩いていても周りから見て友達としか思えない　手をつないだりキスしたりふつうの男女で行うようなことをするのかな？　子どもできない　あまり見かけないし、男性同性愛者の方がよく聞くきがする　どんな感じなのか想像
なし	なし	・漫画で見たイメージが強く、一方は本当に同性の相手を愛しているが、もう一方は実は異性に好きな相手がいるというむくわれないイメージ。　・片方ばかりが不幸せなイメージ。
なし	なし	・仲良し　・かっこいい系女子　・男っぽい
なし	なし	男性を生理的に受けつけない、一緒にいられない　男性に魅力を感じない　自分は男っぽい性格と思っている　自分の想いをつらぬいている　子どもはいらない、結婚できなくてもよい
あり	なし	感情を表に出せずに苦しんでいる　ショートカット，男らしい格こうをしている　表ではよく笑顔で振る舞っている　優しいイメージ　まわりを気にしている
あり	なし	もし自分が女性同性愛者なら、女性との関わりを避けてしまう気がします。今でこそLGBTという言葉を聞くようにはなりましたが、やはりまだ少数派なのできもち悪がられるんじゃないかと考えてしまうし、私が好きになった女の子も周りから何か言われるのではないかと思うからです。
あり	なし	いてもよくわからないだろうなと思う　莉犬という歌手を思いうかべた　男性同性愛者より表に出す人が少ない気がする　なんか美しいイメージがある
あり	なし	・男性同性愛者より気づかれにくそう　・男性同性愛者より認知・理解度が低くそう　・女性同性愛者の境界線が謎　・意外と近くにいそう　・男性同性愛者よりオープンにしている人が少なさそう　・あまり女性同性愛者の人をネット上でも見ない
あり	なし	表にあまり出さない　カミングアウトをしないイメージ　男性同性愛者に比べてテレビ等での露出が少ない。
あり	なし	優しい　あたたかい　幸せ　悩み　結婚できない　ピンク　仲良し　理解者　周りの目が気になる　恋愛
あり	なし	・社会的に昔よりは認められるようになってきた。　・メディアなどで多くの人に存在が知られるようになった　・最近、アニメやドラマの題材になることが増えた　・身近にも数名いる
あり	なし	・男性同性愛者よりも、認められていない感じがする。　・見た目を男性に寄せる人とそうでない人がいる。　・いつ自分が同性愛者であることを自覚するのか？　・日本は男性の同性愛者を認める感じが強いが海外は逆な気がする。
あり	なし	・男まさりな人　・あまり男性に対して好感を抱かない人　・友情の延長　・協力者　・自分たちの力で動こうとする人

偏見言及	偏見否定	記述内容
あり	なし	・この間ニュースで結婚が報道された　・身近ではない　・カミングアウトすることで見られる視線が変わってしまう。されることで見る目が少し変わってしまう。　・海外ではありそう　・漫画の中での出来事という印象　・女性特有の悩みや好み、傾向などがわかるのでよさそう
あり	なし	・性同一性障害　・周囲の目が辛そう　・普通ではない　・日常生活への支障はあるのか
あり	あり	人様が女性同性愛者であることを客観的に見ている限りでは**楽しく過ごしているようで良い印象が持てる**部分はあるが、もし自分の娘が女性同性愛者であった時は考え方が大いに変わってくる。一緒に家事をして、一緒に寝床につき
あり	あり	**・同性であろうと、恋は自由である。　・友人にもいるため特に何かを思ったことはない。**・自分に関わりがない（**自分は同性愛自体はどうでもよいと思っている**ため）なら、他者がどうであろうとかまわないので、**自由にしていい**と思う。
あり	あり	**・特に何とも思わない（賛否に関して）　・自由だと思う**　・社会からは色眼鏡で見られがち　・女子校には普通にいる　・女子同士でしかできない話も沢山できて楽しそう　・友情から発展したものか否か気になる
あり	あり	・ラインの絵文字にあること　・最近東京都内でも一部で結婚が認められ始めた。　・友達にも似たような人がいた。　**・「不快」や「変」といった偏見は全くない。**
あり	あり	・過去に何かあって男性が怖くなってしまったのだろうか。　・「男性同性愛者」より、「女性同性愛者」という言葉はしんとうしていない。　**・もっと理解しなくてはいけない。**
あり	あり	・私が好きな外国人アーティストが以前同性愛者（女性）だとカミングアウトしたこと　・前期のジェンダー論の授業で世田谷区で女性同士の結婚が認められたことについて教わったこと　・女性同士が愛しあっていることについて**賛成だと私は思う**ということ　・女性

注）下線部＝偏見言及（カミングアウト，社会からの否定・無理解，アライの存在），**太字**＝偏見否定（偏見を持たない、自由、存在の肯定、理解が必要）

Table 11.4

研究9の統制条件参加者の記述

偏見言及	偏見否定	記述内容
なし	なし	友達に同性愛者かなという人がいるので、その人が浮かんだのですがその人は、いつも男女みんなに優しいし、頼りがいがあるので、他の同性愛者ではない人とあまり普段の生活では差がないんだなと思いました。
なし	なし	・筋肉質　・毛深い　・HIV　・ヒゲ　・汚い　・男らしい　・性欲が強そう　・日焼け　・海にいそう
なし	なし	タンクトップを着るような、少し体かくの良い中年男性。男前というよりは、ナヨナヨした感じで、優しい顔。手の動きが多い。
なし	なし	・短髪　・ほどよく筋肉がついている　・女性の親友ができやすい　・女性の友人が多い　・フランクに話せる　・男性と女性のどちらの考え方も理解している　・外国人に多い　・親しみやすい　・男前だなと思う人ほど同性愛であると思う
なし	なし	顔や体の特徴は男性だが、行為や話し方など女性っぽくなる。化粧もし、着ている服も一般の男性と違っている。男性より女性のほうがうまく付き合える。共同的な話題も多くて、まるで女子達の一部分になっている。
なし	なし	・マイノリティー　・マッチョ　・きちょう面　・けっぺき　筋トレ好き　知人の同性愛者がイメージに浮かんだ。

偏見言及	偏見否定	記述内容
なし	なし	・中肉中背～筋肉質　・恋人つなぎをして歩いている　・個性がある
なし	なし	最近、男性であるが、髪をのばし、女性のような服装をしたりして話題になっているモデルの人がテレビに出ていた。その人の場合は対像が男性、女性どちらもということだった。その他にもSNSで自分の同じくらいの年の男性同士のカップルをみかけたりする。最近では昔よりも
あり	なし	・世論としてのイメージが悪い　・きもちわるい　・BL　・ありえない　・他人からの視線がきになる。　・あまりかんげいできない　・自分がせまられたら無理だと思う。　・そういう人がいることも知ってはいるが、同情できない
あり	なし	激しそう　BLの本を想定する　ノリが良い　周りからは冷たい視線をあびせられる　ルックスについては良し悪し関係ない
あり	なし	男として女が好きなのか、女として男が好きなのか　テレビなどから、ゲイであったり、3丁目、様々なタレントのイメージによって、社会として、受け入れられているもの。→その中でも違いがあったりするのは気にしていないイメージ。理解できないものは、人間は嫌悪感であったり、恐怖
あり	なし	・容姿については一概にそうだとは言えないが、比較的がっしりとした体形に描かれることが多い。　・社会の偏見を恐れ、恋愛
あり	なし	・社会的に立場がないようにみえる（肩身がせまい）　・最近、映画やドラマなどにおいて、男性愛についての表現が増えてきているように思える　・日本では結婚できない（出来るところもあった気が…）　・周囲から白い目で見られているように思える
あり	なし	・言いだしにくいもの　・他者に知られたら引かれてしまいそう　・意外と多くの人が同性愛者だったりしそうでも隠している　なかなか受け入れられないもの
あり	なし	渋谷区で同性愛者についての条令がつくられたニュースで男性二人が出演していた。そこから段々と同じような条令が他の区でもつくられるようになった。日本では寛容になりつつあるが海外では禁止されているところもある。
あり	なし	・優しい　・がたいがいい　・口調が女性　・理解されなそう　・親との対立　・性病
あり	あり	・そういった人もいる、という印象。　・オカマ・オネエもその一種→新宿二丁目。　・自分には無縁、**害が無ければ別にいるのはかまわない。**　・性癖が（少し）ゆがんだ結果？
あり	あり	・社会に認められていない。例として、俳優の〇〇さんがゲイだ、とカミングアウトされると、世間であまり良いうわさは聞くことはできないと思う。むしろ、何か悪いモノであるかのように言う人さえいそう。　**・もし自身の周りにそういった人がいたとしても、自分はあまり聞に**
あり	あり	最近は非定されていたが近ごろは改善されている　**男性愛であろうとそこにあるのが愛なのであればそれを非定してはならない**　昔の衆道があったように昔から存在している　ただし世間ではまだ気味悪いと感じる
あり	あり	**・本人たちの自由だから好きにしていいと思う。**　・仮に自分が対象になるなら少し困る。嫌悪感。　・世間的認知不足　・一般的には受け入れがたい

注）下線部＝偏見言及（カミングアウト，社会からの否定・無理解，アライの存在），**太字**＝偏見否定（偏見を持たない、自由、存在の肯定、理解が必要）

Table 11.5
研究10の統制条件参加者の記述

偏見言及	偏見否定	記述内容
なし	なし	女性同士ということで、友人間でも接触が多いので、世間的にはわかりづらい、もしくは他人に知られづらいイメージがある。一緒に暮らす際に異性とわかりあえない性別の質的な部分を無理にすり合わせる必要がないため、男女間の結婚よりやりやすいかと思う。同性であっても友人と恋愛の対象になる人は別人になると思う。
なし	なし	見た目とかは普通の方と変わらない。ボディタッチが多かったり距離感が近かったりする。何でかは分からないが、美人な女性がイメージされる。
なし	なし	・服装が男性っぽい（パンツをはいていることが多い）　・自分も恋愛対象として見られることがあるのかを考える　・友達として仲良くなるより先に上記のことを考える　・言われなければ気付かない　・女友達とならできることがぎこちなくなってしまいそう
なし	なし	ドラマで見たことがある同性愛者の方たちのシーン　男っぽい女性と女っぽい女性のペア　海外の同性愛者の女優さん
なし	なし	宝塚音楽学校で男役と女役が存在するように、どちらかがボーイッシュ、もう一方の人がガーリーなカップルのイメージがある。勝手な想像ではあるが女子校など、男の人がいない、もしくは少ない場所で同性を好きになる人が特に多い印象がある。
なし	なし	女子高出身者に多い。見た目が女性的だったり、かなり男性的だったりと様々。同性愛者であることを隠している場合、同性の友人が多い。積極的。同性からの信頼がある（隠している場合）。ボディタッチが多い。執着心が大きい。
あり	なし	同性愛者には地味な見た目の人もいれば派手な見た目の人もいる。<u>他者に隠れて同性と付き合っている</u>イメージがある。
あり	あり	・<u>世間からの目は厳しそう</u>　・かわいい　・女の子同士で手をつないでいても**変ではない**　・私の友人や姉も同性愛者だし、**全然気にしない**　・個人的にかわいいと思う　・外でも男性の同性愛者よりは目立たない　・結婚して子どもができなくても養子を取ればいい　・女性同士
あり	あり	私は同性愛者ときくと、<u>あまり世間一般には受け入れられていないようなイメージ</u>があります。<u>以前見たニュースで、同性愛者の方たちが暴力を受けたというひどい内容のものがありました</u>。**同性同士で愛しあっているからといって、人々にひなんされてしまうのは、どうかと思います。**
あり	あり	私は女性を恋愛対象としてみたことはないけれど、女性アイドルがとても好きなので憧れやその人をかわいい好きという気持ちはある。ただ、女性を肉体的な面で求めたりはないが、女性が男性を思う気持ちと変わらないと思っている。（きもいなどの）**低抗する気持ちはない。**周りにいると思うけど、実際に会ったことはない。
あり	あり	同性愛者だからといって、**差別はしない**と思う。**本人たちが幸せなら良い**と思います。自分が同性とつき合うかといわれたら分からないが、好きになった人が女性だったら、それもありえると思う。

注）<u>下線部</u>＝偏見言及（カミングアウト，社会からの否定・無理解，アライの存在），**太字**＝偏見否定（偏見を持たない、自由、存在の肯定、理解が必要）

第 12 章　第III部総合考察

第Ⅲ部では，イメージの利用可能性に関する先行研究の知見と集団間接触に関する先行研究の知見をそれぞれ応用した仮想接触について，効果にどのような変化がみられるかを検討した。研究 9 では，通常のゲイ男性との仮想接触が，ゲイ男性ステレオタイプに反するゲイ男性との仮想接触よりもその後の集団間不安を低減させること，ゲイ男性について単に考えることよりもその後の集団間不安を低減させるかもしれないことが示された。研究 10 では，自身，自身の知り合いの女性異性愛者，初対面のレズビアンの三者での仮想接触よりも，自身と初対面のレズビアンとの二者での仮想接触の方がその後の集団間不安が低いことが示された。両研究とも，仮想接触後の顕在的態度と潜在的連合の条件間差は見られなかった。

これらの結果は，どのような状況を想像するかによって仮想接触の効果が変容し得ることを示す。具体的には，想像する外集団のメンバーがステレオタイプに反していないこと，二者間での交流であることが，その後に比較的高い集団間不安が見られないようにするためには重要であることが言える。

ただし，研究 9 において仮想接触がカテゴリプライミングよりも集団間不安を低減し得るかもしれないことを示す有意傾向が見られたものの，第Ⅲ部ではカテゴリプライミングに対する仮想接触の優位性は示されなかった。しかし，研究 10 で統制条件の顕在的態度が床効果が見られるほどにポジティブであったことから，当該研究における統制条件の操作が，単なるカテゴリプライミング以上に態度をポジティブにする効果を有していることが考えられる。そのため，研究 5，6 と同様の，男性異性愛者または女性異性愛者との仮想接触を統制の操作とした場合の効果を確認するなど，将来の検討の余地は残る。

その他，研究の限界として以下の 2 点が考えられる。1 点目は，この論文で

はレズビアン及びゲイ男性についての強いステレオタイプを特定できていない以上，レズビアン及びゲイ男性ステレオタイプを呈示する強い操作を行うことは困難である。研究 4 で検討されたレズビアン及びゲイ男性それぞれのステレオタイプは，高いものでも中点程度のステレオタイプへの当てはまり度の得点であった。不一致条件では仮説通り通常の仮想接触との差が見られたことから，ポジティブなステレオタイプが特定されている他のマイノリティ集団を外集団として，あるいは，より強いレズビアン及びゲイ男性ステレオタイプを特定できた場合にはそのステレオタイプを用いて，同様の検討を再度行う価値はあるであろう。

2 点目は，三者で接触する際の集団間不安について，概念の定義や研究の意義，測定方法の検討がなされていないことである。本研究では，三者での仮想接触が二者間の集団間不安に及ぼす影響は二者間での仮想接触よりもネガティブであることは示された。しかし，複数人では会話しやすくても二人きりでは会話しにくい，という相手は，日常においても存在するであろう。また，顕在的態度や潜在的連合については二者間での仮想接触と三者間での仮想接触で差が見られなかった。これらのことから，三者で接触する際には二者で接触する場合とは異なる集団間不安があり，それが顕在的態度や潜在的態度への効果を媒介している可能性が考えられる。

上述の問題を解消することができた際には，研究 9 と同様の検討をレズビアンを接触対象として，研究 10 と同様の検討をゲイ男性を接触対象としてそれぞれ行うことも，更なる研究の発展のためには重要である。

第**IV**部

総合考察

第Ⅰ部ではレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見について，第Ⅱ部ではレズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する偏見に及ぼす効果について，第Ⅲ部ではレズビアン及びゲイ男性との仮想接触の効果に影響を及ぼす要因についてそれぞれ検討を行ってきた。この第Ⅳ部では，第Ⅰ部から第Ⅲ部までの研究についてまとめるべく，総合考察を行う。

第 13 章では，本論文における実証研究の総合考察を述べた。研究 1 から研究 10 までで得られた知見について日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見と，それに対する仮想接触の影響とに分けてまとめた。

第 14 章では，本論文の意義と今後の展望を述べた。レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見の研究としての意義，仮想接触の研究としての意義をそれぞれ述べた後に，今後の展望についてまとめた。

第 15 章では，本論文の結論を述べた。

第 13 章　研究結果の概要

本論文は,日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見に,レズビアン及びゲイ男性との仮想接触が及ぼす影響の研究を扱ったものである。この第 13 章では，本論文における研究結果の概要について，日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見と，それに対する仮想接触の影響とに分けてまとめた。

13.1　日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見

欧米をはじめとした諸外国では，30 年以上前からレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の研究が盛んに行われてきた。一方で日本では，異性愛主義的な社会制度や同性愛者の高い自殺率の報告（Hidaka et al., 2008）があるにもかかわらず，そのような研究は多くはなされてこなかった。

そこで本論文ではまず，レズビアン及びゲイ男性がそれぞれ非当事者，すなわち異性愛者から偏見を持たれているのか，そして偏見があるとするならばその偏見はどのような概念であるのかを明らかにすることとした。

研究 1 では，異性愛者の男女大学生は，黒人や精神疾患患者に対して偏見を持っているのと同様に，レズビアン及びゲイ男性に対しても偏見を持つことが示された。研究 2，研究 3 では，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度を測定するための尺度 ATLG-J が ATLG Scale（Herek, 1988; Herek & McLemore, 2010）の日本語訳によって開発され，その信頼性と妥当性が認められた。加えて，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度の構造が諸外国と同様の 1 因子構造で捉えられ，諸外国と同様の概念と関連することが示された。研究 4 では，それらの態度の背景にあると考えられるレズビアン及びゲイ男性ステレオタイプについての検討が試みられた。これらの研究から，日本

におけるレズビアン及びゲイ男性に対する偏見の低減方略について，諸外国の先行研究を参考とし検討していくことが可能なものであることが示唆された。

しかし，研究 5 以降のレズビアン及びゲイ男性との仮想接触研究では，偏見を低減する効果は限定的にしか見られなかった。この結果については，使用尺度の問題や統制条件の設定方法などによる説明が合理的であるように考えられはする。しかしそれらの説明は実証されておらず，先行研究が行われてきた諸外国におけるレズビアン及びゲイ男性に関する異性愛者の偏見と日本におけるそれらとの間に，仮想接触の有効性に関わる何らかの要因の差異が存在する可能性も現段階では否定できない。例えば，日本においてはレズビアン及びゲイ男性が社会的にいないものとして扱われている（風間, 2016; 小宮, 2015; 山下, 2016）ために，そもそも日本の異性愛者の大学生はレズビアン及びゲイ男性との交流を，あるいはレズビアン及びゲイ男性自体を想像することが，諸外国で同様のことを行うよりも困難であるかもしれない。レズビアン及びゲイ男性の不可視化の程度について実証的に国際比較が行われているわけではないため，これはあくまでひとつの棄却できない可能性でしかない。しかし，以降，レズビアン及びゲイ男性に対する偏見の研究を行っていく上では，このような態度やステレオタイプ以外に日本特有の要因がある可能性についても考慮に入れておく方が有益であるかもしれない。

ただし，仮に日本において異性愛者の大学生がレズビアンとゲイ男性を想像しにくかったとしても，部分的には仮想接触によって事前に期待された通りの態度変容が示された。このことも，日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見が，少なくとも仮想接触研究において，諸外国と同様の概念として扱えることの証左と言えよう。

13.2　レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見に対する仮想接触の影響

日本の日常においてレズビアン及びゲイ男性は顕在的ではないため，直接の接触は困難であると考えられる。そのような外集団に対する偏見の低減に有効であると考えられるのが，「外集団のメンバーとの社会的交流のメンタルシミュレーション（Crisp & Turner，2009）」である仮想接触である。レズビアン及びゲイ男性との仮想接触は，レズビアン及びゲイ男性に対する集団間不安を低減させ，態度をポジティブにする効果を有することが示されている。

研究5から研究7では，レズビアンとの仮想接触の効果について検討された。研究5ではレズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する行動をポジティブにする効果が，研究7ではレズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する態度をポジティブにする効果が示された。これらの結果は，レズビアンとの仮想接触に偏見を低減する効果があることを示していると言える。ただし，これらの結果は他の研究では再現されなかった。使用尺度の問題や統制条件の設定方法など，結果が見られなかった合理的な理由は考えられる。しかし，それらの技術的な問題を解決した上での再現性の検討に至らなかったことは研究の限界と言えよう。

集団間不安の低減について，本論文におけるレズビアンとの仮想接触では一貫して見られなかった。このことは，レズビアンとの仮想接触はレズビアンに対する集団間不安を低減しないこと，レズビアンとの仮想接触にレズビアンに対する態度をポジティブにする効果があるならば，その効果は集団間不安の低減を介さない効果であることが言えよう。

ただし，研究8における精神疾患患者との仮想接触はその後の精神疾患患者への集団間不安を低減することを示した。また，研究9，研究10においても，

仮想接触後の集団間不安には，部分的にではあるものの条件間で有意な差が見られた。これらのことから，仮想接触がその後の集団間不安に影響を及ぼすことは示唆されたと言える。

レズビアンとの仮想接触については集団間不安を低減する効果が見られなかった理由について，そもそも実験対象となった日本の女性異性愛者の大学生がレズビアンに対し強い集団間不安を抱いていないためであることが考えられる。そのように考えられる論拠は以下の 2 点である。1 点目に，研究 1 では，レズビアンに対する女性異性愛者の社会的距離や，女性異性愛者がレズビアンに対し恐いと考える程度について，男性に対するそれらと同程度であることが示されたことである。2 点目に，研究 5，6，7，10 のいずれにおいても，レズビアンに対する女性異性愛者の集団間不安は中点未満の平均値であったことである。

また，レズビアンに対する女性異性愛者の集団間不安は，レズビアンに対する女性異性愛者の態度を説明する要因としては考えにくいものであるかもしれない。研究 1 において，女性異性愛者は男性よりもレズビアンに対し有意に非好意的であり，有意に不快に感じていることを示している。また，研究 5，研究 7 においては，それぞれ行動，顕在的態度に仮想接触が影響を及ぼしたことも示されている。日本におけるレズビアンに対する女性異性愛者の態度がどのような要因によって規定されているのかが今後の研究で示されることで，レズビアンとの仮想接触がレズビアンに対する態度に及ぼす影響の具体的なメカニズムについても明らかにすることができるようになるであろう。

第 14 章　本論文の意義と今後の展望

第 14 章では，本論文の意義と今後の展望を述べた。レズビアン及びゲイ男性に対する偏見の研究としての意義，仮想接触の研究としての意義をそれぞれ述べた後に，今後の展望についてまとめた。

14.1　日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見の研究への寄与

本論文は，日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見の研究に，主に以下の 2 つの点で寄与すると考える。

1 つ目は，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の顕在的態度を測定する手段として，ATLG Scale（Herek, 1988; Herek & McLemore, 2010）を日本語訳した ATLG-J を開発し，その信頼性・妥当性を確認したことである。この開発によって，日本でレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度を研究することが容易となった。また，日本においても他国で行われてきたレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度の研究を追試したり，ATLG Scale が存在する言語圏の国や地域と日本とでレズビアン及びゲイ男性に対する態度を比較したりすることが可能となった。ATLG-J20 については，研究 7 において実験研究にも耐え得る尺度であることが示されている。今後，この尺度を用いた研究が数多く行われていくことが期待される。

2 つ目は，異性愛者が持つレズビアン及びゲイ男性ステレオタイプについて，共同性－作動性の次元を用いて表し，また具体的な性格特性語レベルでも示したことである。ジェンダーステレオタイプとの比較，具体的には高共同性－低作動性で示される伝統的女性ステレオタイプ，低共同性－高作動性で示される伝統的男性ステレオタイプとの比較によって，日本におけるレズビアン及びゲ

イ男性ステレオタイプの双方が伝統的女性ステレオタイプと部分的に一致することが示された。また，極めて強いステレオタイプは見られなかった一方で，ステレオタイプと不一致である性格特性については，研究 9 の実験においてゲイ男性との結び付きが弱いことを支持する結果が得られた。これらの性格特性や性格特性語は，今後の研究においても利用し得るものである。また，より当てはまりの強いレズビアン及びゲイ男性ステレオタイプを検討する上での叩き台ともなるであろう。

14.2　日本における仮想接触の研究への寄与

本論文は，日本における仮想接触研究に，主に以下の 3 つの点で寄与すると考える。

1 つ目は，本論文に掲載された研究が，著者が確認する限りでは日本における初の仮想接触研究の報告・論文となったことである。研究の結果や日本語での仮想接触教示，従属変数の測定方法などについては，今後の研究における参考となるであろう。

2 つ目は，レズビアン，ゲイ男性，精神疾患患者との仮想接触が偏見に及ぼす影響についての知見をもたらしたことである。仮想接触による偏見の低減は，部分的ではあるが確認された。今後の研究において，より効果の大きい仮想接触の手続きを考える際の参考となるデータと考察を提供できたと言えよう。また，これまで報告が少なかったレズビアン及びゲイ男性に対する仮想接触についての知見を増やしたことも，本研究の意義と言えよう。

3 つ目は，仮想接触の効果が部分的にしか見られなかったがゆえに，これまでの研究で扱われてきた仮想接触の手続きを改善するための多くの示唆が得られたことである。得られた示唆をもとに仮想接触を改善することで，仮想接触

を，レズビアン及びゲイ男性などのマイノリティ集団に対する偏見を低減するためのより頑健な手続きとすることが可能であるかもしれない。具体的な示唆や展望については次節で触れる。

14.3　今後の展望

本章でここまで述べた通り，本論文は日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する態度研究と，日本における仮想接触研究の双方の先駆けとも言える研究の報告である。それゆえ，今後さまざまな研究の展開が考えられる。

本論文で開発した ATLG-J は，仮想接触研究以外の実験や調査にも用いられていくことで，更なる妥当性の論拠が集まっていくことが望ましい。そのことは，レズビアン及びゲイ男性に対する態度がどのような概念であるのかについての知見が増えていくことでもある。レズビアン及びゲイ男性に対する偏見はどのような背景に基づいて形成されているのかが明らかになることで，その偏見をどのように低減していくかの検討の余地は更に広がるであろう。

仮想接触研究については，方法論について更なる検討と改善の余地がある。まず，本論文では，どのような外集団のメンバーを想像するかによって，その後の外集団のメンバーに対する集団間不安に影響が及ぶことが示された。研究 9 からは，この影響は仮想接触相手の想像しやすさによって説明されることが示唆されている。このことからは，どのような場面を想像するか，どの程度の接触を想像するかなど，仮想接触の想像しやすさに関わり得る仮想接触教示についても，どのような外集団のメンバーを想像するかということと同様に考慮する余地があると言えるであろう。

また，仮想接触研究における統制条件をどのように設定するかも本研究の課題であった。仮想接触とカテゴリプライミングとでの効果の比較をする際に研

究 10 で見られたような別の要因の影響によるものであると考えられる床効果が生じないようにするためには，より単なるカテゴリの呈示に近い形での操作方法を考える必要がある。

仮想接触の効果については，本研究で見られた効果が本研究で扱っていないマイノリティ集団を外集団とした場合にも見られるか，実際の接触と比較した場合の効果や，実際に接触した際の行動に及ぼす効果はどのようなものか，行う人物の性格特性による効果の差はあるのかなど，これからの研究の可能性は広い。

加えて，本論文の研究では日本の大学生を対象としていた。より上の世代，より下の世代においてもこの研究と同様の結果が見られるかどうか，という一般化可能性の検討も，レズビアン及びゲイ男性に対する差別と偏見を低減していくためには重要であると考える。

仮想接触の長所の一つは，時と場所を選ばず誰でも実施が可能であるその簡便さである。実験室環境を出て広く用いられ，さまざまなマイノリティ集団に対する偏見の問題を解消するための一助となることが，仮想接触研究における最終的な目標であると考える。

第 15 章　結論

本論文の目的は，日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の大学生の偏見に，レズビアン及びゲイ男性との仮想接触が及ぼす影響を調べることであった。検討の結果，主に以下の 2 つの知見が得られた。

第一に，日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度は，これまで同様の先行研究が行われてきた諸外国と同様に扱うことが可能であることが示されたことである。レズビアン及びゲイ男性に対する態度はそれぞれ 1 因子構造で測定することが可能であること，レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の態度の中でもゲイ男性に対する男性異性愛者の態度が最もネガティブであることが示された。

第二に，レズビアン及びゲイ男性との仮想接触が，レズビアン及びゲイ男性に対する日本における異性愛者の大学生の偏見に影響を及ぼすことが示されたことである。レズビアンとの仮想接触によってレズビアンに対する女性異性愛者の態度や行動がポジティブになることが,一部の研究から示唆された。また，レズビアン及びゲイ男性とのどのような接触を想像するかによって，その後のレズビアン及びゲイ男性に対する集団間不安が変化し得ることも示唆された。

これらの知見から，日本におけるレズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の大学生の偏見は，諸外国におけるそれらと研究上で同様に扱うことが可能であること，仮想接触によって低減され得ることが示唆された。

引用文献

Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Cambrdige, Mass: Addison-Wesley.

Aronson, E. (2012). *The social animal* (11th ed.). New York: Worth Publishers. （アロンソン，E. 岡 隆（訳）(2014). ザ・ソーシャル・アニマル[第 11 版]―人と世界を読み解く社会心理学への招待― サイエンス社

Bakan, D. (1966). *The duality of human existence*: Isolation and communion in western man. Beacon Press.

Bigler, R. S., & Hughes, J. M. (2010). Reasons for skepticism about the efficacy of simulated social contact interventions. *American Psychologist*, *65*, 132-133.

Blashill, A. J., & Powlishta, K. K. (2009). Gay stereotypes: The use of sexual orientation as a cue for gender-related attributes. *Sex Roles*, *61*, 783-793.

Cardenas, M., & Barriebtis, J. E. (2008). The Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale (ATLG): Adaptation and testing the reliability and validity in Chile. *Journal of Sex Research*, *45*, 140-149.

Crisp, R. J., & Turner, R. N. (2009). Can imagined interactions procedure positive perceptions? *American Psychologist*, *64*, 231-240.

Darley, J. M., & Berscheid, E. (1967). Increased liking as a result of the anticipation of personal contact. *Human Relations*, *20*, 29-40.

Dermody, N., Jones, M. K., & Cumming, S. R. (2013). The failure of imagined contact in reducing explicit and implicit out-group prejudice toward male homosexuals. *Current Psychology*, *32*, 261-274.

Eagly, A. C., & Chaiken, S. (1998). Attitude structure and function. In Gilbert, D. T., Fiske, S. T., & Lindzey, G. (Eds.), *The handbook of social psychology*, *Vol 1* (4th

ed.) (pp.269-322), New York: Oxford University Press.

Fiske, S. T. (1998). Stereotyping, prejudice, and discrimination. In Gilbert, D. T., Fiske, S. T., & Lindzey, G. (Eds.), *The handbook of social psychology*, *Vol 2* (4th ed.) (pp.357-411), New York: Oxford University Press.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, *82*, 878-902.

Frye, G. D. J., Lord, C. G., & Brady, S. E. (2012). Attitude change following imagined positive actions toward a social group: Do memories change attitudes, or attitudes change memories? *Social Cognition*, *30*, 307-322.

Garcia, S. M., Weaver, K., Moskowitz, G. B., & Darley, J. M. (2002). Crowded minds: the implicit bystander effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, *83*, 843-853.

Gelbal, S., & Duyan, V. (2006). Attitudes of university students toward lesbians and gay men in turkey. *Sex Roles*, *55*, 573-579.

Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The Ambivalent Sexism Inventory: Differentiating Hostile and Benevolent Sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, *70*, 491-512.

Glick, P., Fiske, S. T., Mladinic, A., Saiz, J. L., Abrams, D., Masser, B., Adetoun, B., Osagie, J. E., Akande, A., Alao, A., Brunner, A., Willemsen, T. M., Chipeta, K., Dardenne, B., Dijksterhuis, A., Wigboldus, D., Eckes, T., Six-Materna, I., Exposito, F., Moya, M., Foddy, M., Kim, H., La,eiras, M., Sotelo, M. J., Mucchi-Faina, A., Romani, M., Sakalli, N., Udegbe, B., Yamamoto, M., Ui, M., Ferreira,

M. C. & Lopez, W. L. (2000). Beyond Prejudice as Simple Antipathy: Hostile and Benevolent Sexism Across Cultures. *Journal of Personality and Social Psychology*, *79*, 763-775.

Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-Esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, *102*, 4-27.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, *74*, 1464-1480.

Greenwald, A. G., Nosek, A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, *85*, 197-216.

原田 雅史 (2005). セクシュアル・マイノリティとヘテロセクシズム：差別と当事者の心理的困難をめぐって（研究ノート） ジェンダー研究: お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報, *8*, 145-157.

Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. New York: John Wiley and Sons.

Herek, G. M. (1984). Attitudes toward lesbians and gay men: A factor analytic study. *Journal of Homosexuality*, *10(1/2)*, 39-51.

Herek, G. M. (1988). Heterosexuals' attitudes toward lesbians and gay men: Correlates and gender differences. *The Journal of Sex Research*, *25*, 451-477.

Herek, G. M. (1990). The context of anti-gay violence notes on cultural and psychological heterosexism. *Journal of Interpersonal Violence*, *5*, 316-333.

Herek, G. M. (1994). Assessing heterosexuals' attitudes toward lesbians and gay men: A review of empirical research with the ATLG scale. In Greene, B. & Herek, G.

M. (Eds.). *Lesbians and gay psychology: Theory, research and clinical applications* (pp. 206-228). Thousand Oaks, CA: Sage Publications.

Herek, G. M., & Capitanio, J. P. (1999). Sex differences in how heterosexuals think about lesbians and gay men: evidence from survey context effects. *The Journal of Sex Research*, *36*, 348-360.

Herek, G. M., & Glunt, E. N. (1991). AIDS-related attitudes in the United States: A preliminary conceptualization. *The Journal of Sex Research*, *28*, 99-123.

Herek, G. M., & McLemore, K. A. (2010). Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale. *Handbook of Sexuality-Related Measures 3rd Edition*, pp.415-417, Thousand Oaks, CA: Sage Publications.

日高 庸晴・Don Operario・岳中 美江・大森 佐知子・市川 誠一・白阪 琢磨（2008）わが国における都会の若者の自殺未遂経験割合とその関連要因に関する研究－大阪の繁華街での街頭調査の結果から－ http://www.health-issue.jp/suicide/（2019 年 9 月 5 日）

Hidaka, Y., Operario, D., Takenaka, M., Omori, S., Ichikawa, S., & Shirasaka, T. (2008). Attempted suicide and associated risk factors among youth in urban Japan. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, *43*, 752-757.

堀川 佑惟・岡 隆（2018）. Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale 日本語 20 項目版（ATLG-J20）の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, *34*, 85-93.

堀川 佑惟・岡 隆（2019）. ATLG Scale 日本語短縮版の作成と信頼性・妥当性の検討 日本大学心理学研究, *40*, 42-51.

堀川 佑惟・岡 隆（2019）. レズビアンとの仮想接触における言語的・行動的測度の順序効果の検討の試み 日本大学心理学研究, *40*, 38-41.

IAT Corp. (2017). IAT テスト ホームページ

https://implicit.harvard.edu/implicit/japan/ (2017 年 1 月 7 日)

IAT Corp. (2018). IAT テスト ホームページ https://implicit.harvard.edu/implicit/japan/ (2018 年 10 月 18 日)

Islam, M. R., & Hewstone, M. (1993). Dimensions of contact as predictors of intergroup anxiety, perceived out-group variability, and out-group attitude: An integrative model. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *19*, 700-710.

風間 孝（2016）. 「寛容」な文化における同性愛嫌悪 国際教養学部論叢, *8*, *2*, 1-16.

吉川 徹 (1998). 階層・教育と社会意識の形成 ミネルヴァ書房

北村 俊則・鈴木 忠治 (1986). 日本語版 Social Desirability Scale について 社会精神医学, *9*, 173-180.

Kite, M. E., & Whitley, B. E., Jr. (1996). Sex differences in attitudes toward homosexual persons, behaviors, and civil rights: A meta-analysis. *Personality & Social Psychology Bulletin*, *22*, 336-353.

小宮 明彦（2015）. 同性愛嫌悪をめぐる日英（教育）文化比較—明示的差別の国イギリスと黙示的差別の国日本— 教育学研究室紀要：「教育とジェンダー」研究, *12.0*, 30-41.

LaCosse, J., & Plant, E. A. (2019). Imagined contact with famous gay men and lesbians reduces heterosexuals' misidentification concerns and sexual prejudice. *European Journal of Social Psychology*, *49*, 141-156.

Louderback, L. A., & Whitley, B. E. (1997). Perceived erotic value of homosexuality and sex-role attitudes as mediators of sex differences in heterosexual college students' attitudes toward lesbians and gay men. *The Journal of Sex Research*, *34*, 175-182.

Mazziotta, A., Mummendey, A., & Wright, S. C. (2011). Vicarious intergroup contact effects: Applying social-cognitive theory to intergroup contact research. *Intergroup Relations*, *14*, 255-274.

McDermott, D. T., Morrison, T. G., McDonagh, L. K., & O'Doherty, A. (2012). A test of prejudice reduction towards lesbian women: The effects of imaginary contact on explicit and implicit homonegativity. In T. G. Morrison, M. A. Morrison, D. T. McDermott, & M. Carrigan (Eds.), *Sexual minority research in the new millennium*. Hauppauge, New York: Nova Science Publishers.

Meerendonk, B. V. D., Eisinga, R. & Felling, A. (2003). Application of Herek's attitudes toward lesbians and gay men scale in the Netherlands. *Psychological reports*, *93*, 265-275.

Miles, E., & Crisp, R. J. (2014). A meta-analytic test of the imagined contact hypothesis. *Group Process & Intergroup Relations*, *17*, 3-26.

Miller, A. K., Markman, K. D., Wagner, M. M., & Hunt, A. N. (2013). Mental simulation and sexual prejudice reduction: The debiasing role of counterfactual thinking. *Journal of Applied Social Psychology*, *43*, 190-194.

宮澤 仁・福富 護 (2008). 同性愛者に対する態度とメディア・リテラシーとの関連 東京学芸大学紀要総合教育科学系, *59*, 211-221.

Nagoshi, J., Adams, K., Terrell, H., Hill, E., Brzuzy, S. & Nagoshi, C. (2008). Gender differences in correlates of homophobia and transphobia. *Sex Roles*, *59*, 521-531.

西 和久 (2000). マイナリティの交渉スタイルが個人のエイズに対する態度･行動に及ぼす影響 社会心理学研究, *15*, 178-188.

沼崎 誠・小野 滋・高林 久美子・石井 国雄（2006）. Sequential priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の予備的検討 首都大学東京 東京都

立大学 人文学報, *369*, 21-52.

Nyberg, K. L., & Alston, J. P. (1977). Homosexual labeling by university youths. *Adolescence*, *12*, 541-546.

Oe, T., & Oka, T. (2003). Overcoming the ironic rebound: Effective and ineffective strategies for stereotype suppression. In Yang, K. S., Huang, K. K., Pederson, P. B., & Daibo, I (Eds.), *Progress in Asian Social Psychology*: *Vol. 3*. Conceptual and empirical contributions. London: Praeger. PP. 233-248.

及川 晴・及川 昌典・青林 唯 (2009). 感情誤帰属手続きによる潜在目標の測定 ―潜在および顕在目標による日常行動の予測― 教育心理学研究, *57*, 192-200.

Payne, B. K., Cheng, C. M., Govorun, O., & Stewart, B. D. (2005). An inkblot for attitudes: Affect misattribution as implicit measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, *89*, 277-293.

Pettigrew, T. F., & Tropp, L. R. (2006). A meta-analytic test of intergroup contact theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, *90*, 751-783.

Plant, E. A., & Devine, P. G. (2003). The antecedents and implications of interracial anxiety. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *29*, 790-801.

Sakalli, N. (2002). The relationship between sexism and attitudes toward homosexuality in a sample of Turkish college students. *Journal of Homosexuality*, *42*, *3*, 53-64.

下津 咲絵・坂本 真士（2010）. 精神障害に対する態度, 偏見, Link スティグマ尺度 臨床精神医学, *39*, 増刊号, 114-120.

下津 咲絵・坂本 真士・堀川 直史・坂野 雄二(2006). Link スティグマ尺度日本語版の信頼性・妥当性の検討 精神科治療学, *21*, 521-528.

Son Hing, L. S., Li, W., & Zanna, M. P. (2002). Inducing hypocrisy to reduce prejudicial responses among aversive racists. *Journal of Experimental Social Psychology, 38*, 71-78.

Stathi, S., & Crisp, R. J. (2008). Imagining intergroup contact promotes projection to outgroups. *Journal of Experimental Social Psychology*, *44*, 943-957.

Stephan, W. G., & Stephan, C. W. (1985). Intergroup anxiety. *Journal of Social Issues*, *41*, 157–175.

鈴木 淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成 心理学研究, *65*, 34-41.

田戸岡 好香･村田 光二(2010). ネガティブなステレオタイプの抑制におけるリバウンド効果の低減方略：代替思考の内容に注目して 社会心理学研究, *26*, 46-56.

高林 久美子・沼崎 誠・小野 滋・石井 国雄（2008）. 活性化した自己表象が女性サブカテゴリ―への偏見とステレオタイプ化に及ぼす効果 心理学研究, *79*, 372-378.

谷 伊織（2008）. バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版（BIDR-J)の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, *17*, 18-28.

Turner, R. N., Crisp, R. J., & Lambert, E. (2007). Imagining intergroup contact can improve intergroup attitudes. Group Process & Intergroup Relations, *10*, 427-441.

Turner, R. N., & West, K. (2011). Behavioral consequences of imaging intergroup contact with stigmatized outgroups. Group Process & Intergroup Relations, *15*, 193-202.

Turner, R. N., West, K., & Christie, Z. (2013). Out-group trust, intergroup anxiety,

and out-group attitude as mediators of the effect of imagined intergroup contact on intergroup behavioral tendencies. Journal of Applied Social Psychology, *43*, E196–E205.

宇井 美代子・山本 眞理子 (2001). Ambivalent Sexism Inventory (ASI) 日本語版の信頼性と妥当性の検討 日本社会心理学会第 42 回大会発表論文集, 300-301.

和田 実 (1996). 青年の同性愛に対する態度: 性および性役割同一性による差異 社会心理学研究, *12*, 9-19.

和田 実 (2008). 同性愛に対する態度の性差—同性愛についての知識,同性愛者との接触,およびジェンダー・タイプとの関連— 思春期学, *26*, 322-334.

West, K., & Greenwald, K. (2016). Beware of “reducing prejudice”: imagined contact may backfire if applied with a prevention focus. *Journal of Applied Social Psychology*, *46*, 583-592.

West, K., Husnu, S., & Lipps, G. (2015). Imagined contact works in high-prejudice contexts: Investigating imagined contact's effects on anti-gay prejudice in Cyprus and Jamaica. *Sexual Research and Social Policy*, *12*, 60-69.

Whitley, B. E., Jr., & Ægisdóttir, S. (2000). The gender belief system, authoritarianism, social dominance orientation, and heterosexuals' attitudes toward lesbians and gay men. *Sex Roles*, *42*, 947-967.

Worthen, M. F. (2013). An argument for separate analyses of attitudes toward lesbian, gay, bisexual men, bisexual women, MtF and FtM transgender individuals. *Sex Roles*, *68*, 703-723.

Wright, S. C., Aron, A., McLaughlin-Volpe, T., & Ropp, S. A. (1997). The extended contact effect: Knowledge of cross-group friendships and prejudice. *Journal of*

Personality and Social Psychology, *73*, 73-90.

山下 梓 (2016). セクシュアルマイノリティの権利保障をめぐる世界と日本の動き 針間克己（編）こころの科学第 189 号 日本評論社 pp.14-20.

山本 真菜・岡 隆（2016）. 優位性に基づく女性ステレオタイプの分類 日本大学心理学研究, *37*, 50-57.

山本 真菜・岡 隆 (2018). ステレオタイプ抑制における反ステレオタイプと非優位ステレオタイプの役割 心理学研究, *89*, 12-21.

謝辞

本学位論文の執筆まで,多くの方々からのご協力を得たことに感謝致します。

博士前期課程からご指導頂き，本論文の主査である岡隆先生（日本大学）につきましては，5 年間お忙しい中大変ご迷惑をお掛け致しましたことを深くお詫び申し上げます。そして心より感謝申し上げます。

坂本真士先生（日本大学）ならびに羽生和紀先生（日本大学）につきましては，ご多忙の中本論文の副査を務めて頂き，誠にありがとうございました。丁寧にご指導していただきましたお陰で，より良い博士論文を執筆することができたと自負しております。坂本真士先生につきましては，岡研・坂本研合同リサーチミーティングでも 5 年間大変お世話になりました。

この 5 年間で岡研究室・坂本研究室に所属されていた皆様には，リサーチミーティングにて研究について多くのご指摘・ご質問を頂けましたことをお礼申し上げます。

ATLG Scale の逆翻訳を研究 2 にて務めて頂いた平安山悠子先生（国際医療福祉大学大学院・当時）ならびに研究 3 にて務めて頂いた梁昱茜先生（日本大学大学院・当時）をはじめとした研究協力者の皆様，本論文の研究の為に貴重なお時間を割いていただき，誠にありがとうございました。

最後に，調査・実験，そしてそれらの参加者募集の場を提供してくださった先生方，そして調査・実験にご参加頂きました皆様のご協力がなければ，この論文を執筆することは叶いませんでした。また，参加希望者の中にはセクシュアリティや精神科通院歴等を理由にご参加いただけなかった方も多数居られました。私の研究に対する皆様のご厚意に感謝申し上げます。